藤田健児スケッチブック

西豪州・コサック追想

（大正一四年～昭和一三年）

Kenji Fujita's Sketchbook

Memories of Cossack, Western Australia
(1925~1938)

藤田健児スケッチブック

西豪州・コサック追想

（大正一四年～昭和一三年）

真珠貝（シロチョウガイ）

Kenji Fujita's Sketchbook

Memories of Cossack, Western Australia
(1925~1938)

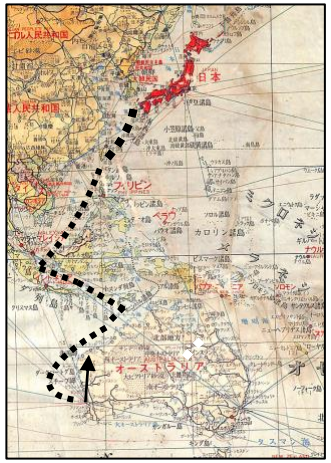
目　次

一　藤田健児スケッチブックと回想記への誘い
二　スケッチブックの画像
三　藤田健児のコサック回想記
四　藤田健児太平洋戦争軍属としての従軍記
　　―ニューギニア・ウェワク―
五　コサック探訪記
あとがき

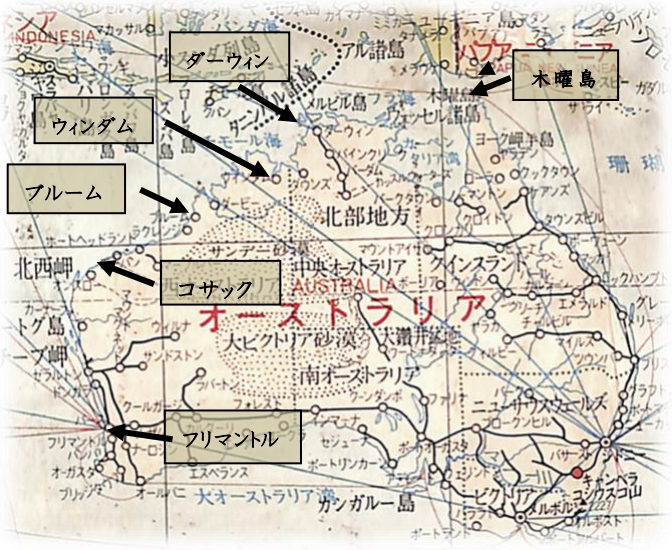
左の地図は藤田健児氏がスケッチブックの一ページに貼りつけた世界図から切り取った。孫たちが使った教材の地図帳の一部である。見にくいかもしれないが、あえてそのような試みをした。そのことはスケッチブックの紹介文をお読みになれば、おわかりいただけるだろう。ご自身が渡航したおり、あるいは帰国のおりのルートをたどり、それぞれの地の情景を思い浮かべ、また、オーストラリア北西部の海岸線を食い入るようにながめておられたかもしれない。しかし、オーストラリアのなかに、木曜島・ダーウィン・ブルーム・ポートヘッドランド・オンスロー・ローバーン・フリマントルの地名は確認できるとしても、残念なことに、肝心のコサックの名前を見つけることはできない。

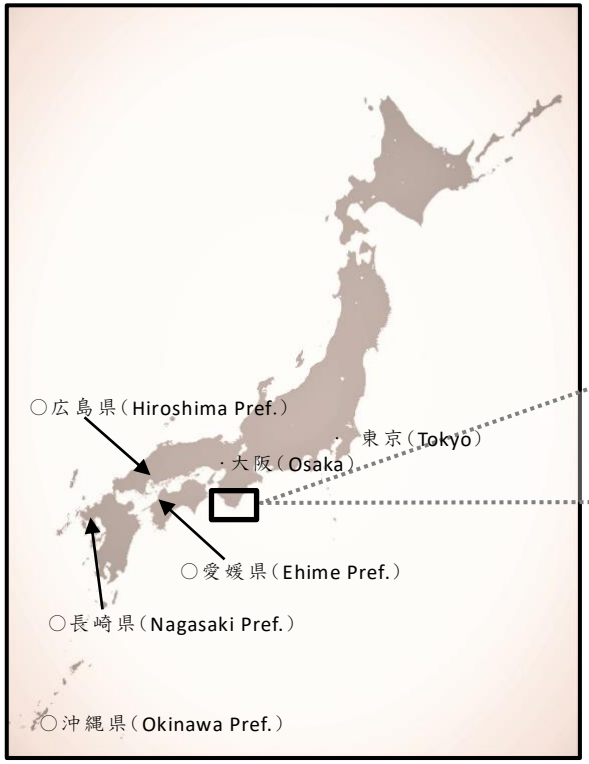
藤田氏コサックへの航路

神戸―上海―香港―シンガポール―バタビア（ジャカルタ）―ウィンダム―ブルーム―フリマントル―コサック



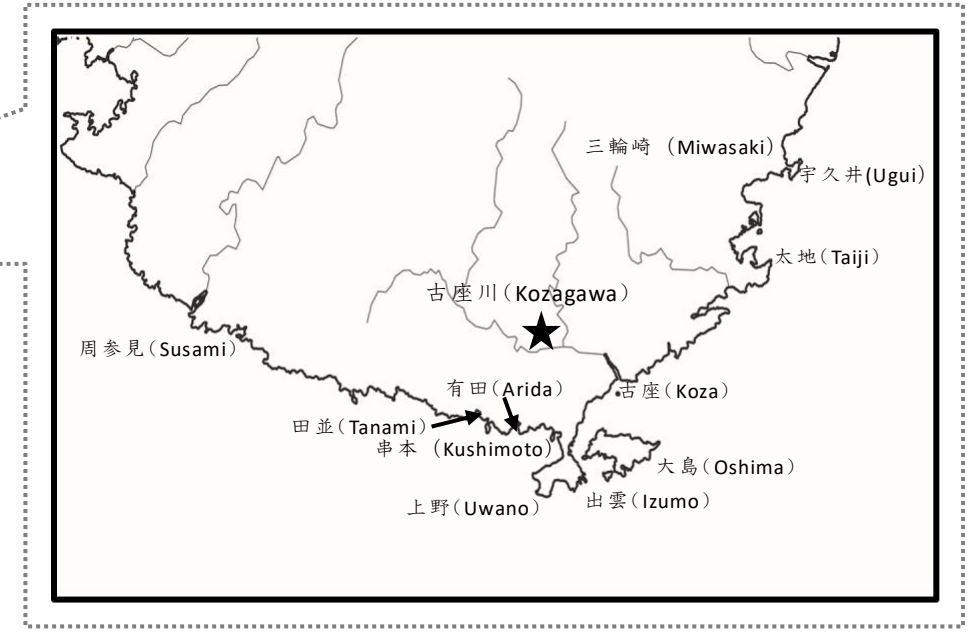
藤田氏のコサックへの航路


ダーウィン
木曜島
ウィンダム
ブルーム
コサック
フリマントル
INDONESIA
アル諸島
メルビル島
ウェッセル諸島
ヨーク岬半島
北部地方
北西岬
中央オーストラリア
AUSTRALIA
クインスランド
オーストラリア
大ビクトリア砂漠
南オーストラリア
ニューサウスウェールズ
シドニー
キャンベラ
コシウスコ山
ビクトリア
メルボルン
大オーストラリア湾
カシガルー島
エスペランス
オーガスタ
ブリッジ
オールバニ
ポートリンカー
ポートマット
ポートヘッドランド
サンデー砂漠
ウィルバー
ヤーロー
ヤーロー
ヤーロ



渡豪関係者の主な出身県（○）

和歌山県南部の豪州真珠貝採取漁業従事者の出身村と藤田健児氏の出身地（★）



一　藤田健児（ふじたけんじ）スケッチブックと

回想記への誘い

藤田健児スケッチブックと回想記への誘い

松本　博之

二〇一一年秋、私ははじめて故・藤田健児氏のスケッチブックと回想記に出会った。和歌山県串本町が地域の歴史的遺産の回顧を図るために串本町文化ホールで「木曜島パネル展」を開催したおりのことである。その展示会のために、串本町はリーダーの濱口自生氏を中心に数年をかけ、住民の協力を得て、明治期から太平洋戦争前後にかけ、オーストラリア北部の真珠貝採取業で活躍した地域の人たちの遺品を収集したのである。そのなかに藤田氏のスケッチブックと回想記があった。

それはカメラでデジタル化された画像であった。一目見たときから、そのいく枚かの画像が脳裏に焼きついた。和歌山県南部の関係者、とくにご遺族たちの話を聞いていると、こうした当時の記録類がご本人の逝去にともなって処分され、世代を追うごとに姿を消していく状況下にあった。戦後すでに七〇年あまりの歳月を経ておりやむを得ないことではあるが、それぞれの方の生きた証しが消え去ることはしのびない。六千人余りといわれる和歌山県南部出身の従事者それぞれの方には各々の経験があり、この記録で代表させるわけにはいかないけれども、あとで述べるように出色の貴重な記録と思われる。そこで、ご遺族の賛同を得て、研究仲間の友人たち、串本町教育委員会とともに、ここに藤田氏の記録を公刊する運びとなった。書籍としての資料化のために、あらためて和歌山県東牟婁郡古座川町のご遺族のもとを訪れ、原本のスケッチブック画像をスキャンさせていただいた。それと同時に、短時間ではあったが、ご遺族の藤田正規・稔子夫妻から著者の人生のエピソードをいくつかお聞きすることができた。以下、そのエピソードもふくめ、スケッチブックと回想記紹介の序としたい。

生きた証しとしての記録

ご遺族からスケッチブックと回想記作成のいきさつをお聞きしたとき、これらの遺品は、大正末から昭和一〇年代初頭、オーストラリア北西部の熱帯海域で過ごした藤田健児氏の人生の一つの証しだという思いを強くした。十五年間におよぶオーストラリア北西部における船上や基地コサックでの困難な生活もさることながら、たんに若き日の記録というよりも、そこにはその後の人生の過程を経て、一種、昇華された藤田氏の原風景のようなものの一端が描き出されている。回想記の末尾に帰国のおり抱かれた「紀州航路で家についたが、高い山もない広い国から十五年振りの故郷は山が迫ってくる様で、こんなに狭かったのかと疑ったが、息苦しい位だった。またこれから長い人生をこの狭い国で暮さねばならぬが……」との一文、その後の人生でずっと心の片隅のどこかにその思いを仕舞いこまれてきたのであろう。

そうした経験からすでに半世紀ほどの歳月を経ていたにもかかわらず、八〇歳を迎えるころになって、これほど鮮明に、どうして記憶の澱から引き出すことができたのであろうか。個人的な資質も大いにかかわるのであろうが、真珠貝採取業時代の無味乾燥な記録をこえて、そ

の観察眼とそれを写し取る良質なフィルター、さらにその巧みな表現を見ると、人間の経験とはたんに脳裏の片隅に仕舞いこまれたものではないように思われる。藤田氏のその後の人生のエピソードをご遺族からお聞きして、ますますその感を強くした。つまり、意識することもなく生身の身体に刻まれた経験の深さ、その身体経験を帰国後もくり返すことが記憶をつなぎとめ、鮮明化させ、晩年になってもほとばしりでたのである。研究仲間ばかりか、これまでいく人かの知り合いに一目見てもらったときの、口をそろえたような感動のことばがそれを物語っている。

とは言うものの、これらの記録類は、藤田氏がかならずしも何らかの公表を意図したものではない。スケッチブックにせよ回想記にせよ、次女の娘さんに向けた一人語りなのだ。何の衒いもない、淡々とした表現と語り口にかえって惹きつけられる。また、絵心のある友人に見てもらうと、スケッチブックの水彩絵具の載せ方は素人裸足であり、筆の運びに一切ためらいが感じられないと。ただ、残念なことに、二〇一一年の水害で水に浸かり、現状は、当初の色彩が色褪せ、かなりの染みも浮き出ている。しかし、多少原色への色彩修正をほどこせるとしても、芸術作品としてではなく、あくまでアーカイブとして残し、関心のある方に活用してもらうことが今回の第一の目的である。

その活用という点でもう一つ付けくわえておこう。今回共同作業を進めた鎌田、田村、村上の三人が二〇一七年の九月、現地調査のために藤田氏の真珠貝採取基地であったコサック(Cossack)へ出かけた。コサックはもはや廃町状態(Ghost town)なのだが、真珠貝に託した「真珠祭り」の開催を通じて新たに地域文化の融合をはかろうとするリーダーや、パース、フリマントル、さらにはキャンベラの研究者たちのあいだでも、藤田氏の記録に大いに関心が寄せられたのである。それで、仲間内で相談し、このアーカイブ化の作業にあたり、スケッチブックの書き込み文の翻刻とならんで、英訳文を併記することにした。真珠貝採取業に関する民間資料の少ないなかにあって、より広範な活用の道が拓けると思ったからである。

スケッチブックの図柄

それでは、スケッチブック図柄の二、三の特徴を記してみよう。まず、その表現の的確さである。スケッチブックには基地のコサックから南西部エクスマウス湾(Exmouth Bay)まで、直線距離にしてほぼ四〇〇キロあまりの海岸線や付近の島々が描かれている。主要な真珠貝漁場のあった海岸線の輪郭や島々との距離感および相対的な位置関係は、今日の衛星写真や地図と照らし合わせてみても、たとえばモンテベロー諸島(Montebello Islands)の解説文に示したように、きわめて正確である。ご遺族へのインタビューでは確認できなかったが、藤田氏自身、おそらく何らかの海図ないし地形図のような地図めいたものを持ち帰り、参照されながら描かれたのではないかと推察される。たんに記憶に頼られたとすれば、まさに驚異というほかはない。

観察眼と表現力　第二には、藤田氏の観察眼と表現力である。スケッチブックのいく枚かが奥行きを鳥瞰する形式で立体的な絵図風に表現されていることである。コサック集落の全景図、ダンピア群島(Dampier Archipelago)の北端を迂回し潮流の激しい水道へ向かうフライポン(Flying Foam Passage)出入口付近、広漠とした平地が広がるだけのビーゼン(Beadon)

やオンスロー(Onslow)の風景をたんに船上から見えるそのままの遠近法による景色としてではなく、さまざまな方向からの観察と、そこに上陸して探索した結果をまとめ上げている。

それとならんで、今回の解説ページでは復原しなかったが、注意して見ると、真珠貝船(lugger)の航路や主要島の周辺の海には細かく水深が表記されている。現代の海図でも、未測量の多いこの海域で、レットウ(鉛の分銅)と細紐を使って丹念に水深を測定していた結果かもしれない。というのも、ダイバーやテンダーにとって操業域の水深・海底地形・海底の砂質・泥質・海藻の違いは真珠貝の生息や成長に大きく関係し、また操業にとって、海上での潮流や風向とともに航路の取り方のうえでも、そのことは周知しておかなければならないからである。「コサック回想記」のなかで述べているが、真珠貝船に乗った初年度から数年にわたり先輩たちにみっちり仕込まれたのである。

また、一一月から翌年の三月まで常襲するサイクロン(ウィリーウィリー、台風)のみならず、気象の変わりやすいこの海域では、暴風雨のさいのクリークや入り江といった避難場所、潮待ち・風待ちのためのアンカー・ポイント、さらに船内の貯水量の少なさゆえの真水、それと燃料である主にマングローブ林の補給可能地も描き込まれている。したがって、その表現の巧みさゆえに一見風景画や生物画のように受けとめられるかもしれないが、このスケッチブックはまさに真珠貝採取操業のための総合的な漁場図なのだ。

生きものへの関心　それ以上に、第三に注目されるのは、食材の豊富化といった側面もあるが、出遭った生きものへの好奇心とその細かな観察眼だ。真珠貝採取は「きつい」・「汚い」・「危険」といった三拍子にくわえて、船内という生活空間の狭さ、娯楽の無さ、さらに低賃金のために、白人の多くが忌避した烈しい労働である。三月から一二月の漁期のあいだはどこかに宿舎があるわけではなく、不安定な船上での生活だ。眠る場所も船内甲板下の狭いキャビンである。なかでは、天井まで一五〇㎝あるかないかで、まっすぐ立つことさえできない。とくに、藤田氏の職務であったダイバーの命綱をあずかるテンダーは命綱に神経を集中し、しかも船の操作も一手に引き受けなければならない。スケッチブックの書き込みや回想記には日曜日のウミカメ猟や魚取りの息抜きの模様が記されているが、一方では単調で厳しい労働の日々のなかにあってその癒しを求められたのであろうか、物珍しい生きものとの出遭いに心躍らせた藤田氏のまなざしがスケッチブックの画像から伝わってくる。

フライポン出入口付近の小島での海鳥の巣作りと産卵の模様、周年にわたり辺りの海で出くわすさまざまなウミガメの詳細な観察、とくに一〇月から一一月交尾しながら海面を浮遊するウミガメは警戒心がなく捕獲が容易である。またそれにつづく産卵の最盛期にその付近の漁場で操業していたのであろう、ショール(Sholl)島でのウミガメ産卵の観察(もちろん卵も主要な食材であった)、あるいはカコロ貝(和名ヤグラビョウブガイ、semitwisted shell)に至っては、『和漢三才図会』や『大和本草』の付図をこえる精緻な描き方である。

ちなみに、門外漢の私にはカコロ貝の和名や英語名が不明であった。だから、沖縄の海洋深層水研究所に勤める友人に図柄を添えて教えを乞った。その友人は日本サンゴ礁学会の数名の知り合いに打診してくれた。その知り合いたちは〈ヤグラビョウブガイ〉にほぼ間違いないと口をそろえたらしい。藤田氏の描かれた図柄の精緻さのゆえである。さらに後日談を示せば、そ

の貝がすでに串本町に標本として保管されていた。私は迂闊なことに知らなかったのだが、戦前オーストラリア、クインズランド州木曜島から持ち帰えられたものだったことを串本町海中公園の田中真人氏が教えてくださった。カコロ貝の解説ページに掲載したヤグラビョウブガイの写真は木曜島からの採集標本である。

ジュゴン(dugong) さらにもう一つ私が目を見張ったのはロゴン(ジュゴン)の描写だ。そこにはまさに海中を泳ぐジュゴンの姿がありありと描き出されている。『牟婁新報』にかつて「人魚の話」を寄稿した南方熊楠はオーストラリア北部に出かけた同郷の人たちが日々つぶさにジュゴンの姿に出くわしていたことを知っていたのであろうか(岩村忍ほか編『南方熊楠全集』第六巻三〇六-三一一頁)。

私自身、長年オーストラリア、クインズランド州北端のトレス海峡(Torres Strait)(木曜島をふくむ)を調査地にしていたので、ジュゴンを見る機会にめぐまれてきた。ジュゴンは音に敏感で、敏しょうな生き物であり、狩猟には高度な技術を要する。だから、日本人が捕獲できる機会はきわめて少なかったであろう。ただ、満ち潮とともに浅瀬のアマモを策餌するために沖合から岸辺に近づくから、船上から見かけることはしばしばあったかもしれない。それにしても、その図柄の表現はまさにその体躯とその動きを巧みにとらえ、泳ぐ姿を生き写しのように示している。この観察眼には驚くばかりである。

スケッチブックには、すでに水彩をほどこされたジュゴンの習作がもう一枚ふくまれていた。しかし、それはイルカのように細身に描かれており、ご本人が満足のできるものではなかったのであろう。書き上げたあと、鉛筆で頭部や体躯の輪郭に修正がほどこされていた。私自身は、トレス海峡の先住の人々(Torres Strait Islanders)がジュゴン猟に出かける機会にいく度も同乗し、また砂浜に運び上げられたジュゴンを観察した経験がある。藤田氏の図柄を見て、あらためてその数々のジュゴンとの出遭いの場を彷彿とさせられた。はじめての出遭いのさい、藤田氏も書き込みのなかで記されているように、〈人魚〉のモデルだとは到底思えなかった。

藤田健児氏のその後の人生

さて、故・藤田健児氏の稀少な記録を公刊するにあたり、長女ご夫妻にインタビューする機会があった。このあとは、藤田健児氏にまつわるいくつかのエピソードにもふれ、スケッチブックの画像と回想記を補足しておきたい。

藤田健児氏は父藤田宇志摩・母志満乃の次男として生まれた。兄弟姉妹は一〇人おられたそうである。明治の生まれだったが、生年の正確なところはわからない。平成八(一九九六)年、九二歳で亡くなったらしいから、明治三七、八(一九〇三、四)年頃の生まれであろうか。生家は現在の和歌山県東牟婁郡古座川町明神小学校・中学校の敷地から一〇mほど西にあった。地名は明神字一雨であるが、その小集落は小柳木(おやなぎ)と呼ばれていた。

回想記にあるように、青年期、病弱だったらしい。それは胃潰瘍が原因だったようだ。その頃、主に農業と山の下草刈りの仕事をしていたが、戦後自分の普段着についてはミシンを駆けて作るので娘の稔子さんが聞いたところ、若いころ隣町の古座村に男物の洋裁店があり、二年ほどその店で洋服の仕立てを習ったことがあるらしい。

古座川町明神の生家あたり 2017/10/28 撮影

コサックから帰国後、結婚した。相手は古座川村明神字大柳の和田すずえさん。随分歳が離れていたらしく、稔子さんの母親は大正生まれだった。コサックで稼いだお金を送金しており、結婚したときには現在長女夫妻の住む家を建てて、そこで暮らしはじめた。古座川に臨む小さな尾根筋の先端部を一部削られたのであろうか、地番は付近の住居とはちがって「山林」の地番だという。生家から三〇mほど西の場所である。

機械いじりの好きな父親　稔子さんによると、父親は太平洋戦争後ニューギニアでの捕虜生活から帰ってきて、畑や田を作っていたが、一方では農協の精米係として雇われていた。圧し麦も造っていた。農協の仕事を辞めてからも、自家に精米機を買い、料金をもらいながら精米の仕事をやっていた。もちろん、山仕事の枝打ちや伐り出し、下草刈りは言うまでもない。ともかく機械いじりが好きで、耕運機にせよトラクターにせよ、あらゆる農業機械を購入し、付近の人たちがよく借りに来た。それに、この村に二、三軒あったが、自家に機械を据え、軍手の製作をやっていたこともあった。

そうしたなかで、当人の回想記の序にもあるように、「私達外国で永い間働いたものに取っては貴重な憶い出がある。」長女の稔子さんが語ってくれた戦後の日々の生活にかかわるエピソードには、その端々に、ありし日の熱帯海上での藤田氏の姿を彷彿とさせてくれるものがうかがえた。

次女の娘さんには、熱帯の紺碧(ダーク・ブルー)の海を思い起こさせる「碧(みどり)」と名づけた。それはまた、家前を流れる清流古座川の深い淵の青碧にちなんだのかもしれない。その碧さんが「それほど想い出があるのなら、何か書いてみたら」という勧めで、晩年スケッチブックの一コマ一コマをご自身の「原風景」のように描き出し、回想の記録を残されることになった。だが、彼のコサックでの生活の映像をまわりの人は思い描けなかったかもしれないが、藤田氏の戦後の人生の過程の端々には、身体に刻まれた原風景のように生活の知恵とも言える形となって現れていた。

まず、使っていたノコギリは、日本の在来からの「引く」ノコギリはなかった。西洋風の押し切るノコギリだったらしい。これはたんなる力の入れ方の方向の違いではない。使ってみればわかるが、腰から下の構えの在り方をふくめた全身運動として習得しなければ、使えるものではない。亡くなるまで潜水服やそれを搬送するために包んでいた帆布もあったらしいから、オーストラリアでの生活のなごりの品かもしれない。

「山立て」の技法　そうした具体的なモノとならんで、身に付いてしまったスキルがある。家前を流れる古座川で〈うなぎ〉を取るモンドリ(筌)を仕掛けていたエピソードも興味深かった。その設置場所を確認するさい、あの山のあの峰、この山のこの峰、あるいは山腹の目立った特徴を使っていたらしい。他の人は道端や古座川沿いの地表物を目印にしていたのに、父親は山だったと、稔子さんは語ってくれた。川沿いの目印を使うのも一案であったが、本人にはその方がやり

やすかったのか、あるいはオーストラリアでの生活経験へのこだわりだったのかもしれない。

これは、日本の沿岸漁民のあいだでは一般的なのだが、海上生活を行うものが目下の位置確認や移動方向を理解するやり方である。すなわち、真珠貝採取業に従事した乗組員たちが漁場間の移動や漁場内での採貝場所を海上で確認する船上生活のイロハなのだ。一種の三角測量法なのだが、一般に「山立て」ないし「山あて」と呼ばれる技法である。船上でダイバーの命綱をあつかうテンダー生活の長かった藤田氏は同時に操業中の航海責任者でもあり、山立てにも習熟しなければならなかった。回想記にあるように、身体の弱いことを知っていた先輩が藤田氏をテンダーの道へ進ませるために、数年間失敗も重ねながらみっちり教え込んだらしいから、好奇心の強い山育ちであった藤田氏には物珍しく、船上からのあたりの風景への注視は知らず知らずのうちに脳裏と身体に刻み込まれたであろう。スケッチブックの一コマに収められたまさに「山立て」技法の図解ばかりか、それ以外のスケッチにも現れる海岸部や島々の姿形への観察眼の鋭さや位置関係もこの船上生活で培われたのである。

「滑車」の利用　また、娘婿の藤田正規氏は、義父の滑車の使い方、それも複数の滑車を組み合わせて、重量のあるものを一人で持ちあげる巧みさを称賛していた。たとえば、山で伐られた大木を吊り上げるのに滑車を組み合わせて一人で持ちあげていた。またある時には、背丈よりももっと段差のある上の畑に土を運び上げるさい、農道を使い、手押し車で迂回しながら往復するのではなく、下の畑から滑車を使って直接土を揚げていたという。丸太と、その上端近くに横木をY字型に組み、いくつかの滑車とロープを使い、一種の簡易なクレーンのようにして、一人で土を揚げ、一枚の田を造り上げたらしい。

藤田氏の滞在したコサックはコサックのみならず、内陸部へ一二キロ離れた行政や放牧業者の中心地ローバン(Roeborne)の外港としての役割も一部担っていた。スケッチブックにふくまれるように、波止場に着岸するハシケには荷の揚げ下ろし用の簡易なクレーンが設置されていた。

滑車の利用という点では、それにくわえて、次のようなエピソードも聞かれた。家前の古座川が氾濫して、一階部分が床上浸水になったとき、二階の畳下の床に適当な大きさの四角形の穴をあけ、滑車を使って一階に置いてあった冷蔵庫などの家具類を二階へ吊り上げ移動させたらしい。

こうした滑車の操作も、海上での帆走に不可欠な技術である。スケッチブックのなかに、雇用者村松氏所有の真珠貝船の図がいく枚も描かれている。それもすべての帆を広げた姿(この姿にするとき、船上の責任ダイバーか責任テンダーは「チョウチョ(蝶々)にせよ」と乗組員たちに命じる)であるが、帆柱や複数の帆の上端に組み込まれた滑車に注目してほしい。風向とその強さに対応して、漁場間移動や操業中も移動方向や進行速度を調整するために、真珠貝船の主要な三枚の帆を上げ下げし、また折り畳み張り出す操作を、ロープと複数の滑車によって行わなければならない。併せて、海中の抵抗力のある船舵の操作も船上甲板尾部に組みたてられた複数の滑車とロープによって一人で行うのである。

それらはいずれも船上のテンダー(命綱持ち)の職務である。テンダーの職席の長かった藤田氏は帆と舵の操作の責任者であり、また、休漁期、翌年乗る真珠貝船の乗組員に指示して船のオーバーホールをやるのもテンダーの役割である。元来機械いじりが好きだった藤田氏は真珠

貝船に組み込まれた滑車の仕組みは隅々まで熟知し、危急のさいにも、臨機応変に対応されたことであろう。

真珠貝船（ダイバーボート）の図柄に絵手紙風に書きこまれた一文、推進エンジンが未だ装備されていない風だけを頼りに帆走する航海を楽しんでおられる記述には、複数の滑車を使って帆と舵を操作していた日々と帰国後の生活のさまざまな場面で滑車を巧みに活用された場面が二重写しになってくる。

崖のつる草を掃う藤田氏

さらにもう一つ、エピソードを付けくわえておこう。家族写真のアルバムのページを追っていると、生前の藤田氏の思いがけないある姿に目がとまった。家脇の崖でフジの蔓を刈り取る作業のために、梯子とならんで、一本の丸太が崖に立てかけられていた。藤田氏はその丸太の途中にとまっているのだが、その両足は丸太の左右交互に打ち込まれた長さ一五センチほどの杭の上にのっていた。真珠貝船での操業中、遠方の目的地や浅瀬のサンゴ礁を確認し、時には上端近くの滑車の具合を調整ないし修理するために帆柱を上り下りするのである。真珠貝船の帆柱には杭は打たれていないのだが、丸太の細工もその状況を思い浮かべた梯子段への応用であろう。オーストラリアでの生活が戦後の日々の生活の知恵にどこまでも組み込まれている。

長女の稔子さんに、なにげなく、「お父様、コサックへの旅の途次、シンガポールの移民宿「さつまや旅館」で、宿の主人夫婦に衛生上止められていたのに、あまりにも暑かったので、三階の部屋から路上で売っていた氷を細い紐で吊って買ったことがあるらしいですよ」と話をつなぐと、「晩年、この家でもやっていましたよ」と。家前の古座川沿いの県道に移動販売車がやってくると、家の二階からザルに紐を付け、飴や菓子類など欲しいものを買っていたらしい。

こうした帰国後の身に付いた振舞いが、その都度というわけではないにしても、時にはふっとありし日のコサックでの日々の記憶と対話し、記憶のなかに自分の身を投げ込むきっかけを与えていたかもしれない。それが、晩年のスケッチブックにある数々の場面となって数珠つなぎに次々と引き出され、克明に描き出されることになったように思われる。スケッチブックに描きだされた図柄の背後には、こうした身体化されたさまざまなスキルとならんで、それぞれの場所での身体イメージがみずからの人生の澱として、「貴重な憶い出」ということばで表現されたのであろう。

スケッチ描画のいきさつ　藤田正規夫妻は、スケッチブックや回想記の原稿が遺品として残るいきさつについて、次のように語ってくれた。長女の自分（稔子さん）は子育てで手がまわらず、娘婿の正規氏も大工の仕事で忙しかったから、父親からオーストラリア時代の想い出話を聞くことなどあまりなかったらしい。そもそも、日本人のあいだでは、自分の若いころの経験を息子・娘に語り継ぐ習慣など持ち合わせていない。孫たちも一度くらいは聞いたかもしれないが、何度もということはなかった。そんな晩年のあるとき、アメリカのサンフランシスコで暮らす次女の碧（みどり）さんがたまたま里帰りでやってきて、父親に「それほど想い出深いなら、書きとめ

ておけば」と、記録として残すことを勧めた。それで、元来筆まめで書くことが嫌いではなかったから、書きはじめたらしいのである。

遺品をみると、スケッチブック二冊、大学ノートのページに白紙でカバーを付けたもの、それに四〇〇字詰め原稿用紙一二枚と二二枚にそれぞれ清書されたものの五点であった。稔子さんによると、原稿用紙はわからないが、あとの材料はいずれも孫たちが学校時代に買った教材の残り物を利用したようだ。スケッチブックの水彩絵具やクレパスも同様である。

中身を読むと、まず大学ノートに思い出すままに下書きを書かれている。だからといって、「下書き」と清書の記述のあり方に大きな違いがあるわけではない。大学ノートへの「下書き」も記憶の底から引き出され、脚色もなく、ためらわず、淡々と筆が進められている。そこには、後の書き込みがあるとしても、消した跡や修正はほとんどない。コサックへの旅やそこでの真珠貝船上での生活、のちにスケッチブックに描かれた図柄の鉛筆書きの数枚の下絵が二〇ページ、太平洋戦争時の軍属としての従軍記が八ページ、それと系類の家系図が一三ページで構成されていた。

大学ノートはともかく、スケッチブック二冊と清書されたコサックの追憶記の原稿は、次女の碧さんの勧めで描き始めたいきさつもあったから、いずれもアメリカ在住の碧さんが日本へ里帰りしたおり、自分が持っていても仕方なく、多少ご自身の過去の追憶に関心を示した碧さんのところで保管してくれたらと本人が希望され、一度アメリカへ持ち帰られたようだ。それを藤田健児氏の死後、碧さんが本来実家にあるべきものだと、帰国のさい再度日本へ持ち帰られたから、今日自分たちの手元にあるのだと。

スケッチブックの末尾のページに、次のようなメッセージがあった。「現地で働いたことのあるものには懐かしい思い出はありますが、知らぬものには面白味はあるまいと思います。若し、日本へ帰る時、持って帰って下さっても結構です。ニューギニアへ行った時のいろいろ想い出を今ノートに書いています。この地の想い出は絵に書き難いので、まだ絵は何も書いていませんが、ノートの方はボツボツと書いております。」コサックの回想記の原稿とスケッチブックに絵を描いたあと、碧さんへのメッセージとして書き添えたのである。私がこの文章を二〇一一年にはじめて読んだとき、スケッチブックはコサックの現地で描かれ、友人に持ち帰ってもらってもいいという意味だろうか、それでもニューギニアのことにもふれておられるから、戦後になって書かれたものであることは確かだと悩んでいたのだが、藤田正規夫妻からこうした貴重な記録が生み出されたいきさつをお聞きして、アメリカの娘碧さんに宛てたメッセージとわかり、謎が氷解した次第である。

回想記の特徴　これまで、主にスケッチブックの特徴について述べてきたが、「回想記」のことも少しふれておこう。一つは渡航時の記述である。大正末期になれば、豪州への移動ルートや国際線の便船は一定程度整備されていた。ただ、若ければ高等小学校を卒業後まもなくか、遅くとも二〇歳前後で初めて渡豪する。当人たちにとっては、渡豪途中の見るもの聞くものすべてが珍しく、ハプニングの連続だったであろう。そうした渡豪、帰行途中のあり様についてはほとんど記録が残っていない。とくに渡豪者自身のまなざしを通した記述は皆無に近い。その意味でも、藤田氏の等身大の記録は貴重である。

国内での公衆電話をめぐる失敗談、国際航路の上海で見かけた栗売りや散髪屋の様子、

また上海から同行することになった中国人の外務省役人との筆談を通じたコミュニケーション、香港に氾濫する看板の漢字に見知らぬ土地でほっとする緊張感の和らぎなど、現代の観光で海外に出かける人も感情移入できるだろう。さらに、船上に乗り込んだアジア系の異民族との関係性、あるいは当時の日本ではありふれた学生服姿やその身なりでデッキパッセンジャーとなった際の貧富の差をかみしめる思い、その後白人の町ローバンで経験する人種差別の記述にも目を離せない。さらにまた、熱帯の果実マンゴとの出会い、台風や川の氾濫を日本ですでに経験していたとしても、そうした自然の脅威とは比べものにならない干満の激しい西豪州の海岸線、張り裂けるような雷雨、サイクロンの襲来、それにところによっては、遮るもののない広漠としたどこまでも続く赤茶けた大地といった大自然への驚嘆である。

二つ目には、多くを語らないが、コサック到着後の風と潮に左右される日々の船上での操業内容、それに海水温の上下に応じて消長する海藻状況による操業域の移動、真珠貝船での職階制による厳格な人間関係、報奨制度や採貝技術の更新にともなった採貝量の増加やダイバー間の競争などにも目をとめてほしいところである。

本書にふくまれるスケッチブックの記述や回想記の事柄は、真珠貝採取者の出稼ぎの記録という意味をこえて、南紀のどこにでもいそうな、またどなたもが経験されたであろう、そしてまたそのことを、生活の知恵として、心の糧として、その後の人生を送られたであろう人たちの人生の証しをとどめるものとして、この記録を皆さんに託してみたい。

なお、スケッチブックの書き込み文について、アーカイブとして、おおむね原典の表記を維持したが、支障のないかぎり、当用漢字、現代仮名遣い、仮名送りに修正した。図中の書き込み文については、グループごとにA、B、Cなどの記号を索引図のなかに付し、それぞれに対応する日本語の翻刻文とその英訳文を示した。また、図中の地名や簡単な記述は索引図の当該箇所に番号を付し、その左欄に一覧表として示した。括弧内に英語を補足した個所もある。さらに、図幅が地域的な景観や鳥瞰を示すものについては、当該地域の現在の衛星写真を補足して、理解を助けることにした。衛星写真および地図は Google Earth, Apple Maps, Australian Government National Map を利用させていただいた。

コサック(Cossack)について

コサック略史　コサック、この西オーストラリアの地名はもはや日本の一般的な地図帳には登場しない。なかにはピルバラ(地名.Pilbara)の鉄鉱石の輸出との関連でご存じの方があるだろう。太平洋戦争以前、オーストラリア北部海域の真珠貝採取業への日本人の出稼ぎ地として、そのことに関心を抱く人たちのあいだでも、木曜島・ブルーム・ダーウィンに比べると、おそらく聞いたことがあるようには思うのだがと、ことばを濁されるかもしれない。コサックについては、それだけ記録も研究も少ないということである。とくに、藤田氏が過ごした時代については、これまでほとんどふれられたことがない。

しかし、この地は、先住のアボリジニの人びとが儀礼のおりに身に着けていた金縁ないし銀縁の大きなシロチョウガイ(*Pinctada maxima*)に目を付けた白人により、オーストラリア熱帯海

域で、真珠貝採取業がもっとも早く開始されたところである。一八六六年のことである。

当初はミステリー・ランディング(Mystery Landing)、あるいはティエン・ツィン(Tien Tsin)と呼ばれたが、一〇年後にはそこを訪れた戦艦の名にちなんで、コサックと改名された(1)。真珠貝採取開始とほぼ同時期、コサックから南東一二kmほど離れたローバン周辺が牧畜業者による開拓地になり、家畜類のアジアにむけての搬送や生活物資の供給もあって、その外港としての機能もあわせ持つオーストラリア北西部唯一の拠点港になった(2)。

真珠貝採取の労働には、当初在地の先住の人たちを小麦粉やタバコと引き換えに雇い、かなり酷使した。一攫千金をめざす白人業者たちの非人道性はあまりにも有名で、オーストラリアの歴史に大きな汚点を残している(3)。潮の満ち干の差が6〜12mにおよぶ北西部海岸では、引き潮のおりの干潟での採集であったが、その資源が枯渇すると、素潜りによる操業となる。そこへは、外部からの労働者として、当初南太平洋から連れてこられた人たちをシドニーから運んでいるが、一八七〇年代初めには、東南アジアのシンガポール、西チモールのクパン(Kupang)、それにフィリピン南部のスル海峡(Sulu Strait)からもアジア系の人間を導入するようになった。白人を労働力に雇っていては、とても採算が合わないからである。その先例は南部のシャーク湾(Shark Bay)ではじまっていた。そうしたアジア人の導入は、潜水装置の導入以後、ソロル諸島(Solor Islands)、アロル諸島(Alor Islands)、マカッサル(Makassar)などの東インドネシアのみならず、ジャワ島やフィリピンにもおよんだ(4)。オーストラリアでの金鉱の発見で、中国人労働者も移入し、その子孫やその後の香港やシンガポールからの流入者であろうか、一八九〇年代中頃のコサックの集落図には、町のはずれにチャイナタウンとよばれた地区が書き込まれている。

日本人の到来 ところで、この地への日本人の到来がいつのことか、あまり判然としない。幕末から明治初期に外国船に雇われた日本人たちが契約を終えたあと、オーストラリアの港で下船し、真珠貝採取業に雇われたという話もあるが、コサックでは、一八八五年コサック警察署の備忘録(the Occurrence Book of the Police Station)に、ポート・ダーウィンに基地を置く北オーストラリア真珠貝採取会社の乗組員として日本人の来着が記されている(5)。

あとで述べるように、一八八四年神戸および香港の斡旋会社を通じて七〇人近くの日本人が雇われ、その内一五人がダーウィンで下船している。残りの日本人の目的地は木曜島であった。また、一八八四年から数年間、白人の大手真珠貝業者が木曜島から母船を核として北オーストラリアや西オーストラリアに船団を移動させている。そこには、木曜島で雇われた日本人も同乗していたであろう(6)。主にキング湾奥のダービィ(Derby)を基地としていたようだが、西オーストラリア植民地政府と入漁問題で物議をかもしながら、藤田氏のスケッチブックにふくまれるモンテベロー諸島やバロー島(Barrow Island)周辺でもすでに操業している。一八八四年一時的にブームとなったダーウィンでは、その後一八九二年に再度ブームを迎えるまでは停滞期がつづく。こうした真珠貝採取業者の動きの過程で、日本人従事者の漁獲効率の良さを知ったコサックやオンスローの真珠貝採取業者たちも、しだいに日本人潜水夫や乗組員を雇用して行ったのかもしれない。

一八九二年にダーウィンに現れた濱浦イスケ(チャーリー・ジャパン、濱浦栄治郎)は一八八〇

年に西オーストラリアに到達し、一八八三年から九年間コサックやブルーム(Broome)で働いていたという(7)。しかし、他の基地に比べれば少数とはいえ、安定的に日本人従事者が連鎖的にコサックに出稼ぎするのは後述する村松次郎が一九〇六年に真珠貝採取業者になって以降のことかもしれない。

ちなみに、一八九六年段階のコサックの人口構成の概数は白人(常住二〇九、一時的居住二〇、船員三〇)の二五九人、(休漁期の)アジア系契約労働者・真珠貝採取業者・商店主をふくめ三五〇人、アボリジニ一二〇人の総数七二九人であった(8)。ただ、一八九〇年代から、北部のキンバリー地方に牧畜業が植民され、真珠貝採取業も北方のエイティ・マイル海岸(Eighty Miles Coast)やキング・サウンド(Kings Sound)を中心に展開し、リューバック湾(Roebuck Bay)に望むブルームやダービィへの真珠貝採取業基地の移行、一八九八年のサイクロンによるコサック港の被災、コサック港の浅瀬化、一九〇四年のインド洋に面した近郊のサムソン岬(Point Samson)桟橋の開設によって、コサックのオーストラリア北西部における港としての機能は低下し、急速にコサックは衰退期を迎えたらしい。

日本人に注目すると、あとで述べる村松氏とならんで、コサックに登場する商店主や写真館経営の西岡高蔵氏とエキ夫人、それに村上安吉氏(一八九七年友人の浅利熊蔵と共に和歌山県からコサックに到着)も一九〇〇年にはブルームに移っている(9)。藤田氏が訪れた大正一四(一九二五)年から一九三〇年代にかけては、コサックはすでに寂れた町で、村松次郎が主要な真珠貝船主ならびに商店主として活躍し、村松商店と酒屋が各一軒、一五軒ほどの白人住居、そして日本人町(Japan town)に四、五軒の日本人という状況だったらしい。一九〇六年以降、村松次郎がコサックを基地に一〇隻の真珠貝採取船を経営していたことが日本人出稼ぎ者の命脈を保ち、休漁期には、閑散とした町場に、少なくとも四〇人ほどの日本人真珠貝採取従事者がそれにくわわっていたことだろう。

「かめや」と「おきんさん」 スケッチブックの図には、コサック集落内に一風変わった名の「かめや」がある。最初は日本人商店の屋号かと思ったが、藤田氏の記述にもあるように、一九二五年の渡航前後、亀肉関係の缶詰工場があったらしい。そのことに少しふれてみる。一九三〇年代初期の西豪州の新聞記事(10)によると、アオウミガメを対象にコサックから一五〇km離れたモンテベロー諸島が主要な漁場だったらしい。その会社の名も「モンテベロー水産有限会社」(Monte Belo Sea Product Ltd.)。資源保護のために一〇kg以下のカメは捕獲しないと明言する。

当時、ヨーロッパではカメスープは高級食材だったらしく、会社の試作品はロンドンに送られていた。ロンドンでは亀肉の缶詰とならんで、カメスープの缶詰、脂はトイレット用洗剤や医療用に、さらに甲羅は肥料用と多岐にわたっていたことが新聞に記されている。また、五〇〇ポンドほどの資金で開業したようだが、一九三二年初めにはパースで会社の総会を開き、一万ポンドへの増資を図り、世界市場におけて活動する会社側の趣旨説明が行われたようだ。でも、藤田氏が五年の歳月を経て一九三五年頃、ダーウィンから再びコサックへ戻ったときには、工場「かめや」は閉鎖され、開業資金提供者の一人だったのであろうか、村松氏の手にわたり、石造りの建造物であったために、藤田氏をはじめ真珠貝船乗組員らが休漁期暑さを避ける場所になっていた。

もう一つ、スケッチブックにある「ビーゼン」の港で、藤田氏は「お金（きん）さんという日本人のおばさん」に出会っている。「二度ほど御馳走になった」と。そのおきんさんについては、N・ジョーンズ氏や研究仲間の永田由利子さんの著作にくわしい。それらの記述と、共同編集者の田村恵子さんが入手してくれたオーストラリア側に残る第一次資料[11]を参考に、「おきんさん」のことも少しふれておく。

「おきんさん」は入国管理局資料によると、一八七八年三月一四日長崎生まれ。担当官が書いたと思われる姓名のローマ字ではKin ARAKAWA（荒川キン）となっているが、自筆署名の欄はそれが漢字ならば「キン　安ガワ」とも、平仮名ならば、「キン　おガワ」とも、「キン　あガワ」とも読み取れ、判然としない。一八九五年八月にダーウィンでオーストラリア入管の手続きをし、ある記録では最終目的地がクインズランドの木曜島になっているが、別の記録では、コサックとなっている（N・ジョーンズ氏によると、クインズランドのクックタウン（Cooktown））。おそらく、「からゆきさん」であろう。

西オーストラリアのオンスローに移動後、そこに定着し、最初日本人とのあいだで一九一〇年に長男エディを、翌年に長女シシィが生まれた。そのあと、二人の息子が生まれているが、一九三九年一〇月のオンスロー警察での外国人登録には、お金さんは主婦であり、夫（二人の息子の父親）はマレーシア領、当時のイギリス海峡植民地のペナン（Penang）で一八七一年に生まれ、名前はSiam Ahmat、おきんさんより七つ年上であった。Siamという名前からか、永田さんはタイ人としているが、ペナン生まれ、かつアーマットという姓はムスリム的背景を示すから、藤田氏が書いている「馬来（マレー）人」が妥当なのかもしれない。藤田氏が出会ったおきんさんは五〇歳台の半ばであったろう。

ジョーンズ氏の一九九九年のインタビューによると、おきんさんの末息子と孫はおきんさんが魚から刺身やスシを調理し、大豆から醤油も作り、野菜を育て、鶏やアヒルも飼っていたことを覚えている。そして、当時のオンスローには、真珠貝船の乗組員、園芸農家、料理人もいて、小さな日本人社会があった。藤田氏は「おそらく四人の子供（二五歳の息子や二三才の娘）」と書いているが、長男のエディと末息子のパトリック、長女シシィの日系二世、それにおきんさんは太平洋戦争で強制収容されている。マレー人の夫とオーストラリア軍に従軍したもう一人の息子は収容を免れたらしい。戦後の収容所解放後、夫は英国臣民、子供たちもオーストラリア生まれで、お金さんは再び家庭生活に戻ったようである。

村松次郎　いずれにしても、一八九〇年代までのコサックについては若干の記述があるが、二〇世紀に入ってからのコサックについての情報は少ない。その意味では、藤田氏のスケッチブックと回想記は貴重な記録である。それゆえ、ここでは、コサックについての紹介はこれぐらいにとどめるが、藤田健児氏の雇用者であった村松次郎については一言ふれておかなければならないだろう。藤田氏は回想記のなかで、村松次郎がオーストラリア生まれの日本人と述べているが、彼は日本生まれである。藤田氏が出会い、共に過ごした当時、四〇歳台半ばから五〇歳台の真珠貝船一〇隻を経営する押しも押されもせぬ企業家であり、白人たちにも信頼があり、紳士然とした振る舞いだったらしいから、そのように思われたのであろう。

父親の村松作太郎は明治二一（一八八八）年にオーストラリアへ入り、その三年後の一八

九一年にはコサックで商店を開いたという(12)。彼については、静岡県(駿河)生まれで、その妻も同郷人であったという記述が息子村松次郎の日記に残っている。村松次郎は、シソンズ氏によれば、神戸で一八七八年に生まれたことになっているが、父親の故郷静岡県藤枝生まれであった可能性が高い。作太郎について、オーストラリアにやってくるまでの日本での経歴や、なぜオーストラリアにやってきたのか明らかではない。ただ、オーストラリア北部での真珠貝採取への日本人出稼ぎやその渡航地についてまったくの門外漢ではなかったようだ。

日本政府の古文書にかすかに彼の名前が現れる。一八八三年ジョン・ミラー(John Miller)に雇われ三七名の日本人が初めて公式に外務省の許可を得てクインズランド植民地木曜島へ神奈川県から送られる。その翌年神戸のフィーロン・ロー商会(Fearon, Low & Co.)を介して六九名が渡豪した。記録には、フィーロン・ロー商会へ斡旋した神戸の二人の日本人が登場する。それが武田長兵衛と村松作太郎である。その二人が労働契約の中身の実態について承知していたのかどうかわからないが、契約者たちが現地に着いてみると、事業主の中には詐欺と言っても良いような契約内容であったらしい。そのことは、契約者の一人が翌年病気で帰国し、友人を通じて知り合った神戸の平山鶴三氏が真珠貝業者の処遇に義憤を感じ、政府への嘆願書を作製した。嘆願書は出稼ぎ者当人から政府にも兵庫県知事にも提出されなかったようだが、その二年後平山氏の友人から話を聞いた神戸駐在員の新聞記者が当時の民権派の政論紙である『朝野新聞』に記事を書き(13)、現地での窮状がはじめて公にされた。政府は兵庫県知事に調査を依頼し、平山氏のもとに嘆願書の写しが残っており、その中で武田長兵衛とともに村松作太郎の名前が判明したのである。ただ、村松作太郎が出稼ぎ者募集の仲介をしたという以外、この件にどのように関わっていたのか詳細は不明であるが、彼がオーストラリアにおける真珠貝採取業の勃興と日本人出稼ぎ者たちの渡豪を周知していたことは事実である(14)。

いずれにせよ、村松作太郎はコサックで日用品、衣料品、装飾品や真珠貝採取の機材を商い、在地では知名度も高かったらしい。コサックで、ある程度の基盤を築いた一八九三年、故郷の静岡県藤枝から神戸に呼び寄せていた次郎を迎えに行き、二人は一八九三年九月にブルームに到着する。次郎はそこでしばらく滞在した後、翌年コサックにやってくるが、一年後の一八九五年六月には、メルボルンの私立高校(the Xavier College)へ進学する。在学中の一八九八年二月父親が亡くなり、コサックの墓地に葬られた。次郎は当時一九才であり、いまだ法定相続人の資格がなく、二一才の成人になって父親の仕事を引き継ぐことになる。彼は仕事を容易にするためであろうか、一八九九年七月オーストラリア・ビクトリアで帰化した。

村松作太郎の墓(2017/09)

一九〇五年に二七歳で結婚。翌一九〇六年に真珠貝採取業に参入する。おそらく、一八八〇年代から西オーストラ

リア真珠貝採取業の主力は北のブルームへ次第に移っていたから、資金繰りのつかない白人船主から真珠貝船を購入し、村松商会(J & T Muramats)は真珠貝採取業部門で急速に拡張する。一九一二年にはすでに一〇隻の真珠貝船経営の許可を得ていたようだ。当時のコサックを基地にした白人の所有船については不明である。一九一五年の税務報告では八隻のラガー(真珠貝採取船)を所有し、コサックの真珠貝採取従事者の半ば以上を雇用していたらしい。また、コサックの町の自由保有地の多くも村松商店の所有に帰していた。藤田氏がスケッチブックに描く村松商店、自宅、および一九三〇年前後に白人がウミガメの肉やスープを缶詰製造した「かめや」はその一部であろう。藤田氏が初めて乗船したイディタ(*Editha*)号をふくむ八隻がライセンスを受けており、五十六名の契約労働者雇用の許可も与えられていた。

しかし、一九二〇年代を通じて、コサックは事実上真珠貝採取業基地としての役割を終えており、世界恐慌の影響もあって、村松次郎は経営船の半数とともに一九二九年ダーウィンへ拠点を移す。スケッチブックの著者藤田氏もそれにともなってダーウィンに移動した。そのこと自体、西オーストラリア州の真珠貝採取業をめぐる法規制がきびしく、村松次郎はダーウィンでの北部準州の規制の少なさに、事業拡張の期待をかけたところもあったらしい。でも、コサックへの愛着はあり、移動後もコサックには四隻のラガー船を残していた。藤田氏は五年間ダーウィンで従事したあと、再び愛着のあるコサックに戻った。

村松次郎は一九〇六年にその事業をはじめ、一九一二年に一〇隻の免許を獲得して以後も州政府や連邦政府に船隻数ならびに契約労働者数増加の請願を試みたが、帰化後の英国臣民としての地位を得ながら、アジア系(有色人種)という壁を崩すことはできなかった。一九四一年一二月八日の真珠湾攻撃にともない、村松次郎夫妻は拘束された。ヴィクトリア州のタツラ強制収容所(Tatura Internment Camp)に送られ、一九四三年一月七日、村松次郎は癌で治療中肺炎のために六四歳で亡くなっている。

「藤田健児スケッチブックと回想記」への長い紹介文になってしまった。オーストラリア北部の熱帯海域で真珠貝採取業に従事された方々には、一人ひとりの経験と人生の過程があった。それぞれの人生はこれまでの一般的な歴史記述からわかるように、その名前も人生の過程も記録に残るわけではない。藤田健児氏の残されたスケッチブックと回想記を通じて、オーストラリア北部の海で真珠貝採取業に身を託した数千人の人生があったことを思い描いていただければ、幸いである。

注

(1)Anderson, R. (2013) *First Report in the Northwest: A maritime archaeological survey of Cossack 25-30 June 2012*, Western Australia Museum, pp.17-18.

(2)一八七二年、シンガポールへの家畜積み出しのために、ローバンの外港としてコサック整備の議論が行われている。(Bach, J.P.S, *The Pearling Industry of Australia: an account of its social and economic development*, 1956 p.8.)

(3)M・A・ベーン(一九八七)『真珠貝の誘惑』勁草書房(Bain,M.A. *Full Fathom Five* Artlook Book 1982)。

（4）同上。

（5）Sissons, D.C.S. (1977) Japanese in the Northern Territory 1884-1902, *South Australiana*, 16-1, p.6.

（6）ibid., pp.5-6.

（7）渡辺勘十郎（１８９４）『濠洲探検報告書』 外務省通商局第二課、二七九―二八二頁、Sissons, ibid., p.12; Lamb J.(2016)『沈黙の真珠（*Silent Pearls: old Japanese graves in Darwin and the history of Pearling*）』 p.21.

（8）コサック歴史館に展示された一八九〇年代地図の付属資料による。

（9）津田睦美ほか編（２０１６）『村上安吉１８８０―１９４４のライフストーリー』和歌山大学紀州経済史文化研究所、一八ページ。

（10）資料の入手にあたり、キャンベラの田村恵子氏のお世話になった。資料は「*Northern Times* (Carnavon) 3 September 1931 および *Daily News* (Perth), 3 February 1932」の新聞記事。

（11）N・ジョーンズ（２００３） 『第二の故郷―豪州に渡った日本人先駆者たちの物語』創風社出版 (Noreen Jones *Number 2 Home :A story of Japanese pioneers in Australia*. Freemantle Arts Centre Press. 2002)、永田由利子（２００２）『オーストラリア日系人強制収容の記録』 高文研 ;Yuriko Nagata（1996）*Unwanted Aliens: Japanese Internment in Australia*, University of Queensland Press. 資料はオーストラリアへの入国管理局と一九三九年九月「治安維持法」（外国人管理規則）施行下にあった一〇月九日にオンスロー警察署で作成されたものである。

（12）以下の記述については、Sissons, D. (1986) Muramats Jiro(1878-1943) *Australian Dictionary of Biography*, Vol.10.および Maxine McArthur, Uncommon Lives-Muramats（unpublished manuscript, no date）を参考にした。

（13）一木一郎（２０１７）「明治期における紀州のダイバーの成り立ちを追って」② 熊野新聞一〇月二〇日号。

（14）この商会による渡豪者たちは、給料、食糧、医療など契約条項の食い違いが大きく、問題含みの渡豪であった。それが翌年一一月帰国した者の証言に基づき、明治二〇（一八八七）年四月「朝野新聞」で報道された。それがさらに発展し、日本政府は在豪名誉領事のマークスを木曜島に派遣して調査の結果、名誉領事は「直ちにフィーロン・ロー商会が斯く不幸なる人民を神戸よりこの地へ送ることを差し止められんことを」と勧告する（久原脩司「木曜島の県人の足跡・慰霊塔・島の現況」和歌山社会経済研究所『21世紀わかやま』一一二ページ）。こうした政府の処置が神戸の村松作太郎のその後の動向に影響した可能性はあるが、詳細は分からない。

＊ なお、オーストラリア北部海域における真珠貝採取業への日本人出稼ぎについて関心のある方は次の文献を参考にしてほしい。村井吉敬・内海愛子・飯笹佐代子編『海境を越える人びと―真珠とナマコとアラフラ海』コモンズ 二〇一六年。

Foreword: An invitation to enjoy a sketchbook and memoir by Kenji Fujita

Hiroyuki Matsumoto

I first saw the sketchbook and memoir written by the late Mr Kenji Fujita in the autumn of 2011. At that time the town of Kushimoto in Wakayama Prefecture held a panel exhibition about Thursday Island at the Kushimoto Cultural Centre, to commemorate their local historical legacy. Many items left by people who had worked as pearl divers in the pearl fisheries of North Australia from the Meiji period to the Pacific War were collected for this exhibition over a period of several years by the Kushimoto town office staff led by Mr Yorio Hamaguchi. Amongst them I found the sketchbook and memoir written by Mr Fujita.

There were digital photographs of the sketchbook. These pictures left a strong impression on me from first sight. When I talked to people concerned in the southern part of Wakayama, and to the families of the deceased, I realised that these documents left by the deceased had been gradually scattered and lost from generation to generation. Seventy years had passed since the end of the Pacific War, and it was inevitable that these documents would be lost. However, I could not help feeling sorry for the loss of these documents, which were the evidence of human lives. About six thousand pearl divers and crew travelled to Australia from the southern part of Wakayama, and each individual pearl diver had his own experience. Mr Fujita's sketchbook and memoir could not represent all pearl divers' experiences. Nevertheless, it appeared to me that they were outstanding documents for several reasons, which I shall discuss later in this introduction. After coming to an agreement with Mr Fujita's family, it was decided that I, together with several colleagues and educational committee members of the Kushimoto town office, would publish the sketchbook and memoir by Mr Fujita. To present the documents in book form, we visited the family of the late Mr Fujita, who lived in Kozagawa-chō, Higashimuro-gun, in Wakayama. We requested permission to scan the original pictures in the sketchbook. Although it was a short meeting, Mr Masaki Fujita and Mrs Toshiko Fujita, who were family members of the deceased, recounted several episodes from the life of the author of the sketchbook. I shall now write an introduction to the sketchbook and memoir, which will include these episodes as told to me.

The record as evidence of a human life

When I heard from his family how Mr Fujita began writing the sketchbook and memoir, I once again realized that these were evidence of the life of Mr Kenji Fujita, who lived in the tropical seas of north-western Australia from the end of Taishō period until the second decade of the Shōwa period. I need not stress again that for fifteen years Mr Fujita spent an extremely difficult life on the ship and at the base in Cossack in north-western Australia. The sketchbook and memoir are a record not just of his early life but also of the deep images etched in Mr Fujita's heart, that appear to have been sublimated during his later life. At the end of the memoir Mr Fujita records his impression when he returned home to Japan:

> I came back to Japan via the Kishū sea-route. My homeland, where I set foot after spending fifteen years in a wide-open country without any high mountains, looked so small as the mountains rose sharply into view. I could not believe my eyes and felt as if I was suffocating. Then I suddenly realised that I had to spend the rest of my long life in this small country…

Perhaps Mr Fujita concealed these thoughts deep in his heart while he lived in Japan.

Mr Fujita spent almost half a century in Japan after his return, and then he wrote his sketchbook and memoir when he was nearly eighty. How could Mr Fujita retrieve these memories, which had sunk deep in his mind? Perhaps his nature by birth could be a contributing factor. When I saw the pictures skilfully drawn by Mr Fujita, I involuntarily thought that these were not mere prosaic records of a pearl diver, but pictures taken by a sharp observant eye through high quality filters, and

that human experiences could not be concealed in a corner of one's mind. After I heard Mr Fujita's family members describe episodes from his later life, these thoughts were strengthened. That is, the depth of Mr Fujita's experience, which he gained through his body without thinking, was reinforced by the repetition of some of these physical experiences after he returned home, keeping his memory alive and strong. Then his experiences came out all at once in his later years. When I showed Mr Fujita's sketchbook and memoir to my research colleagues and to several acquaintances, they were unanimous in marvelling at these documents.

However, Mr Fujita had no clear intention of publishing his sketchbook and memoir. Both were written in the form of a first-person narrative to his second daughter. There is no pretention in his narrative, and we are attracted to it by its simplicity and the way he narrates. I once showed these documents to a friend who has artistic taste. My friend quickly noticed that Mr Fujita's paintings put even professionals to shame, and that there were no hesitations in his brushwork. Unfortunately, the sketchbooks were damaged by a flood in 2011, and now the original colours are faded, and some parts are stained. We shall try to restore the original colours of the pictures and preserve them as archives rather than work of art. Our final aim is that these documents will be made available to those interested in them.

I would like to add one more thought about how these documents could be used. In September 2017 three coresearchers—Kamada, Tamura, and Murakami—visited Cossack, where the base of the pearl fisheries was, to conduct a field study. Although Cossack has become almost a ghost town, the local leaders (who are trying to unite the local culture by holding the 'Shinju Matsuri [Pearl Festival]' associated with pearl shells), along with researchers from Perth, Freemantle, and Canberra, all showed a strong interest in Mr Fujita's documents. After having a good discussion about how the archives should be created, we decided to provide an English translation along with a reprint of the notes written in the sketchbook. Then Mr Fujita's sketchbook and memoir will be used extensively, and we will be able to overcome the shortage of private documents about the pearl fisheries.

Pictures in the sketchbook

I shall talk about several features of the pictures in the sketchbook. First, I would like to point out the accuracy of the drawings. For instance, Mr Fujita drew the coastline from the base in Cossack to the south-western section of Exmouth Gulf, which is about 400 kilometres as the crow flies, and the nearby islands. The outline of the coastline where the main base of the pearl fisheries was located and the distances between each island and their relative locations were extremely accurate, even when we compare them to satellite photographs or to a recent map, as I have shown in my commentary on the Montebello Islands (sketch No.26). I could not confirm it in my interview with Mr Fujita's family members, but presumably he must have brought back some kind of a chart or a topographical map and drawn his pictures with reference to it. If he was able to draw them just from his memories, it must have been a miracle.

An observant eye and the power of expression

Secondly, I would like to point out Mr Fujita's observant eye and his power of expression. Several pictures in the sketchbook are three-dimensional sketches from a bird's eye view. For example, Mr Fujita drew a view that encompasses the town of Cossack, the sailing route that follows a roundabout path from the northern end of the Dampier Archipelago to Flying Foam Passage, after which the ship enters a channel with a strong current, and the scenery around Beadon and Onslow, where a vast flat land extends as far as the eye can see. These sketches are not just perspective drawings seen from the ship. Mr Fujita went on shore and made various observations from different angles and then drew these sketches.

Moreover, although we omitted this fact from our commentary, when we look carefully at sketches such as No.12, No.13, and No.21, we notice that on the lugger route and in the ocean around the main islands, the depth of the water is recorded in detail. Even the current chart does not fully show the depth of water in this area of sea, but Mr Fujita seems to have measured it meticulously using a lead sinker and slender strings. Because the depth of water in the operational area of the sea, the topographical features of the seabed, the sand quality of the seabed, the mud

quality, and the varieties of seaweed would strongly influence the habitat and growth of pearl shells, divers and tenders needed to know them in detail. It was also important to know the depth of water and the directions of tide and wind to properly determine the route for the lugger. As Mr Fujita wrote in his Cossack memoir, he was strictly taught how to measure the depth of water by his seniors for several years after the first year he spent on board a lugger.

Mr Fujita also drew creeks and inlets for sheltering from rainstorms, and anchorage points where it was possible to wait for the turning of tide and wind, as in this area of sea the weather is always unstable, and cyclones (willy-willies, typhoons) often hit from November to March in the following year. Moreover, he added locations where they could obtain fresh water because of the shortage of fresh water supplies on the lugger, and places where they could find mangrove forests for fuel. Therefore, this sketchbook provides a comprehensive picture of the fishing ground for the pearl fisheries, despite looking like simple sketches of scenery and sea-creatures whose expressions are skilfully drawn.

Interest in sea-creatures

A third feature that draws our attention is Mr Fujita's interest in sea-creatures and his keen observation of them. Of course, he wished to enrich his food supply. Pearling was generally considered to be a 'hard', 'dirty' and 'dangerous' work. On top of that, because of the cramped living quarters in the lugger, the lack of entertainment, and the low wages, most white men did not want to be engaged in pearl fishing. During the fishing season from March to December, people working in the pearl fisheries had no roof over their heads. They led an unstable life on the lugger and had to sleep in the narrow cabin under the deck. The cabin was so cramped that there was less than 150 centimetres to the ceiling, and it was hard even to stand up. It was particularly difficult for a tender, like Mr Fujita, who needed to be vigilant all the time, as he was responsible for divers' lifelines and had to operate the lugger at the same time. In the sketchbook notes and memoir Mr Fujita wrote about his leisure pursuits, such as catching turtles and fishing on Sundays. Perhaps he wished to have a break from the monotonous and difficult daily work. We gain a strong sense of Mr Fujita's joyful and observant eye from his sketchbook pictures of rare creatures in the sea.

Mr Fujita observed how the sea birds made their nests and then laid eggs on the islands near Flying Foam Passage. He also observed in detail various sea turtles he encountered in the sea during the year. It was particularly easy to catch sea turtles which were floating around the sea while mating from October to November, as they were not cautious at all. Presumably Mr Fujita's lugger was operating near Sholl Island at the peak of the breeding season, as he closely observed how the sea turtles laid their eggs. (Of course, turtle eggs were a source of food.) As for the illustrations of 'kakoro gai' (the normal Japanese name is yagura-byōbu gai, which means 'semi-twisted shell'), Mr Fujita's drawings are so meticulously executed that they surpass even the pictures in Wakan-sansai-zue (Illustrated Sino-Japanese Encyclopedia compiled in 1712) or in Yamato-honzō (Medicinal Herbs of Japan written by Kaibara Ekiken in 1709).

By the way, as I am not specialized in this field, I knew neither the Japanese name nor the English name for 'kakoro gai'. Therefore, I sent a digital copy of Mr Fujita's drawing to a friend who works at the Okinawa Prefecture Deepsea Water Research Centre and sought the Japanese name for it. My friend asked his acquaintances who work for the Japanese Coral Reef Society. His acquaintances said in one accord that the picture drawn by Mr Fujita must be yagura-byōbu gai [semi-twisted shell]. It was so easy to identify the Japanese name for it, as Mr Fujita draw the picture meticulously. To add a sequel to the story, the shell I am talking about has been kept as a zoological specimen in the Kushimoto town. As I was not attentive enough, I did not know that these shells were brought back from Thursday Island off the coast of Queensland in Australia before the war. I was told this by Mr Tanaka Masato, who works for the Kushimoto Marine Park. The picture of a semi-twisted shell inserted with the commentary on 'kakoro gai' is a collected specimen brought back from Thursday Island.

Dugong

One more drawing at which I was marvelled is the depiction of a 'rogon' (dugong). Mr Fujita drew it so skilfully that I felt as if a dugong was swimming in

the sea in front of my eyes. Minakata Kumagusu (a famous naturalist who studied at the British Museum from 1892 to1900) once contributed an article entitled 'The Story of a Mermaid' to the Muro Shinpō newspaper. I wonder if Minakata knew that people from the same prefecture encountered dugongs every day and observed them in detail. (See Minakata Kumagusu Complete Works, edited by Iwamura Shinobu and others, Vol. 6, pp. 306-311.)

As I have been conducting a field study in the Torres Strait (including Thursday Island) off the coast of Queensland in Australia for a long time, I was lucky enough to have many opportunities to see dugongs. Dugongs are so sensitive to sounds and so agile that it requires great skill to capture them, so there would have been few opportunities for Japanese people to capture them. They may have seen dugongs occasionally from the lugger when they came close to the shore to forage eelgrass at high tide. Nonetheless, Mr Fujita's sketch of a dugong captured the movement of a dugong and its postures so skilfully that I could see the dugong swimming in front of me. Once again, I marvelled at his observant eye.

In his sketchbook I found one more etude of a dugong that was already coloured. It was slender like a dolphin, and Mr Fujita seemed not to be satisfied with his own drawing. After finishing the etude, some amendments were made to the head and the outline of the body. I had many opportunities to go on board with Torres Strait Islanders who went fishing dugongs and had several opportunities to observe a dugong which was washed ashore. When I saw Mr Fujita's sketches, I once again clearly remembered many encounters with dugongs. When I first saw a dugong in the Torres Strait, I could not see any resemblance between a dugong and a mermaid, such as Mr Fujita referred to in his notes.

The later life of Mr Kenji Fujita

When we decided to publish the late Mr Kenji Fujita's rare documents, we had an opportunity to conduct an interview with Mr Fujita's eldest daughter and her husband. I shall now describe several episodes from Mr Fujita's life. In so doing I shall supplement this sketchbook and memoir.

Mr Kenji Fujita was born as the second son of Mr Ushima Fujita and Mrs Shimano Fujita. He had nine brothers and sisters. He was born during the Meiji period, but the exact date of his birth is not known. I heard that Mr Fujita died in Heisei 8 (1996) at the age of ninety-two, so presumably he was born in Meiji 37 or 38 (1904 or 1905). The house where he was born was ten metres to the west of the site of the Myōjin primary and secondary schools in Kozagawa-chō, Higashimuro-gun, in Wakayama. The exact place name was Myōjin Aza Ichiburi, but the small village was called Oyanagi among the residents.

As he wrote in his memoir, Mr Fujita was sickly in his youth. His sickness appeared to be caused by a stomach ulcer. In those days, he was engaged in agriculture and cutting undergrowth from the bush. After the war, Mr Fujita often sewed his own everyday clothes using a sewing machine. When his daughter Toshiko asked him about his sewing skills, Mr Fujita told her that he worked for the men's dressmaking shop in the neighbouring town of Koza for two years and learnt how to sew men's clothes there.

Around the house where Mr Kenji Fujitta was born in Myōjin, Kozagawa-cho, Wakayama 2017/10/28

After returning from Cossack, Mr Fujita married Miss Suzue Wada, who was from Myōjin Aza Ōyanagi, Kozagawa-mura. There was a quite a big age gap between them. Mrs Toshiko Fujita told me that her mother was born in the Taishō period. Mr Fujita had sent all his money earned in Cossack to Japan. When he got married, he built a house, where his daughter and her husband currently live, and started their new life. It seems he excavated the end of the ridge facing the Koza River. The address of his house is not registered in a residential area but in a mountains and forests area. (Japanese village addresses are classified in two categories: an agricultural and residential area and a mountains and forests area. Perhaps when Mr Fujita built his house, he did not change the registration from the mountains and forests area to the agricultural and residential area.) The house is thirty meters to the west of the house where he was born.

A father who loved machinery

According to Mrs Toshiko Fujita, her father worked in the field and rice paddy after returning from New Guinea, where he had spent some time as a prisoner of war after the end of the Pacific War. At the same time, he worked as the person in charge of rice polishing for the farmers' cooperative. He also produced pressed barley. After her father resigned from the farmers' cooperative, he bought a rice-polishing machine and continued working as a freelance rice-polisher. Of course, he was also engaged in cutting trees and tree branches and cutting the undergrowth of the forests. Her father really liked any kind of machinery. He bought all sorts of agricultural machines such as a cultivator and a tractor. The neighbours often came and asked to borrow her father's agricultural machines. Her father also produced cotton work gloves by setting up his own machine. At that time, two or three households were engaged in this kind of work in the village.

As Mr Fujita wrote in his memoir: 'Those who worked overseas for a long time have special memories.' Mr Fujita's experiences during the days after the war as recounted by his eldest daughter, Mrs Toshiko Fujita, made me imagine clearly how he spent time on the tropical sea.

Mr Fujita named his second daughter Midori [green], which must have reminded him of the dark blue colour of the tropical sea. He may also have named her after the blue-green colour of the deep water from the clear Koza River, which flows in front of his house. Mr Fujita began portraying the deep images in his heart on page after page of his sketchbook, and wrote his memoir, after receiving some advice from his second daughter Midori: 'If you have so many memories, just write them down.' Perhaps the people surrounding him could not picture the images from his days in Cossack, but the way Mr Fujita spent his days revealed the deep images of the tropical ocean that were chiselled in his body. Mr Fujita's deep images appeared as the wisdom of later life.

Firstly, the saw Mr Fujita used every day was not an original Japanese one, which is pulled when used, but a western one, which is pushed. This involves not just a difference in the direction in which effort is applied when a saw is used. As is clear when you use it, the use of western saw must be learnt as whole-body movement, including the posture customary in the west. He also kept his diver's suit, and the canvas in which he wrapped it, till the end of his life. They must have been the remnants of his Australian life.

The technique of yamatate

Along with such concrete evidence, there were some skills which Mr Fujita acquired with his body. It was interesting to hear about the time when Mr Fujita set a snare basket to catch eels in the Koza River, which flows in front of his house. To confirm the place where the snare baskets were set, Mr Fujita used features of the mountains as reference points, such as the peak of this mountain, the peak of that mountain, and an outstanding feature on the mountainside ［Yamatate］. Mrs Toshiko Fujita told me that although other people used roadside objects or riverside objects to confirm the location of snare baskets, her father always used the features of the mountains. Of course, he could have used riverside objects, but Mr Fujita opted for mountain features. Perhaps it was easier for him to use the mountain features, or he may have become attached to the way he used to do so in Australia.

Yamatate is commonly used amongst Japanese coastal fishermen, and this is the way for those spending their life at sea to confirm their current location or to navigate. That is, this is a basic technique from life on the lugger that enabled a

crew engaged in pearl fishing to navigate between fishing grounds and to confirm a fishing location in the fishing ground at sea. This is a kind of triangular survey method and is usually referred to as yamatate or yama'ate. Mr Fujita worked for a long time as a tender responsible for the lifeline of divers on the lugger, and he was also a sailing manager while the lugger was in operation. Therefore, he must have thoroughly mastered the yamatate method. As Mr Fujita wrote in his memoir, his seniors, who knew that he was not strong, trained him rigorously to make him a tender and taught him the yamatate method. The training continued for several years, and Mr Fujita failed many times. However, as Mr Fujita was brought up in the mountains, he was a person full of curiosity and his observant eye captured the scenery at sea from the lugger in detail. Without noticing, he fully acquired the yamatate method with his body. In his sketchbook Mr Fujita drew a meticulous illustration of this yamatate method, and he also used this method to draw some coastlines and the shapes of islands. His sharp observant eye and meticulous way of measuring positional relationships were fostered by his life on the lugger.

The use of pulleys

Mr Fujita's son-in-law, Mr Masaki Fujita, praised the way his father-in-law used pulleys. Mr Masaki Fujita particularly praised the way his father-in-law lifted heavy objects on his own by combining multiple pulleys. For example, Mr Fujita lifted a big tree felled in the mountains on his own using multiple pulleys. On another occasion, when Mr Fujita was transferring soil to a field which was above his height, he did so not by using a wheelbarrow to carry the soil, but by using a pulley to lift the soil from the field below. According to the episode I heard, Mr Fujita arranged bars in a V shape on top of a log and combined several pulleys and ropes to make a kind of crane. Then he lifted the soil by himself and created a rice field.

Cossack, where Mr Fujita stayed, played a role as an outport not only for the people in Cossack, but also for the people in Roebourne, which was twelve kilometres inland and a centre for administration and for stock farmers. As Mr Fujita drew in his sketchbook, ketches docking at the wharf usually had a simple crane installed for loading and unloading cargo.

Regarding the use of pulleys, I also heard the following episode. When the Koza River flowing in front of Mr Fujita's house was flooded, the first floor of his house was inundated above the floor level. Then Mr Fujita made a big square hole in the second floor, and lifted some furniture, including a refrigerator, to the second floor using a pulley.

To operate a pulley properly is an essential technique for the sailing on the sea. In his sketchbook Mr Fujita drew many pictures of the luggers owned by his employer Mr Muramatsu. Moreover, all the pictures Mr Fujita drew are of the lugger with all sails unfurled. When the first diver or the first tender asks the crew to unfurl all sails of the lugger, he orders, 'Chōcho ni seyo!' [Make the shape of a butterfly!] At this crucial moment, one must pay attention to the pulleys set on top of the mast and to several sails. According to the direction and strength of the wind, the first tender must adjust the direction and speed of the lugger, while the lugger is in operation or moving between the fishing grounds. He must raise or lower the three sails (mainsail, foresail, and jib) and take in or furl them using rope and several pulleys. While navigating between pearling grounds, the first tender must also control the rudder, which is resisting the sea tides, using the rope and several pulleys set on the quarter deck of the lugger, all by himself.

The first tender was responsible for all these tasks. Mr Fujita who worked as a tender for a long time was responsible for the operation of the sails and rudder. During the fishing off season, it was also the tender's task to order the crew to overhaul the lugger. Mr Fujita loved machinery by nature; he must have thoroughly known the structure of pulleys set on the lugger and must have improvised in the event of an emergency.

When we read in the note accompanying the sketch of a 'diverboat' (the Japanese pearl divers called the lugger a 'diverboat') that 'we enjoyed sailing just by relying on the wind as we had no propulsion engine', the image of Mr Fujita sailing the 'diverboat', just by using several pulleys and the rudder on the Australian sea, coincides with that of Mr Fujita using the pulleys in his everyday life after he returned to Japan.

I shall add one more episode. When we looked through the pages of the family album, we noticed Mr Fujita in an unusual posture. It was a photo of Mr Fujita

cutting wisteria vines on the cliff beside his house. He placed a ladder and a log on the cliff. Mr Fujita was standing on the middle of the log, and both his legs were resting on fifteen-centimetre stakes alternately driven left and right into the log. When Mr Fujita was operating the lugger, he went up and down the mast to confirm a distant destination and the location of a coral reef on the shoal, and occasionally to adjust or mend the pulleys near the top of the mast. Although there were no stakes driven into the mast of the lugger, the stakes on the log must be an application of the practice on the lugger. The way of life in Australia was etched into Mr Fujita's everyday life in Japan after the war.

Mr Fujita cutting wisteria vines on the cliff beside his house

I happened to recount the following episode to the eldest daughter, Mrs Toshiko Fujita.

> When your father was on his way to Cossack, he stayed at the Satsumaya inn in Singapore, which was run for migrants. Although for sanitary reasons he was told not to do so by the inn's master couple, your father bought some ice sold on the street by raising them with a thin rope. It was so hot that he could not help doing so.

Mrs Toshiko Fujita quickly replied. 'In his later years, my father often did so in our house.' According to Mrs Toshiko Fujita, when the mobile sales wagon came by on the prefectural road along the Koza River, Mr Fujita attached a basket to some rope and bought whatever he wanted, such as lollies and sweets, and lifted them using the basket and rope.

Everyday behaviours that Mr Fujita developed in Australia may have reminded him of the life in Cossack, and he may have often been lost in memories of his youth in Australia. Once Mr Fujita began making the sketchbook and memoir in his later years, his memories came flooding back one after another, and emerged in his detailed sketches. Not only Mr Fujita's skills, thoroughly acquired by his body, but also body images appearing in various places, were expressed in his sketchbook and memoir as 'precious memories' etched into his heart.

The process of making the sketchbook

Mr and Mrs Masaki Fujita told me how the manuscripts of Mr Kenji Fujita's sketchbook and memoir were left with their hands after their father's passing. The eldest daughter, Mrs Toshiko Fujita, was busy caring for her children, and the son-in law, Mr Masaki Fujita was busy with his carpentry work, so they had seldom listened to their father talk about his Australian life. In general, Japanese people are not accustomed to telling their children about the experiences of their youth. Grandchildren may have heard about their grandfather's experiences in his youth just once, not many times. One day during Mr Kenji Fujita's later life, his second daughter Midori, who lived in San Francisco in America, came home to see her

parents, and she encouraged her father to leave a record of his experiences: 'If your memories are so strong, you had better write them down.' Then Mr Kenji Fujita began writing his memories, as by nature he liked writing.

When they checked the articles left by their father, there were two sketchbooks, two large notebooks with white covers, and fair copies of twelve and twenty-two manuscript papers with squares for four hundred characters. According to Mrs Toshiko Fujita, all the writing materials, except for the manuscript papers with squares for four hundred characters, were the remnants of his grandchildren's educational materials from their schooling. The sketchbooks, watercolours, and pastel crayon that Mr Kenji Fujita used were also left by his grandchildren.

When we read the content of the memoir, we see that Mr Kenji Fujita first made a draft in a large notebook as he remembered his past. Nonetheless there is not much difference between the drafts and the fair copies in the way he related his past. Even in the drafts written in the large notebooks, Mr Kenji Fujita dredged his memories from the bottom of his heart and wrote them down without any embellishments and with no hesitation. Although there were some notes added, there were neither deletions nor amendments. The trip to Cossack, the life on the lugger there, and the draft pencil sketches, which were later included in the sketchbook, were written down for twenty pages. Then the account of the Pacific War as a civilian employee of the army was written for twelve pages. Finally, the family history and the family tree continued for thirteen pages.

The two sketchbooks and the fair manuscript of the Cossack memoir (though not the large notebooks) were taken to America by the second daughter Midori, as she was the one who had advised Mr Fujita to write them. Mr Fujita thought that there was no point in him keeping them, and he wished these documents to be kept by Midori, who showed some interest in his memories. However, after Mr Fujita passed away, Midori thought that these documents should be kept in her parents' house, and she brought them back from America. That is why these documents were kept here in Japan.

On the last page of the sketchbook Mr Fujita wrote the following message:

> Although these sketchbooks and writings are dear memories for those who worked [as pearl divers] over there, those who do not have these experiences would not be interested in them. You can take them back when you return to Japan. Now I am writing down the memories in my notebook from when I was in New Guinea. It is rather difficult to draw pictures about our life in New Guinea. I haven't drawn any pictures yet, but I am writing down memoirs little by little in the notebook.

After finishing the sketchbook and memoir of life in Cossack, Mr Fujita added the above message on the last page of the sketchbook. When I first read this message in 2011, I was not sure what it meant. It may have meant that the sketchbook was made in Cossack, and he was happy for his friend to take it back to Japan. However, as Mr Fujita wrote about New Guinea, the notes should have been written after the war. For some time, I wondered when these documents were written, but suddenly the circumstances became clear. I understood that this message was addressed to his second daughter Midori who lived in America when I heard how these precious documents were made from Mr and Mrs Masaki Fujita.

Features of the memoir

Until now I have been writing about the features of the sketchbook. Now I shall briefly write about the memoir. First, I shall comment on Mr Fujita's memoir of the voyage to Australia. By the end of the Taishō period, the routes for the voyage to Australia and for international steamers were more or less established. Some Japanese people went to Australia for the first time soon after they graduated from higher elementary school (equivalent to the first or second year of junior high school, that is at the age of thirteen or fourteen), others went there at the age of about twenty. Everything must have been interesting for these young people to hear and see, and they must have had many experiences on the way to Australia. However, almost no documents were left about the voyages to and back from Australia. No memoir was written by the people who went to Australia. Therefore, it is very precious to have Mr Fujita's memoir which was written by the traveller himself.

The story of the failure of a public phone in Japan, the depiction of a chestnut seller, a barber who Mr Fujita happened to see on board while berthed in Shanghai during his international voyage, the communication with a Chinese foreign officer in writing, many signboards full of Chinese characters seen in Hong Kong, which made Mr Fujita feel relaxed in an unfamiliar place… Most present-day overseas travellers would identify themselves with these episodes. Then he describes the relationship between the Asian ethnic groups who came on board and Mr Fujita himself, and his realization of the gap between the rich and the poor, as a deck passenger wearing school uniform, which was commonly seen in Japan. Then Mr Fujita writes about the racial discrimination experienced in Roebourne, where most residents were white people. Mr Fujita describes his first taste of the tropical fruit mango. Although he had already experienced typhoons and a river flood in Japan, Mr Fujita marvels at the severity of the natural dangers such as the coastline in the Western Australia with its massive tides, threatening thunderstorms, and cyclones. And then he marvels at the everlasting, vast, reddish-brown land.

The second thing to note is the account of the operation of the lugger, which was heavily influenced by the wind and tide, after arriving in Cossack. He describes the change in the operating area, depending on the growth of seaweed in response to variations in the sea temperature, the strict human relationships on the lugger, based on the job classification system, the rewards system, any increase in the amount of pearl shells, along with innovations in fishing technique. I would also like to draw attention to his writing about the competition between the divers.

What is described in the sketchbook and memoir is not just the record of a migrant worker and pearl diver, but the life record of an ordinary person who might be found anywhere in the southern part of Wakayama. Mr Fujita's experiences, and his later life supported by these experiences, manifesting as wisdom in everyday life, can be shared with many people. Therefore, we have decided to publish these documents.

Finally, regarding the notes in the sketchbook, we tried to keep the transcription of the original as much as we can as an archive. However, we changed old Chinese characters into those Chinese characters designated for daily use in Japan, and the old kana orthography and declensional kana endings to new kana orthography and declensional kana endings. As for the notes written in the pictures, we added symbols such as A, B, and C to those pictures, and then we displayed the Japanese reprinted sentences and their English translations, corresponding to these symbols. Regarding the placenames and simple notes accompanying the pictures, we added numbers where these placenames and simple notes were. Then we provided a list of placenames and simple notes in the left column. In some places we added English explanations in brackets. Furthermore, if the pictures were of local scenery or bird's eye views, we added current satellite photos to assist understanding. We thank Google Earth, Apple Maps, and the Australian Government National Map for allowing us to use their satellite photos and maps.

About Cossack

A short history of Cossack

Cossack in Western Australia no longer appears as a placename in an ordinary atlas in Japan. Some may remember this placename associated to the Pilbara from where iron ore is exported. Even those people who are interested in Japanese migrants who went as pearl divers to the north coast of Australia before the Pacific War may not remember this placename. Compared to placenames such as Thursday Island, Broome, and Darwin, Cossack is less known. This shows how few records were left and how little research has been conducted on Cossack. In particular, the period when Mr Fujita spent time as a pearl diver is scarcely known.

However, this was the very first place where pearl fishing was begun in the tropical oceans of Australia by Europeans, who noticed the gold-lip or silver-lip pearl shells (Pinctada maxima) worn by indigenous people on ceremonial occasions. That was in 1866.

At that time this place was called either Mystery Landing or Tien Tsin. Ten years later the placename was changed to Cossack, after a battleship that visited there.[1] Then, almost at the same time, land around Roebourne, which was twelve kilometres south-east of Cossack, was claimed by stock farmers. Cossack became

the only base port in north-western Australia for exporting livestock to Asia and bringing in living supplies.[2]

At first, indigenous people were employed to work in the pearl fisheries in exchange for flour and tobacco, and they were driven very hard. Inhumane acts by white men who dreamt of making a fortune at one swoop were so widely known that they left a major blemish on the history of Australia.[3] The difference between the full tide and the ebb tide was about six to twelve meters on the north-western coast of Australia, and pearl fishing was conducted only on the ebb tide. However, when resources dried up, pearl fishing was conducted by skin diving. For that type of fishery, workers were brought to Australia from the South Pacific. These workers came via Sydney. By the beginning of the 1870s, Asian workers were introduced from Singapore in Southeast Asia, from Kupang in South Timor, and from the Sulu Strait in the southern Philippines. If white people had been employed, the work would not have been profitable. An early precedent was seen in the southern part of Shark Bay. After the introduction of diving apparatus, Asian workers were brought not only from Sorol, Alor, and Makassar in East Indonesia, but also from the island of Java and from the Philippines.[4] When gold was discovered in Australia, many Chinese workers immigrated to Australia. Perhaps it was due to the descendants of these Chinese immigrants and to the immigration of Chinese from Hong Kong and Singapore, that a Chinatown emerged on the outskirts of Cossack, as shown on a map made in the middle of 1890s.

The arrival of Japanese people

It is not clear when Japanese people first came to this place. It has been suggested that from the end of the Edo period to the beginning of the Meiji period, Japanese people employed on foreign ships disembarked at Australian ports and were subsequently employed by the pearl fisheries. In the Occurrence Book of the Cossack Police Station there was a record of the arrival of Japanese people as the crew of the North Australia Pearling Company based in the Port Darwin in 1885.[5]

As I shall discuss later, in 1884 about seventy Japanese people were employed by an agent in Hong Kong. Fifteen of them disembarked at Darwin. The destination of the rest was Thursday Island. It has also been noted that for several years after 1884 the major pearl fishery run by the white people moved their luggers with the mother ship based at Thursday Island to Northern Australia and Western Australia. Perhaps some Japanese pearl divers employed at Thursday Island were on aboard these luggers.[6] They were mostly based at Derby in the interior of King Sound. While they had some disputes about the fishing fee with the West Australian colonial government, they were already operating near the Montebello Islands and Barrow Island, which were included in Mr Fujita's sketchbook. In Darwin, pearl fishing became a fad for a while in 1884, then remained stagnant till 1892, when a second boom began. While the pearling business waxed and waned, pearlers in Cossack and Onslow recognised the high efficiency of Japanese pearl divers, and they may have gradually started employing more Japanese divers and crews.

Isuke Hamaura (Charlie Japan, Eijirō Hamaura), who appeared in Darwin in 1892, had arrived in West Australia in 1880, and worked in Cossack and Broome for nine years from 1883.[7] Although the number of Japanese migrant workers in Cossack was relatively small, compared to other pearl fishing bases, they presumably began working stably after Jirō Muramatsu became a pearler in 1906. I shall talk about him later in this introduction.

By the way, Cossack's resident population in 1896 was 729 in total. It was made up of 259 white people (209 permanent residents, 20 temporary residents and 30 sailors), 350 Asian contract workers (during a non-business period), pearlers, shopkeepers, and 212 indigenous people.[8] However, once stock farmers began settling in the Kimberley in the northern region of Western Australia, pearl fishing was conducted mostly on the Eighty Miles Coast and in King Sound in the north. Then the bases for pearl fishing moved to Broome overlooking Roebuck Bay and Derby on King Sound. To compound matters, the Cossack port was hit by a cyclone in 1897 and became shallow. Then in 1904 the Point Samson Wharf on the Indian Ocean was opened. As a result, the use of Cossack as a port in north-western Australia gradually declined, and the town of Cossack rapidly dwindled in size.

Let us talk about the Japanese people in Cossack. Together with Muramatsu, who I shall talk about later, some other Japanese people appeared in Cossack, including several shopkeepers, Kōzō Nishioka and Eki Nishioka, who ran a photo studio, and Yasukichi Murakami (who arrived in Cossack from Wakayama in 1897

together with his friend Kumazō Asari). However, they had all moved to Broome by 1990.[9] When Mr Fujita stayed there from Taishō 14 (1925) to Shōwa 5 (1930), Cossack was already almost deserted. Jirō Muramatsu was active as the main lugger owner and as a shopkeeper. The town had a store run by Muramatsu, a liquor shop, about fifteen white people's residences, and four or five Japanese houses in the 'Japan Town'. As Muramatsu managed ten luggers at the Cossack base from 1906 on, Japanese pearl divers survived. During the pearling off-season, at least forty Japanese divers and crew were added to the population of this deserted town.

'Kameya' and 'Okin-san'

In a picture in Mr Fujita's sketchbook, we can see that there was a shop with the strange name of 'Kameya' in the town of Cossack. At first, I thought that it must be a Japanese store named 'Kameya'. However, as Mr Fujita notes in the sketchbook, there was a canning factory there processing turtle meat when he made his voyage to Australia around 1925. I shall write about this factory a little more. According to a newspaper article published in West Australia in the early 1930s,[10] the main fishery was the Montebello Islands, 150 kilometres from Cossack, and green turtles were captured there. The name of the factory was Monte Belo Sea Product Ltd. They declared that turtles under ten kilograms were not to be captured to protect ocean resources.

At that time turtle soup was considered a gourmet food in Europe, and the company sent a sample to London. The newspaper article reported that not only canned turtle meat and canned turtle soup were made from the turtles, but that toilet cleaner and medicaments were made from turtle oil, and turtle shells were used for fertilizer in London. At the beginning of 1932 a general meeting of the company was held in Perth, and the company tried to raise 10,000 pounds in capital so that their market would be expanded worldwide. However, when Mr Fujita returned from Darwin to Cossack around 1935, after five years absence, the 'Kameya' factory was closed, and the factory building had been transferred to Muramatsu, presumably because he was one of its founders. As the factory was a stone building, it became a place where the crew of the luggers, including Mr Fujita, could rest from the summer heat during the pearling off season.

There is one more episode I would like to mention. In his sketchbook Mr Fujita writes that he met 'a Japanese woman called Okin-san' at the 'Beadon (Onslow)' port. Then 'he was treated by her twice.' About Okin-san more detailed research has been conducted by Noreen Jones and Yuriko Nagata, who is my research colleague. I shall briefly write about Okin-san on the basis of a primary source[11] left in Australia, which my co-editor Keiko Tamura obtained.

According to a source obtained from the Immigration Bureau, 'Okin-san' was born in Nagasaki on 14 March 1878. The Romanised full name, supposedly written by the officer in charge, was Kin Arakawa. The name she herself recorded in the signature column could be read as Kin Yasukawa, Kin Ogawa, or Kin Agawa, depending on whether the signature was written in Chinese characters or hiragana (the basic Japanese phonetic alphabet). She went through Australian immigration procedures in Darwin in August 1895. Although one source recorded her destination as Thursday Island in Queensland, another recorded it as Cossack. (According to Noreen Jones, Okin-san's destination was Cooktown in Queensland.) Perhaps she was a karayuki-san (a term for Japanese girls and young women who went overseas to serve as sex workers during the late 19th and early 20th centuries).

After she moved to Onslow in West Australia, she settled there. She gave a birth to her first son Eddie with her Japanese husband in 1910. Then she had her first daughter Sissi the following year. She had two more sons. According to the registration of foreigners made by the Onslow Police Station in October 1939, Okin-san was a housewife and her husband (the father of two sons) was born in Penang, which was one of the English Straits Settlements, in 1871. His name was Siam Ahmat, and he was older than Okin-san by seven years. Judging from his first name Siam, Yuriko Nagata assumes that he was Thai. However, as he was born in Penang and his surname was Ahmat, he must have been Muslim. So, as Mr Fujita wrote in his sketchbook, he was likely to have been Malaysian. The Okin-san whom Mr Fujita met was a woman of about fifty.

According to an interview conducted by Noreen Jones in 1999, Okin-san's youngest son and her grandchildren remembered that Okin-san cooked sashimi and sushi, made soy sauce from soybeans, grew vegetables, and raised chickens and ducks. At that time many Japanese people lived in Onslow, including the crews of luggers, vegetable farmers, and cooks. They formed a small Japanese society. Mr Fujita wrote that 'Okin-san seemed to have four children (including a son aged twenty-five and a daughter aged twenty-three)'. Her eldest son Eddie, her youngest son Patrick, the eldest daughter Sissi, and Okin-san were all interned at the time of the Pacific War. Her Malaysian husband and another son who went to the front with the Australian army avoided internment. When she was released from internment after the war, Okin-san went back to family life, as her husband was an English subject, and her children were all born in Australia.

Jirō Muramatsu

Although there are some documents about Cossack during the period up to the 1890s, not much information remains on Cossack during the 20th century. In that sense, Mr Fujita's sketchbook and memoir are precious records about Cossack. Perhaps I have now written enough about Cossack, and I will conclude. What remains for me to write about is Jirō Muramatsu, who was Mr Fujita's employer. Although Mr Fujita wrote that Jirō Muramatsu was an Australian-born Japanese, he was in fact born in Japan. When Mr Fujita was employed by Jiro Muramats, Jirō was in his mid-forties to early fifties. He was also a well-established entrepreneur who managed ten luggers and was well regarded amongst white people. Perhaps it was Jirō Muramatsu's gentlemanlike behaviour that made Mr Fujita think Jirō Muramatsu was an Australian-born Japanese.

His father Sakutarō Muramatsu arrived in Australia in Meiji 21 (1888), and three years later in 1891 he opened the shop in Cossack.[12] His son Jirō Muramatsu wrote in his diary that his father was born in Shizuoka Prefecture (Suruga) and that his mother was from the same prefecture. According to David Sissons, Jirō Muramatsu was born in Kōbe in 1878, however it is highly possible that he was born in Fujieda in the same Shizuoka as his father. Little is known about why Sakutarō came to Australia and what he did before he came to Australia. However, he had some knowledge of the Japanese people who came to northern Australia to work as pearl divers and of the places where they embarked and disembarked.

Sakutarō's name appears in old Japanese government documents. Thirty-seven Japanese people were employed by John Miller, and in 1883 they were first granted permission by the Foreign Ministry and formally sent from Kanagawa Prefecture to Thursday Island in the Queensland colony. In the following year another sixty-nine Japanese people were sent there through the intermediation of Fearon, Low & Co. in Kōbe. The names of two Japanese persons from Kōbe who mediated between these Japanese workers and Fearon, Low & Co. appear in the document: Chōbei Takeda and Sakutarō Muramatsu. It is not clear whether they had a thorough knowledge of the content of the work contract and the actual situation of the workers or not. When the contractors arrived at the actual place, they found that some pearlers were swindlers. One of the contractors fell sick a year after his arrival in Australia and came back to Japan. A friend introduced him to Kakuzō Hirayama in Kōbe. Hirayama burned with righteous indignation against the pearler who had swindled this Japanese worker and prepared a written petition to the government. It appears that the worker himself did not present the petition either to the government or to the mayor of Hyōgo Prefecture. However, two years later a newspaper reporter stationed in Kōbe heard of the story from Hirayama's friend and wrote an article in the Chōya Shinbun newspaper, which provided a platform for civil rights groups to publish their views.[13] It exposed the miserable life of Japanese workers in Australia for the first time. The government requested the mayor of Hyōgo prefecture to conduct an investigation into the matter. A copy of the petition was left with Hirayama and the names of Chōbei Takeda and Sakutarō Muramatsu appear in it. They acted as mediators between the Japanese workers and the agent of pearlers, but how deeply they were involved in this matter was not known. It is only clear that Sakutarō Muramatu was well informed about the rise of the pearlers in Australia and the migration of the Japanese workers to Australia.[14]

In any case, Sakutarō Muramatsu opened a shop in Cossack and dealt in daily necessities, clothes, accessories, and pearl diver's equipment. He was quite a well-known person in Cossack. Having built a base for his life in Cossack, Sakutarō went

back to Japan to bring his son Jirō (who had already moved to Kōbe from Fujieda in Shizuoka) to Australia in 1893. The father and son arrived in Broome in September of the same year. After spending some time in Broome, Jirō came to Cossack the following year. A year later, in June 1895, Jirō entered a private school (Xavier College) in Melbourne. While he was studying there, his father Sakutarō passed away and was buried in Cossack. At that time Jirō was nineteen years old and did not yet qualify as a legal heir. Jirō took over his father's work once he turned twenty-one years old. Whether he thought it would be easier to run his business or not, Jirō became a naturalized British subject in Victoria, Australia.

Jirō got married in 1905 at the age of twenty-seven. He entered the pearl fishing business. As major pearl fishing activity had gradually been moving north to Broome in the 1880s, it may be assumed that Jirō bought the luggers from white owners who were no longer able to finance themselves. Then J & T Muramats quickly expanded their pearl fishing business. By 1912 Jirō had already been given permission to manage ten luggers. It is not clear how many luggers were owned by the white men based in Cossack. According to a revenue report made in 1915, Jirō owned eight luggers and employed more than half of the pearl divers in Cossack. It was also reported that most freehold land in Cossack was owned by the Muramatsu shop. The Muramatsu shop, his home, and 'Kameya', where European settlers produced turtle meat and turtle soup around 1930, which all appear in Mr Fujita's sketchbook, were among his possessions. Eight luggers, including the Editha, which was the first boat that Mr Fujita worked on, were licensed to Jirō, who was given permission to employ fifty-six contractors.

However, Cossack ceased to play a role as the base of the pearl fishing industry during the 1920s. Being also affected by the Great Depression, Jirō Muramatsu moved his base to Darwin with half of his luggers in 1929. Mr Fujita, the author of the sketchbook also moved to Darwin. The move was an indication of the strict legal regulation on pearl fishing in West Australia. Presumably Jirō Muramatsu was anticipating more relaxed regulation of the pearl fishing industry in Darwin in the Northern Territory and was attempting to expand his business. At the same time, Jirō remained connected to Cossack and left four luggers there after his move. Mr Fujita worked in Darwin for five years and then returned to Cossack, for which he felt a strong attachment.

Jirō Muramatsu began his business in 1906 and obtained licences for ten luggers. After that he continued to apply to both the state and federal governments for permission to increase the number of luggers and contractors. Although Jirō Muramatsu became a naturalized British subject, he could not overcome the obstacle being an Asian (or a coloured) person. After Japan attacked Pearl Harbor on 8 December 1941, Jirō Muramatsu and his wife Hatsu were arrested. They were sent to the Tatura Internment Camp in Victoria and subsequently, on 7 January 1943, Jirō Muramatsu died from pneumonia, while receiving treatment for cancer, at the age of 64.

I have written a long introduction for Mr Fujita's sketchbook and memoir. Those people who worked as pearl divers in the tropical oceans of Northern Australia had their own life experience and life process. Each person's name and each person's life process would not appear in a general description of history. Nonetheless, we are lucky enough to have the sketchbook and memoir which Mr Fujita left. We will be happy if they remind us of the thousands of lives devoted to the pearl fishing industry in the oceans off the north coast of Australia.

Tombstone of Sakutaro Muramatsu in the Asian cemetery in Cossack 2017/09

[1] R Anderson, *First Report in the Northwest: A maritime Archaeological survey of Cossack 25-30 June 2012*, Western Australia Museum, 2013, pp. 17-18.

[2] In 1872 a case was argued for the preparation of Cossack as the outport for Roebourne for exporting livestock to Singapore. (JPS Bach, *The Pearling Industry of Australia: An account of its social and economic development,* 1956, p. 8.)

[3] MA Bain, *Shinjugai no yūwaku* [The Temptation of Pearl Shell], Tokyo: Keisōshobō, 1987. (MA Bain, Full Fathom Five, Artlook Book, 1982.)

[4] Ibid.

[5] DCS Sissons, 'Japanese in the Northern Territory 1884-1902', *South Australiana,* 16-1, 1977, p. 6.

[6] Ibid., pp.5-6.

[7] Kanjūrō Watanabe, *Gōshū tanken hōkokusho* [A Report on Australian Exploration], The Second Section of the Trade Bureau of Foreign Ministry, 1894, pp. 279-282; Sissons, ibid., p.12; J Lamb, *Chinmoku no shinju* [Silent Pearls: Old Japanese Graves in Darwin and the history of Pearling], 2016, p. 21.

[8] I referred to supplementary materials accompanying the 1890s' map which was exhibited in the Cossack historical museum.

[9] Mutsumi Tsuda et al, eds., *Murakami Yasukichi 1880-1944 no raifu stōrī* [A life of Murakami Yasukichi 1880-1944], Wakayama daigaku: *Kishū Keizai shi* [Wakayama University: Kishū economic history], *Bunka kenkyū sho* [Cultural Study Centre], 2016, p.18.

[10] I am indebted to Keiko Tamura, who resides in Canberra, for obtaining newspaper materials. The newspaper articles I obtained are taken from *Northern Times* (Carnarvon) 3 September 1931 and Daily News (Perth), 3 February 1932.

[11] N Jones, *Daini no kokyō: Gōshu ni watatta nihonjin senkusha tachi no monogatari,* Sōfūsha, 2003. (Noreen Jones, *Number 2 Home: A story of Japanese Pioneers in Australia,* Freemantle, Arts Centre Press. 2002); Nagata Yuriko, *Ōsutoraria nikkei kyōsei shūyo no kiroku,* Kōbunken, 2002. (Yuriko Nagata, *Unwanted Aliens: Japanese Internment in Australia,* University of Queensland Press, 1996. The primary sources are from the Australian Immigration Bureau and the Onslow Police Station on 9 October, when the Maintenance of the Public Order Act (Management rules for foreigners) was enforced in September 1939.

[12] I referred to the following: D Sissons, 'Muramatsu Jirō (1878-1943)', in *Australian Dictionary of Biography,* Vol. 10; and Maxine McArthur, *Uncommon Lives - Muramatsus* (Unpublished manuscript, no date).

[13] Ichirō Ichiki, 'The establishment of the Kishū divers during the Meiji era', *Kumano Shinbun* [Kumano newspaper], 20 October 2017.

[14] The Japanese workers sent to Australia by Fearon, Low & Co. in Kōbe found many discrepancies in their contracts regarding wages, food, medication and so on. An article was written on the basis of the testimony made by a worker who returned to Japan in November 1885 and appeared in the *Chōya Shinbun* newspaper in April 1887 (Meiji 20). Then the Japanese government sent an honorary consul of Japan in Australia, Mr Marks, to Thursday Island and requested him to investigate the matter. After investigation Mr Marks advised that 'the Japanese government should immediately stop Fearon, Low & Co. sending unfortunate Japanese people over there from Kōbe.' (Shūji Kyūhara, 'The footmark of people from Wakayama Prefecture in Thursday Island, the memorial tower, and the current situation of the island', in *Nijūisseiki no Wakayama* [Wakayama in the 21 centuries], Wakayama shakai keizai kenkyūsho [Wakayama Social and Economic Research Centre], p. 112. It is highly possible that the measures taken by the government influenced Sakutarō Matsumura's later life, but we do not know the details.

二　スケッチブックの画像

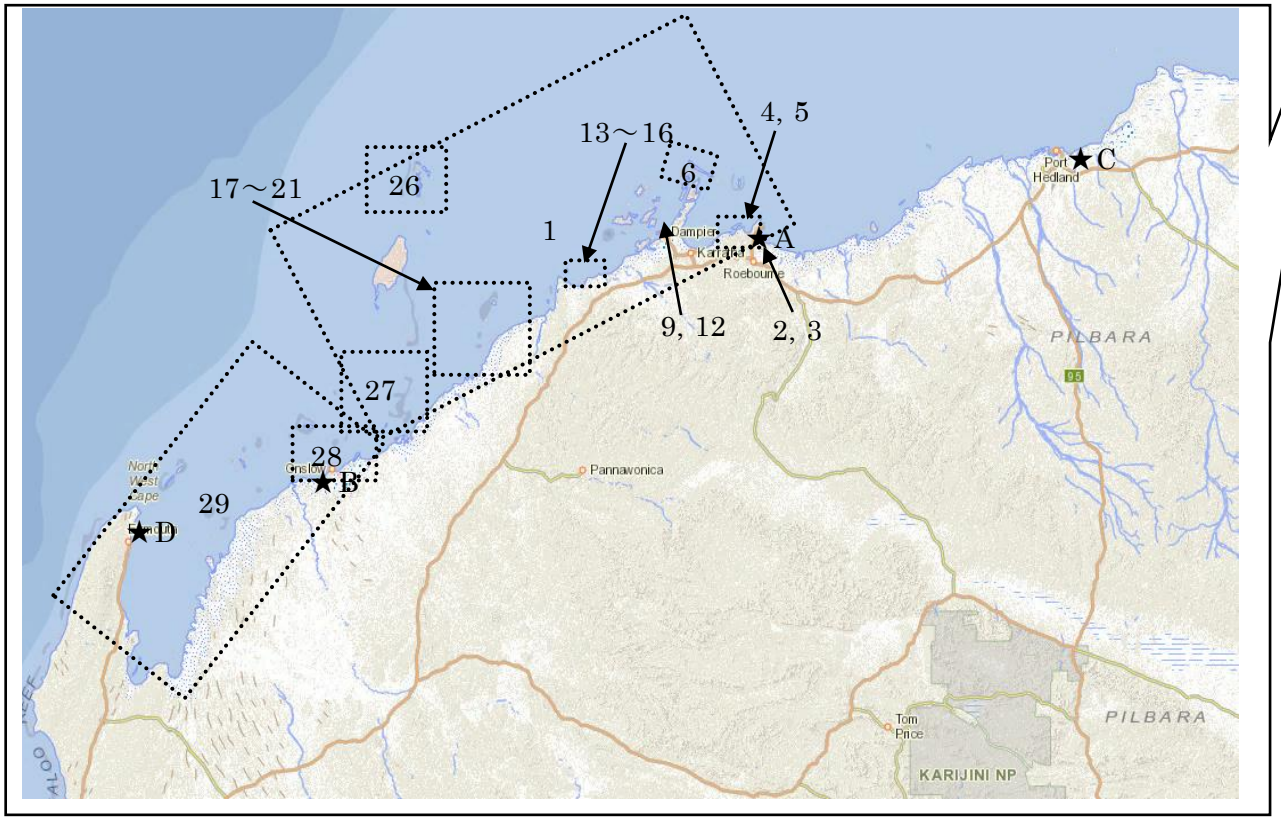
スケッチブックのリスト

1 コサックを基地とした真珠貝漁場（東半部）
2 西豪州　コサック
3 コサックの村松商店と波止場
4 コサックおよびサムソン岬
5 サムソン岬 桟橋
6 フライポンの東の出入口
7 ウミドリ
8 ジャングルパール
9 アントリハーバー（1）
10 サメとイトマキエイ
11 キンコとカコロ貝
12 アントリハーバー（2）
13 レグナード島周辺の海（1）
14 レグナード島周辺の海（2）
15 海上での位置確認の「山立て」
16 船上での生活
17 カラー場所
18 ショールアイランドからマングローブ諸島
19 ショールアイランド
20 ショール島のウミガメの産卵
21 マングローブ島手前
22 ロゴン（ジュゴン）
23 ウミガメ猟
24 ウミガメの種類
25 海亀捕りとうみへび
26 モンテベロー諸島
27 マングローブ島近辺
28 ビーゼン（オンスロー）の港
29 コサック基地からの最西端漁場エクスマウス湾
30 村松商店の元船
31 村松商店の船（1）
32 村松商店の船（2）
33 潜水服
34 潜水中のウミガメ猟
35 ダイバーと魚
36 フィッシング
37 タニンバル諸島
38 コサックからエクスマウス
39 村松次郎商店
40 真珠貝採取の回想

List of Sketches

1 Pearling grounds based on Cossack (eastern part)
2 Cossack, Western Australia
3 Muramatsu Store and the wharf in Cossack
4 Cossack and Point Samson
5 Point Samson jetty
6 The east entrance of Flying Foam Passage
7 Seabird
8 Bowerbird
9 Entry Harbour (1)
10 Shark and Devil Ray
11 Sea Apple and Semi-twisted shell
12 Entry Harbour (2)
13 Regnard Islands and the surrounding sea (1)
14 Regnard Islands and the surrounding sea (2)
15 *Yamatate* to fix the location on Sea
16 Lives on board of lugger
17 The spot where many basket stars grow
18 From Sholl Island to the Mangrove Islands
19 Sholl Island
20 Turtles come up to Sholl Island to lay eggs
21 On nearby Mangrove Islands
22 Dugong
23 Turtle hunting
24 Types of sea turtles
25 Turtle hunting and sea snakes
26 Montebello Islands
27 In the vicinity of the Mangrove Islands
28 The ports of Beadon and Onslow
29 From the base of Cossack to Exmouth Gulf, the westernmost pearling ground
30 Diver boat (lugger) owned by Mr Muramatsu
31 Lugger owned by Mr Muramatsu (1)
32 Lugger owned by Mr Muramatsu (2)
33 Diving suit
34 Turtle hunting while diving
35 A diver and fish
36 Net fishing
37 Tanimbar Islands
38 Operation route between Cossack and Exmouth Gulf
39 Muramatsu Store
40 Memoir of pearling

スケッチブック索引図（オーストラリア北西部）

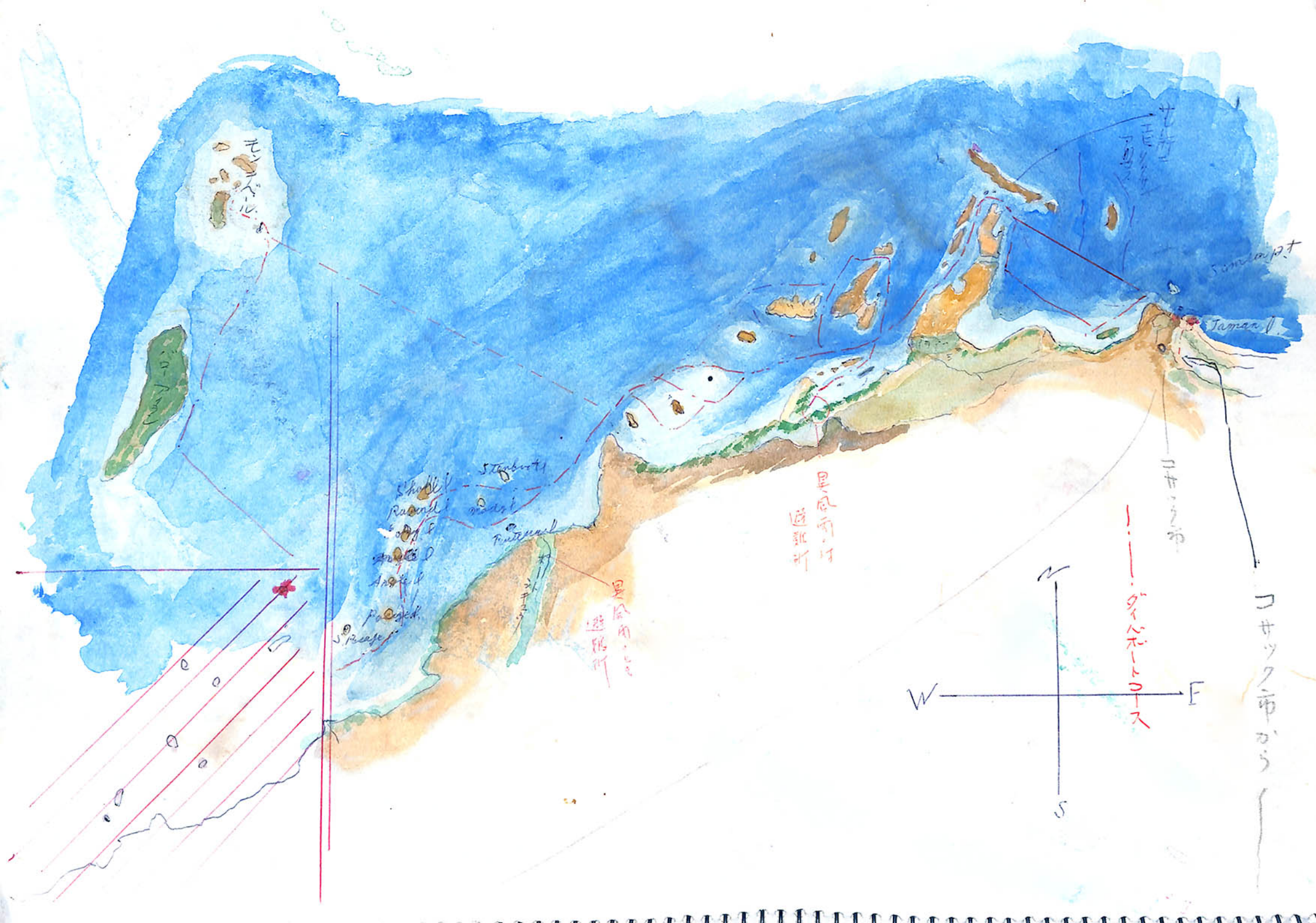


★A　コサックの集落付近

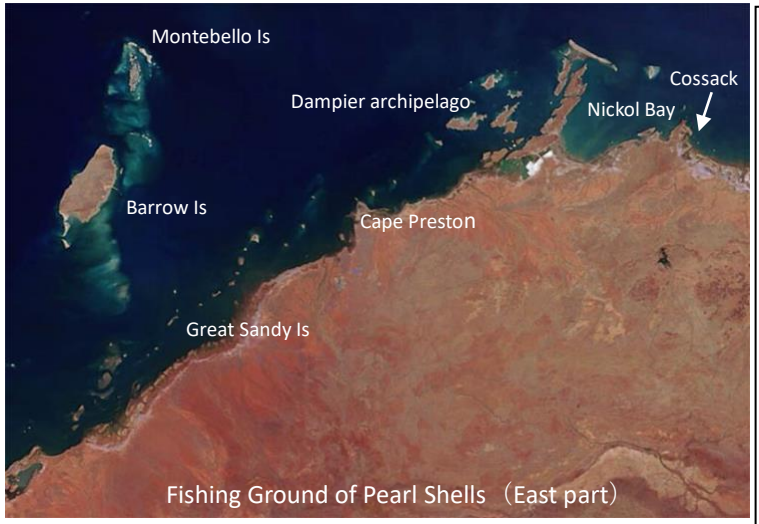
★B　ビーゼン（オンスロー）付近

★C　ポート・ヘッドランド

★D　エクスマウス


モンテベル
Shoal
Round
Stephens
Rocky
Protected
Anchor
Protected
Spreage
Tamar I.
Sandhurst
コサック市
コサック市から
暴風雨は避難所
暴風雨は避難所
ダイヤモンドアース
N
W
E
S

1　コサックを基地とした真珠貝漁場（東半部）



A　There are many crayfish (rock lobsters) in this place.

B　A place of refuge (as for a ship) at the time of rainstorm

陸揚げされた真珠貝（Pearl shells）

①コサック市から
（from Cossack Town）

②ダイバーボートコース
（Lugger Course）

③コサック市
（Cossack Town）

④ Jarman Is

⑤ Samson Pt

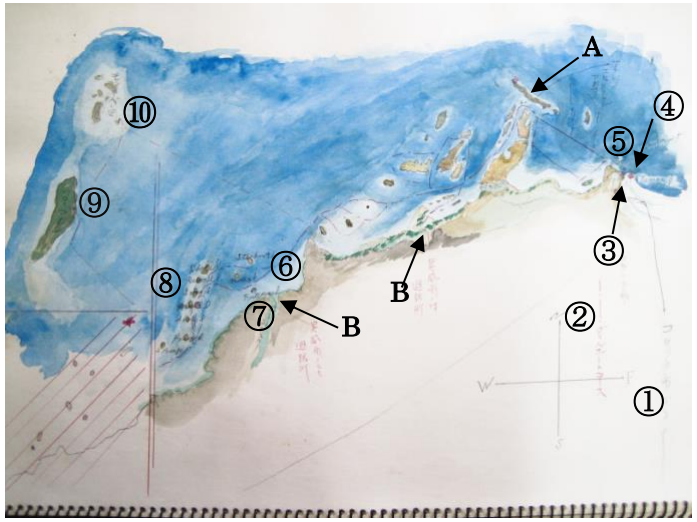
⑥ Steamboat Is
Mardi Is
F ortescue Is

⑦ポートシキュウ川
（Fortescue creek）

⑧ Sholl Is
Round Is
Long Is
Middle Is
Angle Is
Passage Is
S. Passage Is

⑨バローアイラン
（Barrow Is）

⑩モンテベール
（Montebello Is）



B　暴風雨の避難所

A　そこにエビがたくさんあります

エビ（ロック・ロブスター）

西濃開コサウク市
大潮の干潮ニハ此ノ様ニ干アガル
干潮時ハ燈台ノ近クマデ全部干アガル
昔はずい分栄えた所だったそうですが新道が行った頃は酒屋一軒商店(村松)一軒と白人の来た十五軒位それに日本人の来た四五軒でした
干潮時ニハ部分ヘニ時潮干
干潮時ニハ此ノ様ニ干アガル
カヌー漕ぐ場
元カ村松商店
酒屋
村松商店
キャンプ
水揚ポンプ
墓

2　西濠州コサック

現在のコサック集落跡（2017/09 撮影）

① 西濠州のコサック市 (Cossack, WA)

② 至ローバン（to Roebourne）

③ 水揚げポンプ（Water pump）

④ カバ磨り場（Site to scrub luggers）

⑤ キャンプ（Camping site for crews）

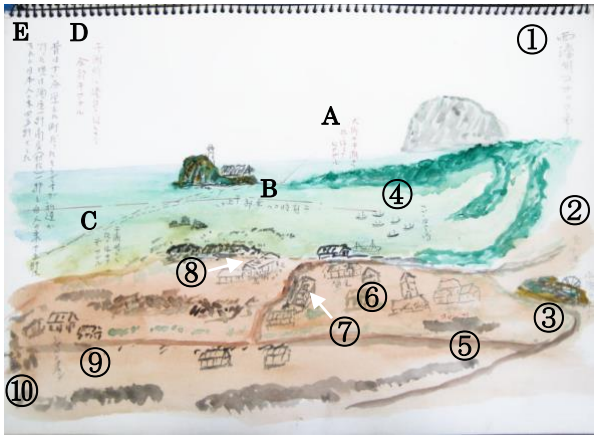
⑥ 酒屋（Liquor shop）

⑦ 村松店（Muramatsu store）

⑧ 元カメヤ、村松商店 (Muramatsu Store, former "*Kameya* (Monte Belo Sea Product Ltd.)")

⑨ ジャパンタウン（Japan town）

⑩ 墓へ（to Cemetery）



A　大潮の干潮には、この線まで干あがる

B　干潮時には全部干上がる

C　干潮時には、この線まで干あがる

D　干潮時は、燈台近くまで全部干あがる

E　昔はずい分栄えた町だったそうですが、私達が行った頃は、酒屋一軒、商店（村松）一軒と白人の家十五軒位、それに日本人の家四、五軒でした。

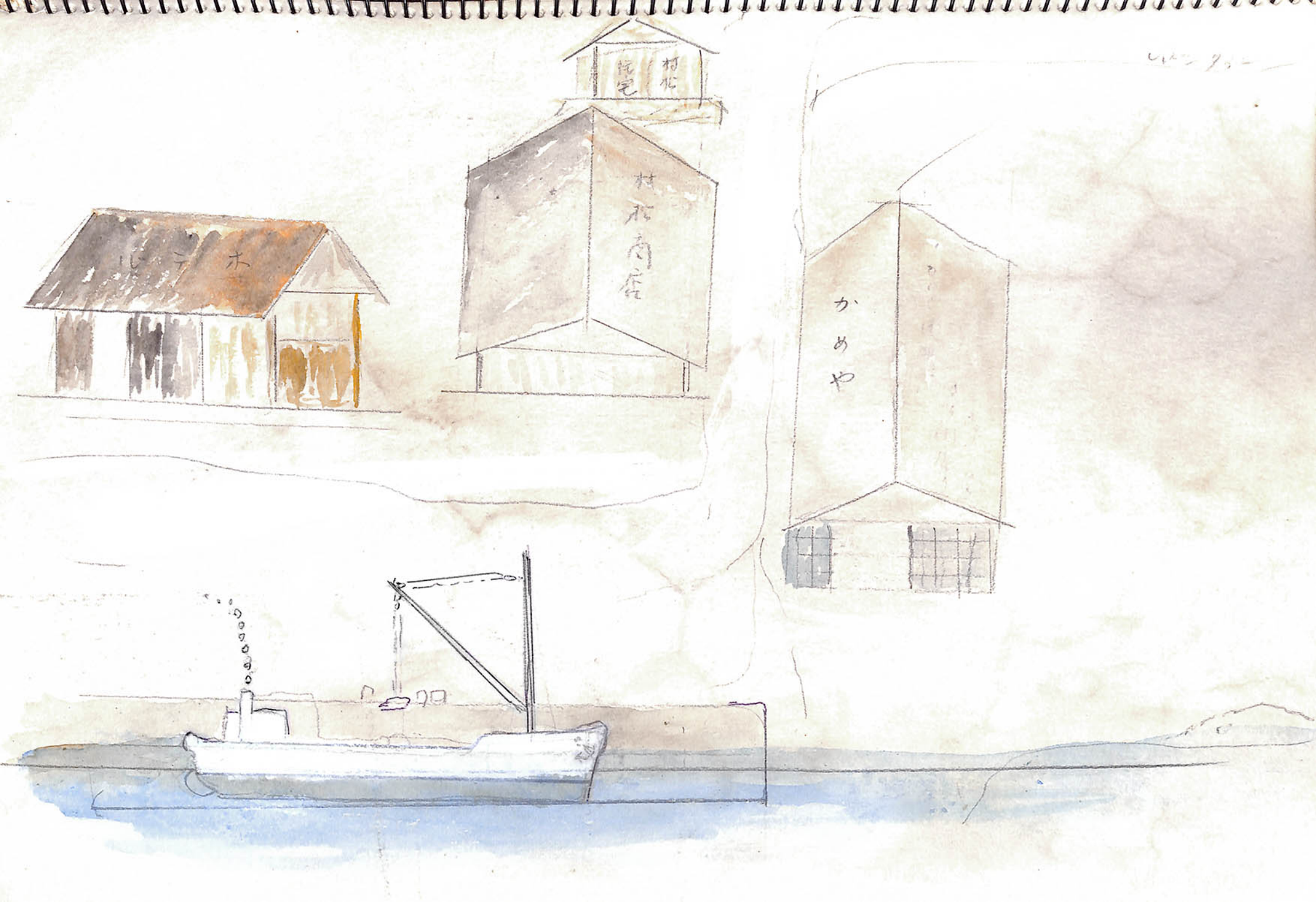
A　This line indicates the low watermark at the low tide of spring tide.

B　It is all dried up during the low tide.

C　This line indicates the low watermark at the low tide.

D　It is all dried up close to the lighthouse.

E　It is said that the town was very prosperous in the old days, but there was a liquor shop, a store (Muramatsu's), about 15 houses with white people and four or five houses of the Japanese when we went there.


村松
住宅
村松商店
かめや

3　コサックの村松商店と波止場

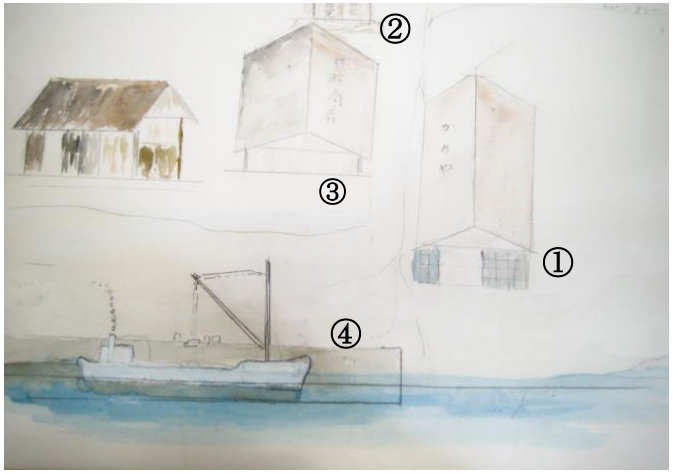
現在のコサックの景観保全地区、右端が埠頭。集落の南部から北東部に向かって（2017/09　撮影）

① かめや（Muramatsu Store, former “Kameya（Monte Belo Sea Product Ltd.)”）

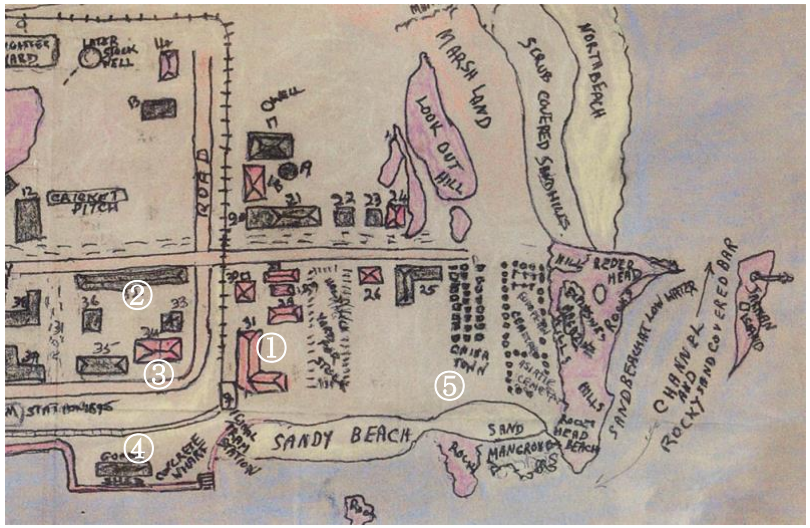
② 村松住宅（Muramatsu residence）

③ 村松商店（Muramatsu Store）

④ 波止場（Wharf）



コサックの埠頭跡（観光スポットの１つ 2017/09　撮影）

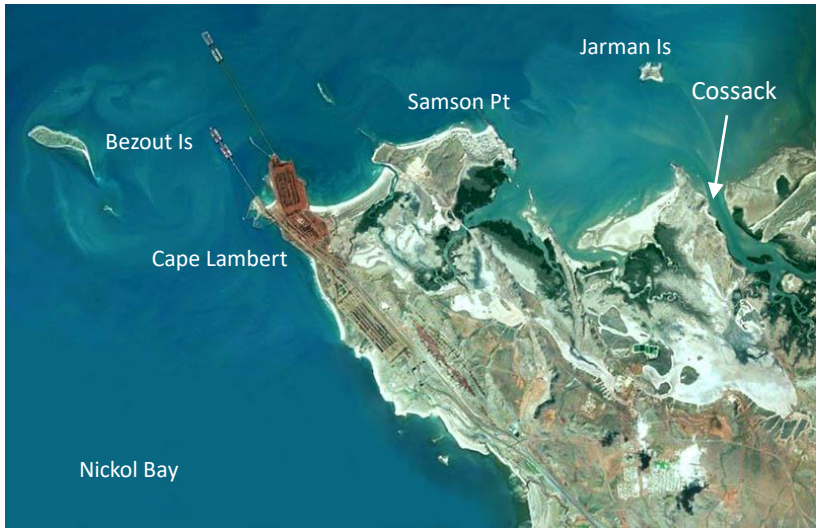


1890 年代のコサックの集落図。村松次郎は藤田健児氏の滞在時、①「かめや」、②「村松自宅」、③「村松商店」の建物を所有。いずれも、コサック埠頭につながるメインストリートに面していた。⑤には Chinatown と記されているが、日本人町（Japan town）でもあった。(Ngarluma Yindjibarndi Foundation Ltd　所蔵)

コサック市人は
桟橋カラ百トン位の
船へ行きました
（満潮時に）

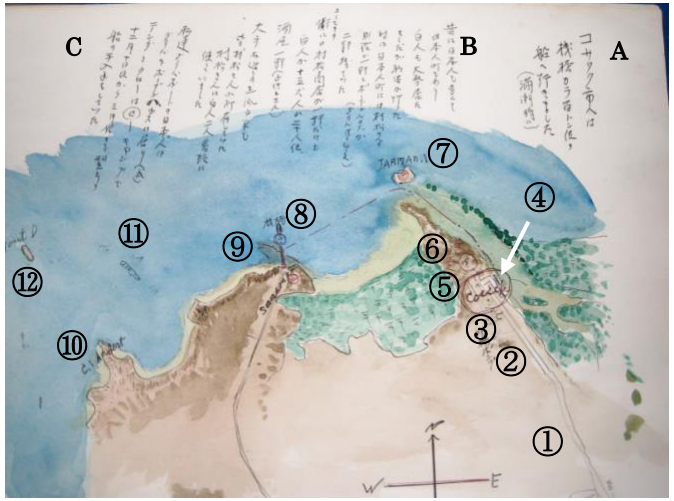
昔は日本人も多くて
日本人町もあり
白人も大勢居た
そうだが村はか行った
時は日本人町には村松さん
別荘が一軒とボーデンさんが
二軒残っていた
（ダイバーボートの名）
ユーセッタ
衛には村松商店が一軒だけと
白人が十五六人が二十人位
酒屋一軒（子供を三人）
大方石造りの立派な家も
ありました
村松さんが所有していた
使っていました
村松さん以外は白人二人番頭に
移住
ダイバーボートの日本人は
ニシヤマとボーデンの外に居り（A）
十二月十日頃から三月迄オレ雇う
船の手入れをしていた

4　コサックおよびサムソン岬



コサックとサムソン岬

① 至ローバン（to Roebourne）
② 水揚ポンプ（Water pump）
③ C
④ Cossack
⑤ Ⓐ
⑥ 日本人町（Japanese town）
⑦ Jarman Is
⑧ 桟橋（Jetty）
⑨ Samson Pt
⑩ Cape Lambert
⑪ リーフ（Reef）
⑫ Bezout Is



A

コッサク市へは　桟橋から百トン位の船で行きました。（満潮時に）

B

昔は日本人も多くて日本人町もあり、白人も大勢居たそうだが、私達が行った時には日本人町には村松さんの別荘が一軒とボーデンハウス（ダイバ達の泊る処）が二軒残っていた。コーセキの街には、村松商店が一軒だけと白人が十五、六か二十人位。酒屋一軒（子供と三人）。大方石造りの立派な家も皆、村松さんが所有していた。村松さんは白人二人番頭に使っていました。

C

私達ダイバボートの日本人たちはダイバのボーデンハウスに居り（A）、テンダーとクローは（C）キャンプで十二月十日頃から三月初めまで翌年の船の手入れをしていた。

A

To Cossack Town, we went in a ship of about 100 tons and disembarked from the wharf there (at the time of high tide).

B

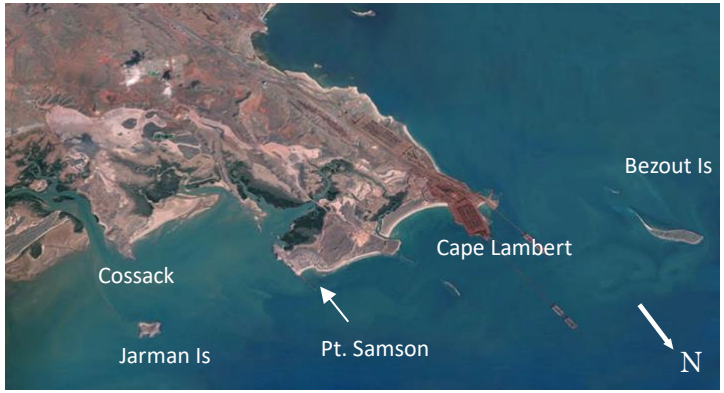
There used to be many Japanese, so there used to be a Japanese town and many white people too, but when we went there, there were only two buildings left in the Japanese town; one was a villa owned by Mr Muramatsu and the other was a boarding house (where divers stayed). In the town of Cossack, there was only one store run by Mr Muramatsu .Fifteen, 16 or 20 white people lived there. A liquor store (a family of three with a child). Mr Muramatsu owned most of the fine stone houses. Mr Muramatsu hired two whites as clerks.

C

We divers stayed at a divers' boarding house (A), and tenders and crews stayed at the camping site (C) , where they took care of the boats from around 10 December till the beginning of March for the next pearl shell fishing season starting.

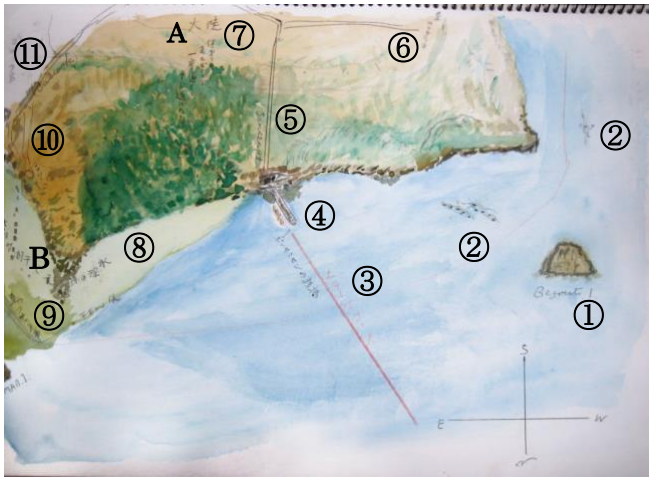
大陸
何処でも
高さはのりで
一度通ると
すぐ道になる
Cascade
Samson pt
サンサムセンの灯標
Bezout I.
TARMAN I.
S
E
W
N

5 サムソン岬桟橋



サムソン岬桟橋からコサック付近

① Bezout Is
② リーフ（Reef）
③ ステーマコース（Steamship course）
④ポンサミセン桟橋（Pt. Samson Jetty）
⑤ Samson St.
⑥ 至サンクリヲ （to Samson creek）
⑦ 大陸(Continent)
⑧ 干上がる線（Dried Line）
⑨ 至コサック市（to Cossack Town）
⑩ ジャパンタウン （Japan town）
⑪ コサック市（Cossack Town）



B 浅い所で、干潮時干される

A 何処までも赤土ばかりで、一度通ると、直ぐ道になる

サムソン岬桟橋跡（2017/09　撮影）

サムソン岬から Jarman 島を望む（2017/09　撮影）

A The red earth seems to be spread out endlessly, once we pass through it, our track immediately becomes a road.

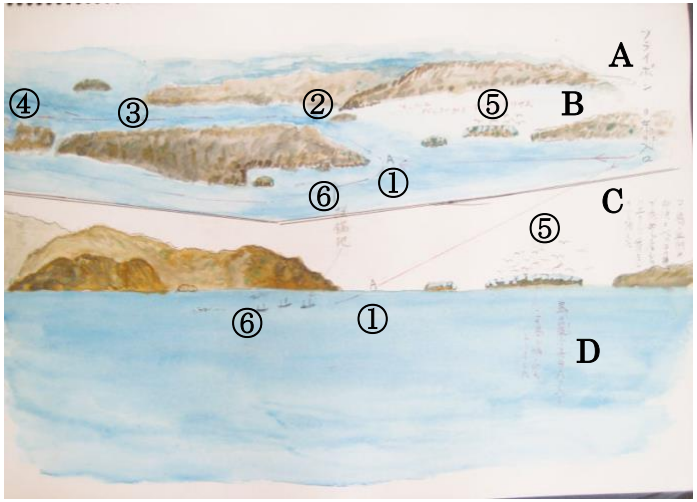
B It is dried up at low tide due to shallow water.

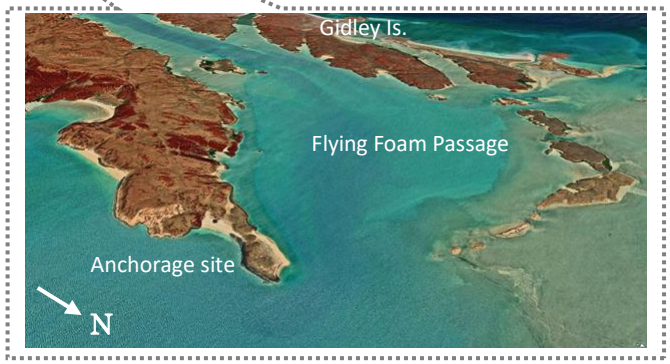
フライポンの東の入口
D
C
B
A
浅い所ニベッコーガメ タクサンアリマス
①
船錨地
A
①
この島の沙浜ニベッコ亀ガ夜ハ産卵ニ上ル番をしていた
島の最ニ黒白くいしゃ
この島ニ海ノ神をとりまつした

6 フライポンの東の出入口

Flying Foam Passage の東からの出入口（ダンピア群島北端部 Northern part of Dampier Archipelago）

① A
② B
③ C
④ D
⑤ イ
⑥ 投錨地（Anchorage site）





フライポン東出入口 北東方向からの３D 画像

A フライポンの東の出入口

B 浅いところにベッコウガメたくさんあります。

C この島の北側の砂浜にベッコウ亀が夜卵を産むので番をしていて捕まえた。

D 鳥の糞で真白くなっている。この島で鵜の卵をとりました。

A The east entry of Flying Foam Passage

B There are many hawksbill turtles in the shallow water.

C At the beach on the north of this island, we waited at night to catch Hawksbill turtles coming to lay eggs.

D The island looks white because of the bird droppings. We collected cormorants' eggs on this island.

前のページの

①印島にはたくさんの鵜が棲っていますレンゲ(小舟)で卵を採りに行きますが岩ばかりの島にたくさん産んでいる卵と海水に浸べて新しいのを撰ってとってきますドラム缶に半分とった事もあり真っ白毎日〜食べます、十月中旬から亀も卵を産みに揚って来ます大がい生で沖彼にかけて食べますが煮ても食べます

又あなどり(うみねこの様な鳴き声をします)たくさん島の軟いところに横に深い穴を掘って卵をあたためていますが手を入れてとると咬まれるので針金で造ったシャモジのやうなものでかき出して卵をとり煮て食べます、鳥も食べます

又白いカモメの様な鳥で(日本人はチョウライ)と呼んでいますが此の鳥も繁殖期には砂浜に何千羽も集ってきて卵を産みます 食物は共に魚です

卵はキレイに眞四角に砂浜にそろえて下産ます 二の卵も食べる(形は食べたことはありません)(食べるそうです)

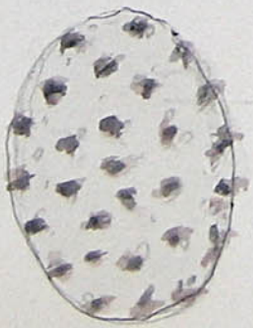
また雛が孵化して(何千羽も)砂浜でいるのを見ると青蛙とも何ともいひ様がありません

何故この鳥は卵を砂浜へ産むのに眞四角にキレイに産むのかわかりません

(チョーライが砂浜に卵を産んだ所)

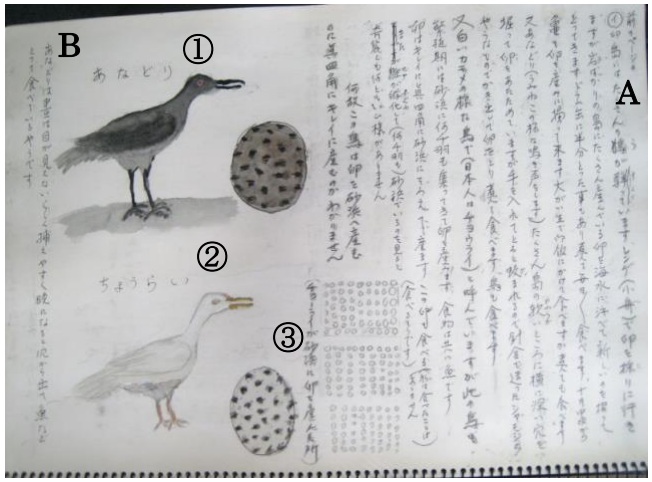
あなどり

あなどりは畫は目が見えないらしく捕えやすく晩になると穴から出て魚などとって食べているやうです



ちょうらい

7 ウミドリ



① あなどり
（*Anadori,* Shearwater）

② ちょうらい
（*Chōrai,* Australian Gannet）

③ ちょうらいが砂浜に卵を産んだ所（Gannets lay the eggs on the sand）

A

There are many cormorants on the island marked as イ on the previous page. We take a dinghy to collect their eggs. We float the eggs in the seawater to select fresh ones. Once we collected plenty, enough to fill half a drum. We boil them and eat them day after day. Around mid-October, sea turtles start to come back to lay eggs. Usually, we eat them raw on rice, but we also boiled them. Also, shearwaters (their cries are similar to black-tailed gulls) dig burrows on soft soil and hatch their eggs. When we put hands in the burrow, we get bitten. So we make spoons out of wire and use them to rake the eggs out. The eggs were boiled and eaten. We also eat the birds.

Also, white sea-gull-like birds (gannets; the Japanese called them *chōrai)* gather in thousands on the beach during the breeding season and lay their eggs. They eat fish. They lay their eggs neatly in square shapes on the sand. These eggs are edible, although I did not have a chance to eat them.

When the eggs are hatched and thousands of chicks are on the beach, the scene is just amazing and beyond description. I do not know why they lay their eggs in neat squares on the sand.

B

Shearwaters do not seem to be able to see during the day, so it is easy to catch them. They seem to come out of burrows after dark probably to catch fish.

A

前のページのイ印の島にはたくさんの鵜が群がっています。レンゲ（小舟）で卵を採りに行きますが、岩ばかりの島にたくさん産んでいる卵を海水に浮べて、新しいのを選ってとってきますが、ドラム缶に半分とった事もあり、煮て、毎日毎日食べます。十月中頃から亀も卵を産みに上がって来ます。大がい生で御飯にかけて食べますが、煮ても食べます。又あなどり（うみねこのような鳴き声をします）たくさん島の軟らかいところに横に深い穴を掘って、卵をあたためていますが、手を入れてとると、咬まれるので、針金で造ったシャモジのようなものでかき出して卵をとり、煮て食べます。鳥も食べます。又、白いカモメのような鳥で（日本人はチョウライと呼んでいますが）、この鳥も繁殖期には砂浜に何千羽も集ってきて卵を産みます。食物は共に魚です。卵はキレイに真四角に砂浜にそろえて産みます。この卵も食べる（私は食べたことはありません）。また、雛が孵化して、何千羽も砂浜にいるのを見ると、綺麗とも何とも言いようがありません。何故、この鳥は卵を砂浜へ産むのに真四角にキレイに産むのかわかりません。

B

あなどりは、昼は目が見えないらしく、捕まえやすく、晩になると穴から出て、魚などを食べているようです。

一北濠州にはジャングルペールといふ鳥がいて二ハトリ位の大きさで
黒い鳥で一番づゝ暮している　鉄砲で打ってくる（とても鳥肉はうまい）
一度十番以上集っているのを見たがこれは皆で木の葉をひろい
あつめて大きな巣をつくり中に卵を産むのだそうな
こんな巣をところどころで見た

狼

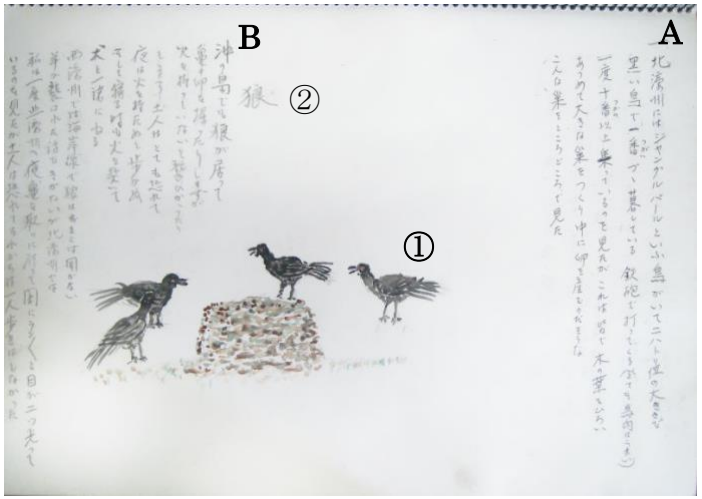
沖の島でも狼が居って
亀の卵を掘ったりします
火を持っていないと襲ひかゝったり
します　土人はとても恐れて
夜は火を持たぬと歩かぬ
そして寝る時も火を焚いて
犬と一緒にねる
西濠州では海岸線で狼はおることは聞かない
羊か鶏はかれた話もきかないが北濠州では
私は一度西濠州へ夜亀を取りに行って周にランゝと目が二つ光って
いるのを見たが土人は恐れてそのあとは一人歩きはしなかった

8 ジャングルパール

Bower Bird（ニワシドリ）

① ジャングルパール
（Bowerbird）

② 狼（Wolf 著者は「狼」と言っているが、野生犬（dingo） であろう（It seems to be dingoes.）



A

一、北濠州には、ジャングルパールという鳥がいて、ニワトリ位の大きさで、黒い鳥で、一番ずつ暮らしている。鉄砲で撃ってくる（とても鳥肉はうまい）。一度十番以上集っているのを見たが、これは皆で木の葉をひろいあつめて、大きな巣をつくり、中に卵を産むのだそうな。こんな巣をところどころで見た。

B

狼

沖の島でも狼が居って、亀の卵を掘ったりしますが、火を持っていないと、跳びかかったりします。土人はとても恐れて、夜は火を持たぬと歩かぬ。そして寝る時も火を焚いて犬と一緒にねる。西濠州では海岸線で狼が居るとはきかない。羊が襲われた話も聞かないが、北濠州では、私は一度、夜亀を取りに行って、闇にランランと二つ目が光っているのを見たが、土人は恐れて、それからは一人歩きをしなかった。

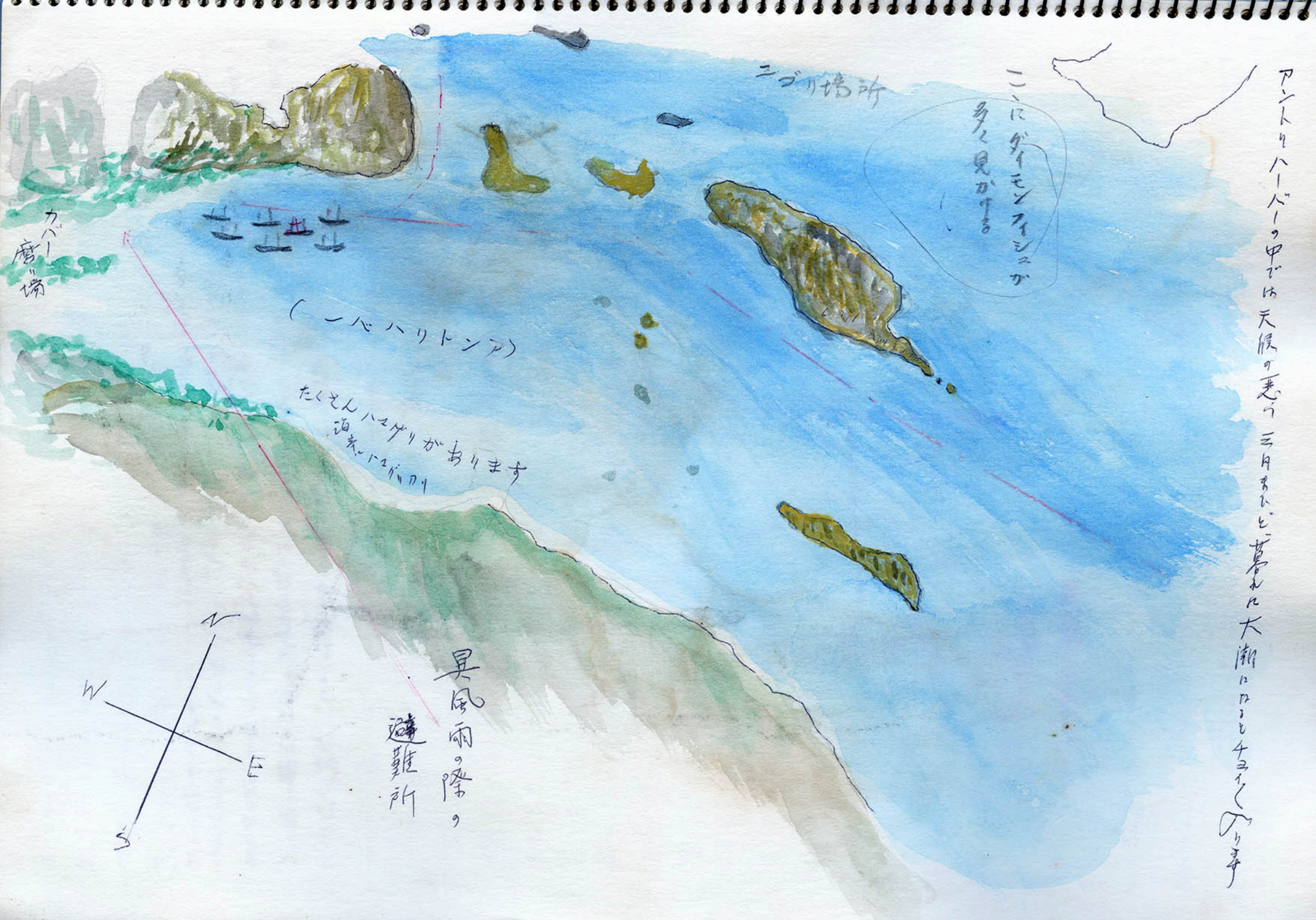
A

In northern Australia, there are birds called bowerbirds and they are black in colour and about the size of chickens. They live in pairs. We shoot them. (The meat is very tasty) Once I saw more than ten pairs of them together. I hear each of them collects leaves in order to build big nests to lay their eggs. I saw such types of nests here and there.

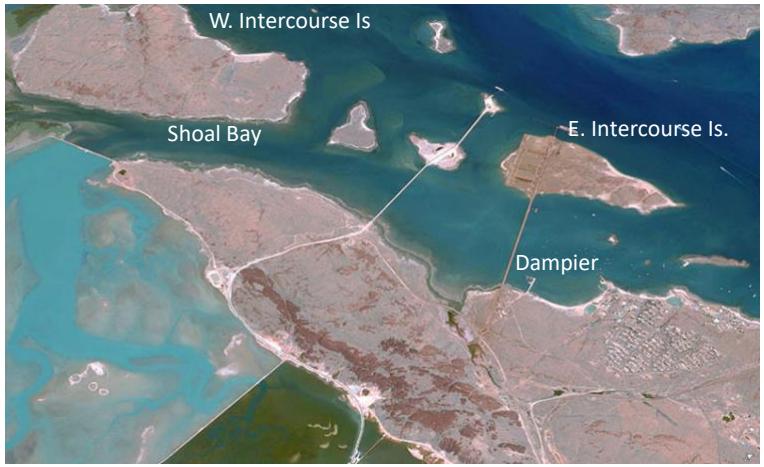
B

Wolves

On an island off the coast, there are wolves and they dig out turtle eggs. If you do not carry a fire stick with you, they will attack you. The natives are really scared of them and they do not go out without fire. When they sleep, they keep the fire and a dog close-by. In Western Australia, I do not hear about the wolves along the coastline. I also do not hear any sheep are attacked by them, but once in northern Australia, I saw two glaring eyes in the dark when I went to catch turtles at night. The natives were scared and they stopped walking alone at night.


アントリハーバーの中では天候の悪い三日あいだ、暮れた大潮にはいろいろ釣り
ここにダイモンフィシュが多く見かける
ニゴリ場所
カバー磨場
（一ベハリトンア）
たくさんハマグリがあります
海老ハマグリ
異風雨の際の避難所
N
W
E
S

9 アントリハーバー（1）

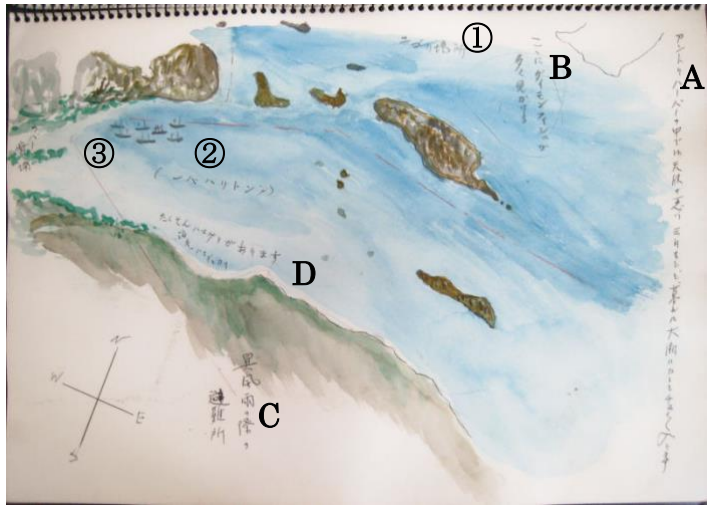


アントリハーバー（Entry Habour?）

① ニゴリ場所
(Muddy place)

② アントリハーバー
（Entry Habour?）

③ カバ磨り場所
（Site to scrub the bottom of luggers）



A
アントリハーバーの中では、天候の悪い三月までと暮れに大潮になると、チョイチョイ入ります。

B
ここにダイモンフィッシュが多く見かける。

C
暴風雨の際の避難所

D
たくさんハマグリがあります。海岸にハマグリあり

A We often call at the Entry Harbour in March if there is bad weather and in the spring tide at the end of the year.

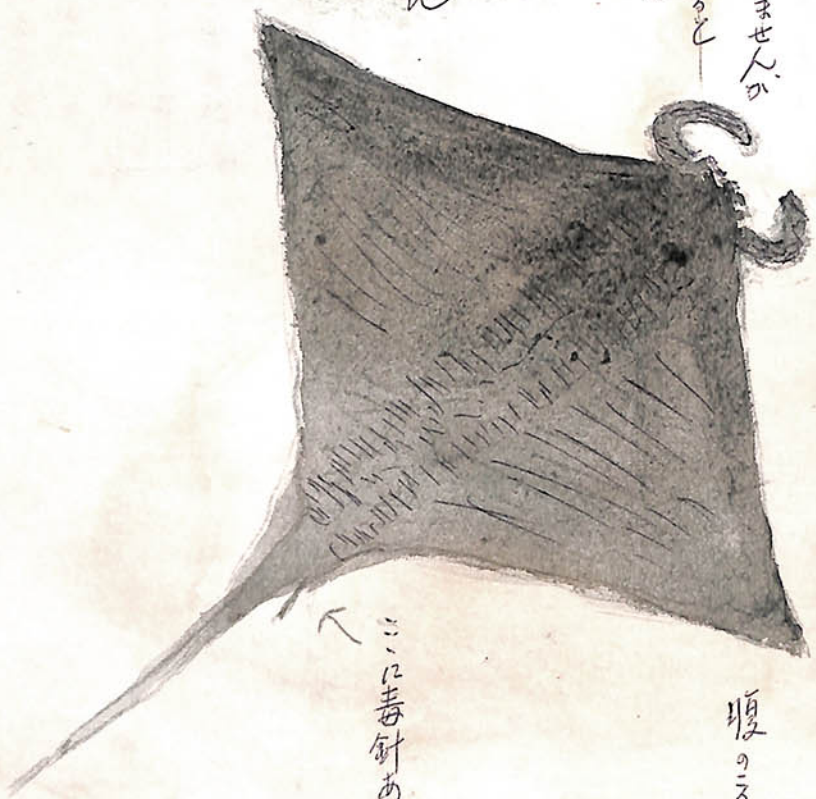
B We often find many devil rays here.

C Refuse site for a heavy storm

D We can find many clams. There are many clams on the beach.

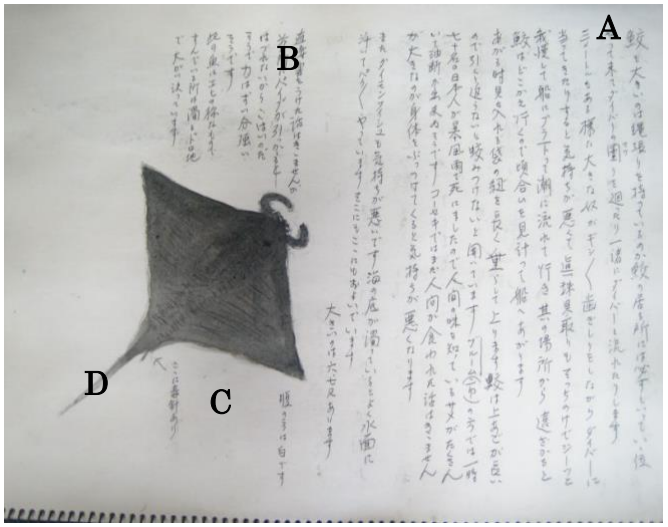
鮫も大きいのは縄張りを持っているのか鮫の居る所には必ずといって位
やって来てダイバーの圍りを廻ったり一諸にダイバーと流れたりします
三メートルもある様な大きな奴がギシ〳〵歯ぎしりをしながらダイバーに
当ってきたりすると気持ちが悪くて眞珠貝取りもそっちのけでジーッと
我慢して船にブラ下って潮に流れて行き其の場所から遠ざかると
鮫はどこかえ行くので頃合いを見計って船へあがります
あがる時貝を入れる袋の紐を長く延ばして上ります鮫は上あごが長い
ので引くり返らないと咬みつけないと聞いています ブルー山(ヤマ)の方では一時
七十名の日本人が暴風雨で死にましたので人間の味を知っている奴がたくさん
いて油断が出来ぬそうです コーセキではまだ人間が食われた話はきこません
が大きなのが身体をぶっつけてくると気持ちが悪くなります

きれ ダイモンフィシュも気持ちが悪いです海の底が濁っているとよく水面に
浮いてゞ〳〵やっています そこにもここにもおよいでいます
大きいのは六七尺あります



直接害をうけた話はきこませんが
前の所に人間が引っかかると
はづれないからこはいのだ
そうで力はずい分強い
そうです
此の魚は土地の様なもので
すんでいる所は濁るド口地
で大がい決っています

10 サメとイトマキエイ



A

鮫も大きいのは縄張りを持っているのか鮫の居る所には必ずといっていい位やってきて、ダイバーのまわりを廻ったり、一緒にダイバーと流れたりします。三メートルもあるような大きい奴がギシギシ歯ぎしりをしながらダイバーに当ってきたりすると、気持ちが悪くて、真珠貝採りもそっちのけでジーッと我慢して船にぶら下がって潮に流れて行き、その場所から遠ざかると、鮫はどこかへ行くので、頃合いを見計ってあがります。あがる時、貝を入れる袋の紐を長く垂らして上がります。鮫は上あごが長いので、ひっくり返らないと咬みつけないと聞いています。ブルーム（市）の方では、一時七十名の日本人が暴風雨で死にましたので、人間の味を知っている鮫がたくさんいて、油断が出来ぬそうです。コーセキでは、まだ人間が食われた話はききませんが、大きなのが身体をぶっつけてくると、気持ちが悪くなります。

B

また、ダイモンフィッシュも気持ちが悪いです。海の底が濁っていると、よく水面に浮いてきてパクパクやっています。そこにもここにも泳いでいます。大きいのは六、七尺あります。直接害を受けた話は聞きませんが、前の所にパイプが引っかかるとはずれないから、こわいのだそうで、力はずい分強いそうです。この魚はエイのようなもので、すんでいる所は濁る泥地で大概決まっています。

C

腹の方は白です。

D

ここに毒針あり。

A

Large sharks might have their own territories. When we dive in the area where sharks are, they come close to us almost without fail, circling us or drifting with us. When a large one of three metres in length bumps me with its grinding teeth visible, I feel scared. I try to stay still without collecting pearl shells, and drift with the boat with the tide until sharks go away. Then I wait to get out of the water.

When I get out of the water, I dangle a long string from a shell bag in the water. People say that the shark can only bite upside down as its upper jaw is longer than the lower one. Once in Broome, about 70 Japanese drowned in a storm and many sharks know the taste of human flesh. That is why we need to watch out. In Cossack, I have not heard of anybody being eaten by a shark, but it is really scary when a large one comes closer to check on me.

B

Devil rays are also scary. When the seabed is cloudy, they come to the surface and move their mouths. They swim here and there and some large ones are about 1.8 to 2.1 metres long. I have not heard of anybody being directly attacked. But if a pipe is caught in the front of the ray, it is difficult to untangle and dangerous. I hear that they are quite strong. This fish is a type of stingray and they usually live in cloudy and muddy parts of the sea.

C Their belly is white.

D A poisonous sting is here.

キンコはナマコの類でキンコ場所にはキンコばかりたくさんあって呼吸をするが皆口を開きます その対は花瓶の様です

左圖の様なカコロ貝のたくさんある所にも真珠貝がありますがこんな場所は西濤州にはところ〳〵にあり、一寸貝を食べたい時には袋を持って潜水し一晩泥をはかして煮て食べます想像も出来ぬ位たくさんかたまっています

雨三兵実物大

海底はとても奇麗でいろ〳〵の植物が生えており、その中をいろ〳〵の魚が泳ぎまわっているさまは地上に劣らぬ程あでやかで目をみはるものがある。海の植物は波にゆられてゆら〳〵しているが折ろうと思っても直ぐかたくなって折れない

何も生えていない砂山は又とても奇麗だ真珠貝のいる場所は何かゞ生えているが何もない砂山も又それだけの美しい変がある

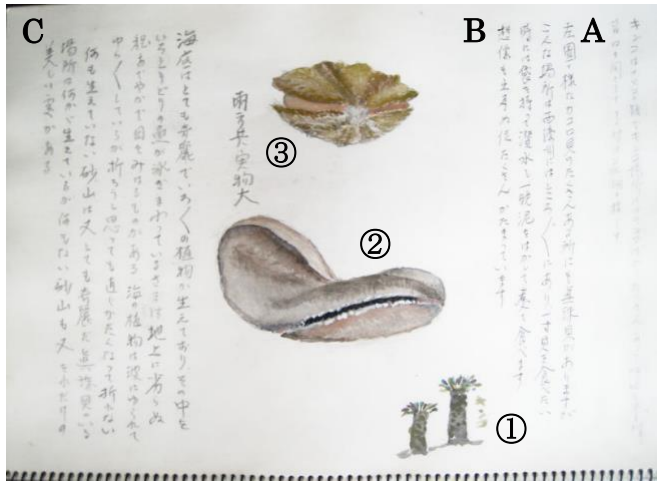
11 キンコとカコロ貝

ヤグラビョウブガイ（Semi-twisted shell）
木曜島産（串本町）

① キンコ（キンコナマコ）
（Sea Apple）

② カコロ貝
（ヤグラビョウブガイ）
（Semi-twisted shell）

③ 実物大（real size）



A

キンコはナマコの類で、キンコ場所にはキンコばかりたくさんあって、呼吸をする時 皆口を開けます。その時は花畑のようです。

B

左図のようなカコロ貝のたくさんある所にも真珠貝がありますが、こんな場所は西濠州にはところどころにあり、一寸貝を食べたい時には、袋を持って潜水し、一晩泥をはかして、煮て食べます。想像も出来ぬ位、たくさんかたまっています。

C

海底はとても綺麗で、いろいろの植物が生えており、その中をいろとりどりの魚が泳ぎまわっているさまは地上に劣らぬ程あでやかで、目を見張るものがある。海の植物は波にゆられてゆらゆらしているが、折ろうとしても直ぐかたくなって、折れない。何も生えていない砂山は又とても綺麗だ。真珠貝のいるところは何かが生えているが、何もない砂山も又それだけの美しい所がある。

A

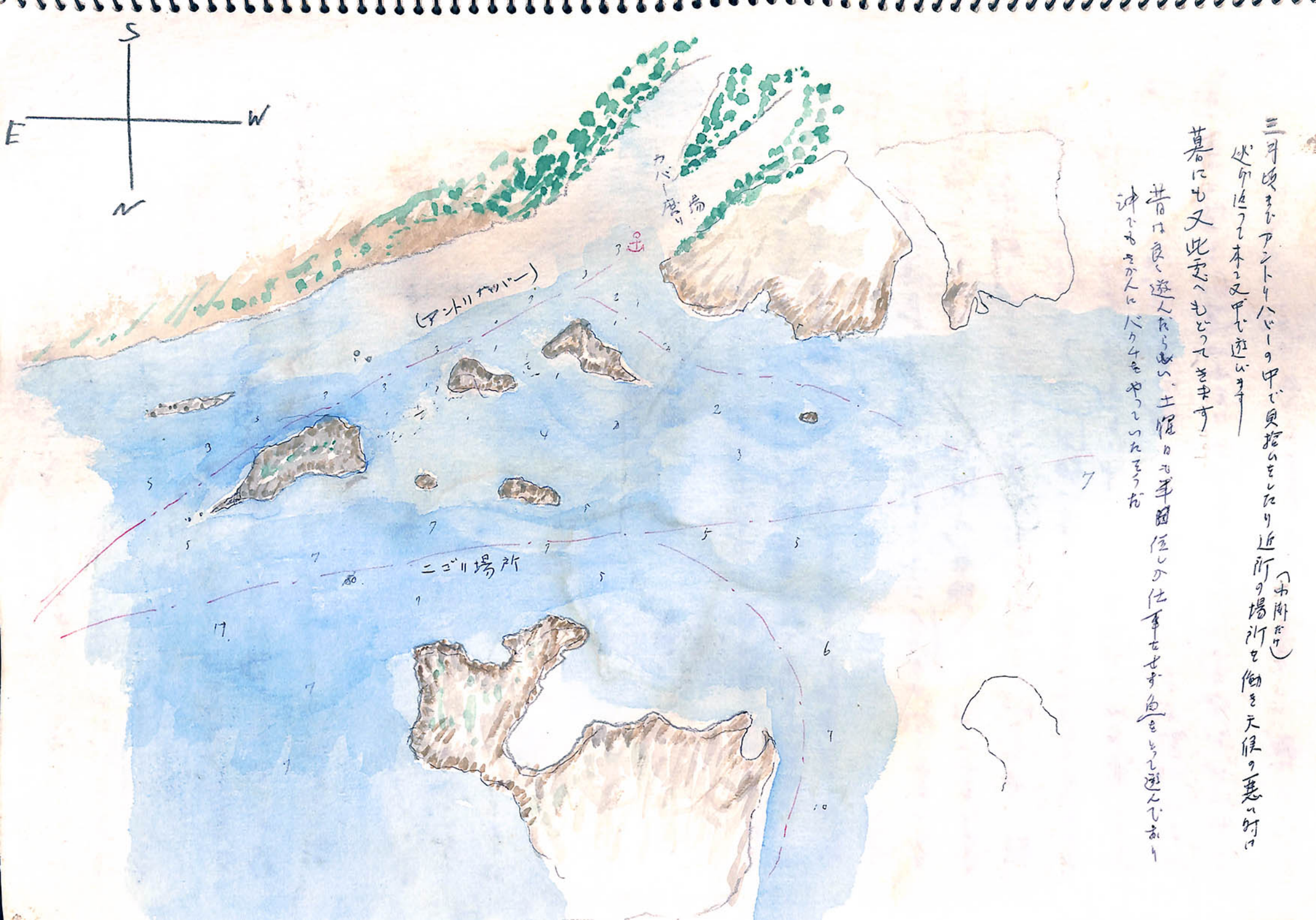
The sea apple is a type of trepang and they are found in groups on some sections on the seabed. When they breathe, all of them open their mouths. When that happens, the seabed looks just like a flower bed.

B

Many semi-twisted shells live in the area where pearl shells are found. In Western Australia, such areas can be found here and there. When we want to eat some shellfish, we dive down with a bag to catch them. They are left overnight to get rid of sand and then are boiled. So many beyond our imagination can be found together.

C

The sea bed is beautiful with its various plants and colourful fish swimming among them. It is as bright as the scenery on land and as impressive. The sea plants sway with the waves in the water, but they turn stiff when we try to break them and they cannot be broken.
Sandbanks with no vegetation are also pretty. There is some vegetation where pearl shells live, but sandbanks without vegetation are beautiful as they are.



三月頃まで アントリハバーの中で貝拾いをしたり 近所の場所を働き天候の悪い時は
必ず近って来て又中で遊びます (お附だけ)

暮にも又此處へもどってきます

昔は良く遊人ならぬ、土産品も半田位しか仕事をせず魚もとって遊んでおり
神でもきかんに バクチをやっていたそうだ

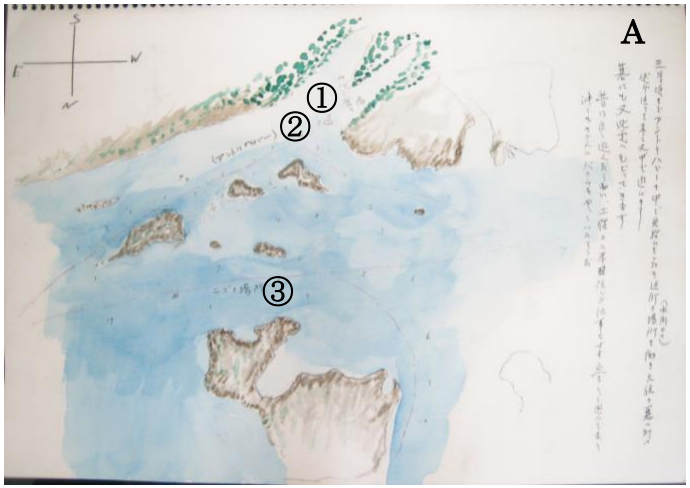
12 アントリハーバー（2）

アントリハーバー（Entry Habour?）

① カバ磨り場
（Site to scrub the bottom of luggers）

② アントリハーバー,
(Entry Habour？)

③ ニゴリ場所
（Muddy place）



A

三月頃までアントリハーバーの中で貝拾いをしたり、近所の場所で働き、天候の悪い時は逃げ返って来る。又中で遊びます。 暮にも又ここへもどってきます。
昔はよく遊んだらしい。土曜日半日位しか仕事をせず、魚を取って遊んでおり、沖でもさかんにバクチをやっていたそうだ。

A

Up to March we collect pearl shells in the Entry Harbour, or work in the nearby places. We come back to the harbour during bad weather. We enjoy ourselves in the harbour. We are also back here at the end of the year.
In the past divers and crews had more time to enjoy themselves. On Saturdays, they worked only half a day, and fished for fun. Even when they were offshore, they often gambled.

此の辺一帯は藻がたくさん生えて居り(長サ三尺位)藻が切れる頃見計って働く
"豆"も随々たくさん ある
小舟でイカを釣る
ビクトリアロック
ビクトリア、ロックの
位置の山は裏にあり
レグナード人
レグナード人

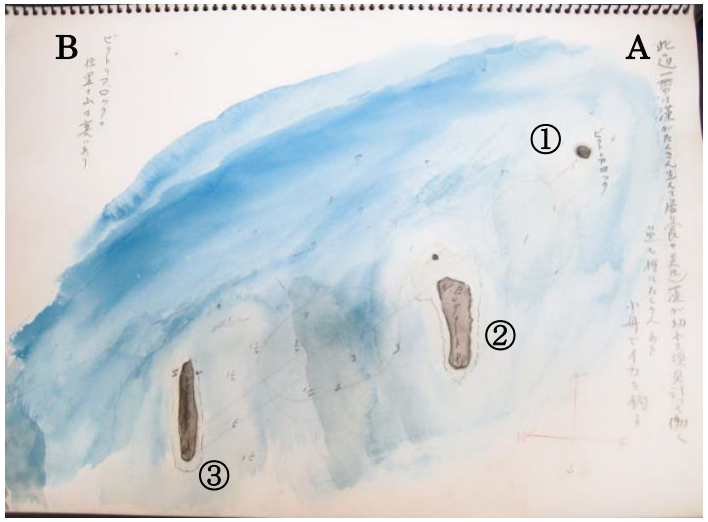
13　レグナード島周辺の海（1）

レグナード島（Regnard Islands）

①ビクトリア・ロック
（Victoria Rock）

② N.E.レグナード
（North East Regnard）

③ S.W.レグナード
（South West Regnard）



A

この辺一帯は藻がたくさん生えて居り（長さ三尺位）、藻が切れる頃見計って働く。魚も種々たくさんあり。小舟でイカを釣る。

B

ビクトリア・ロックの位置の山は裏にあり。

A

Many algae plants (about 3 *shaku* [1 metre] long) grow all around this area.　We start working in the season when not many algae plants are found.　We can find many kinds of fish.　We fish for squid in a dinghy.

B

The way to position the Victoria Rock using landmarks is explained on the back of this page.

藻が一ぱい生えていて貝はあるとても解らないから藻の切れる時期に海球貝を取ります

西濃州では何所へ行っても砂浜だと手又イナ、キス、等が投網でとれる又チヤイナフイ立といふアジ位の魚は船で仕事をしながらつれます

アジの様においしい魚です

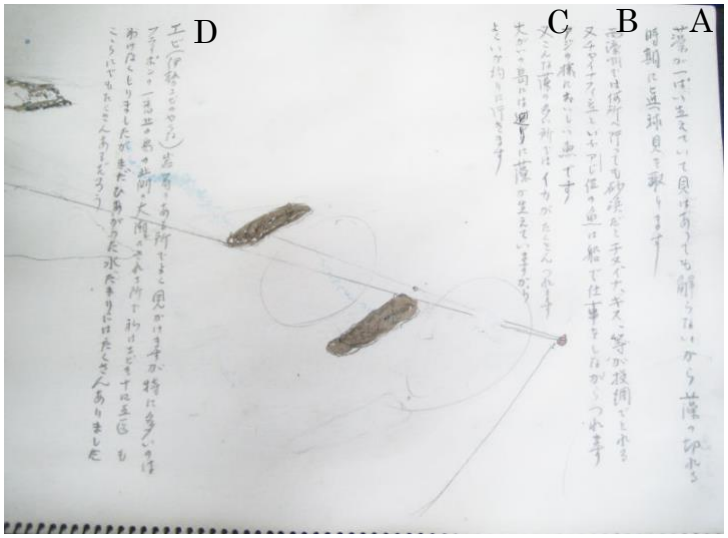
又こんな藻の多い所ではイカがたくさんつれます

大がいの島には廻りに藻が生えていますからよくいかが釣りに行きます

エビ（伊勢エビのやうな）岩礁のある所でよく見かけます特に多いのはフライポンの一番北の島の北側の大潮にさらされる所で形はエビを十に五匹もあげたくとりましたがまだひあがった水たまりにはたくさんありました

こちらにもたくさんあるだろう

14　レグナード島周辺の海（2）



A

藻が一ぱい生えていて、貝はあっても解らないから、藻が切れる時期に貝を取ります。

B

西濠州では何処へ行っても砂浜だと、チヌ、イナ、キス等が投網でとれる。又、チャイナフィッシュというアジ位の魚は、船で仕事しながらつれます。アジのようにおいしい魚です。

C

又、こんな藻の多い所では、イカがたくさんつれます。大がいの島には回りに藻が生えていますから、よくいか釣りに行きます。

D

エビ（伊勢エビのような）岩等のある所でよくみかけますが、特に多いのはフライポンの一番北の島の北側の大潮にほされるところで、私は十四、五匹もわけなくとりましたが、まだ干あがった水たまりにはたくさんありました。ここらにもたくさんあるだろう。

A

Many algae plants grow and we cannot see pearl shells. Therefore we collect pearl shells in the season when not many algae plants are found.

B

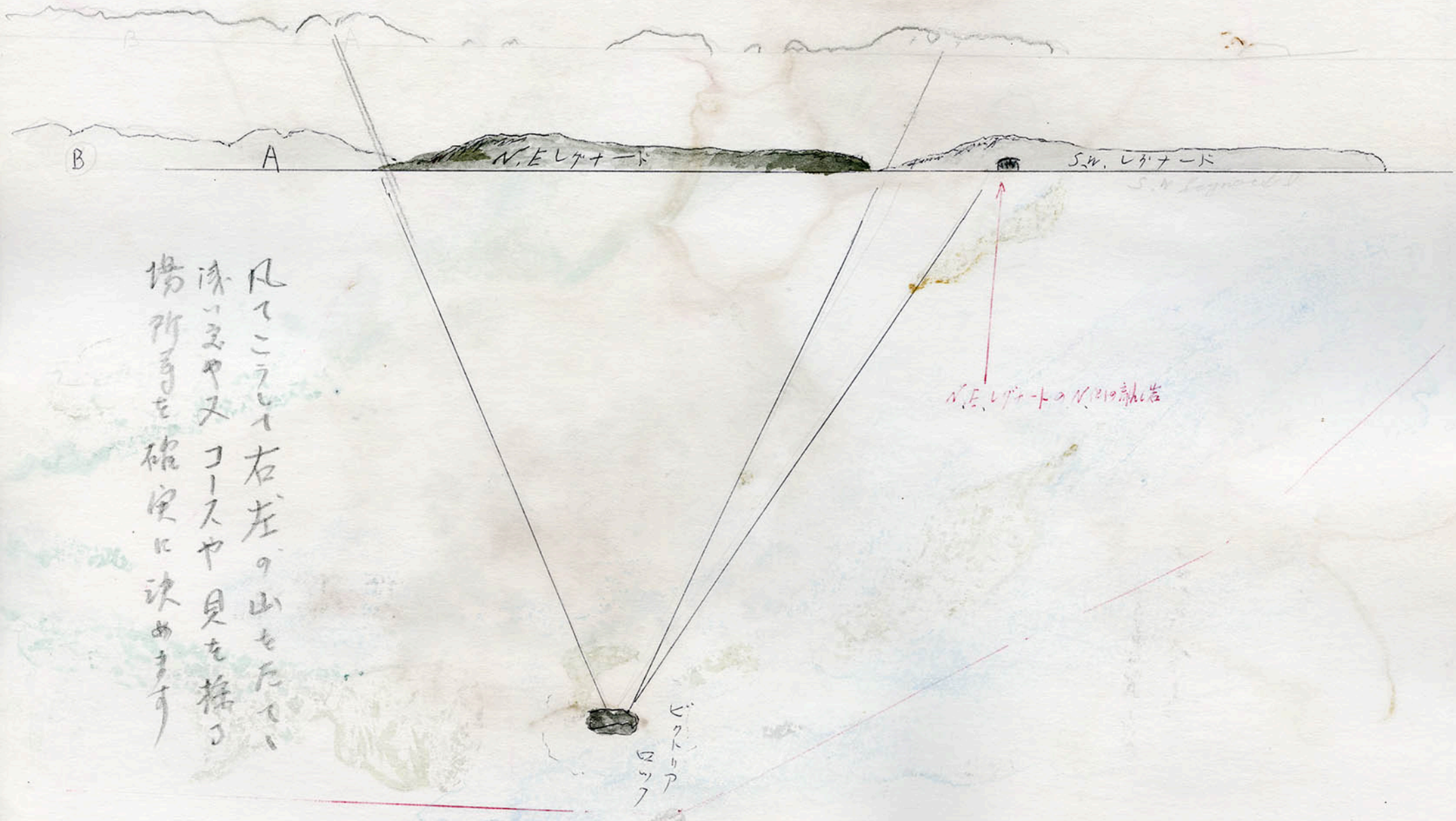
On the beach anywhere in Western Australia, we can catch black seabreams, young mullets, and whitings using a cast net.　While working on the boat, we can fish chinafish, which is the size of trevally. They are delicious tasting like trevally.

C

We can catch a lot of squid where many algae plants grow like at this place. Algae plants grow around most of the islands, so we often go to fish for squid.

D

We often find crayfish (look like Japanese lobsters) where there are rocks. We can find so many of them on the beach in the spring tide especially on the north side of the most northern island of the Flying Foam Passage. I caught easily 14 or 15 crayfish there, and still there were many in tide pools on the dry beach.　I think there would be many around here.



凡てこうして右、左の山をたゝ
涙いろや又コースや見を指す
場所等を確実に決めます

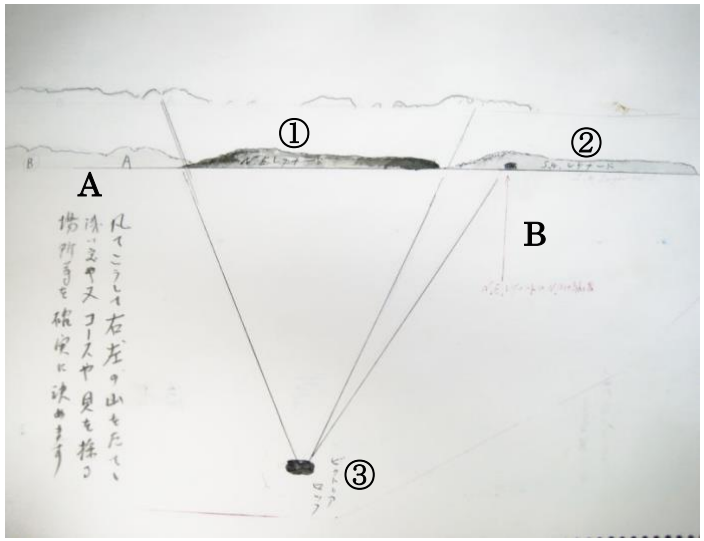
15 海上での位置確認の「山立て」

海上での「山立て」による位置設定

① N.E. レグナード
（North East Regnard）

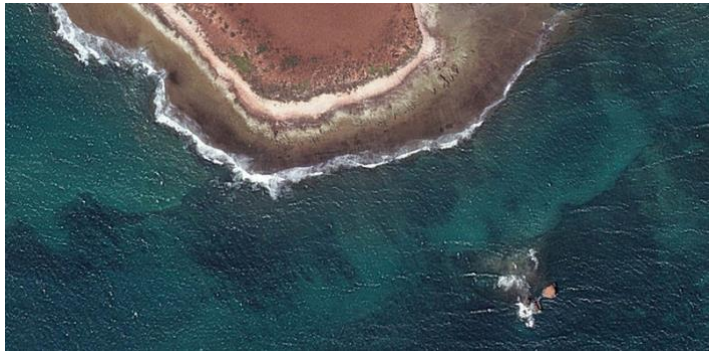
② S.W. レグナード
（South West Regnard）

③ ビクトリア・ロック
（Victoria Rock）



A すべてこうして右左の山を立てて、浅い処や、又コースや貝を採る場所等を確実に決めます。

B N. E. レグナードのN側の離れ岩



N．E．レグナードのN側の離れ岩

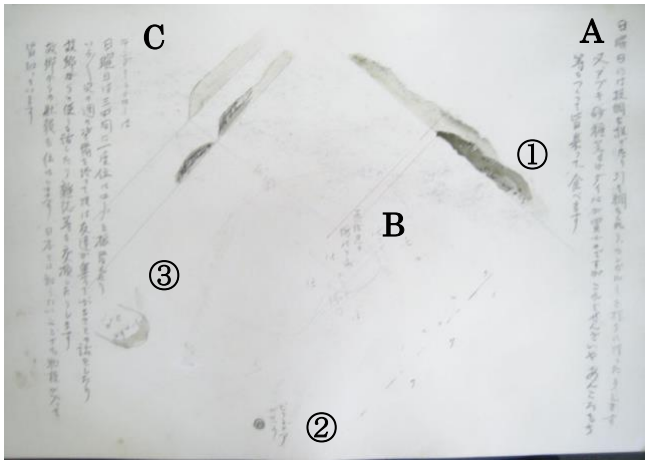
A We always position using the landmarks of the right and the left side hills, and remember places of shallow water, and navigate and determine the places we collect pearl shells.

B Detached rock at the northern side of N.E. Regnard

日曜日には投網を投げたり引き網をしたり、カンガルーを打ちに行ったりします
又アヅキ砂糖等はダイバが買ふのですがこれはぜんざいやあんころもち
等をつくって皆集って食べます

テンボーとクローは
日曜日は三四回に一度位はロッジを掃除をたり
いろ〳〵次の週の準備を終って後は友達が集って、ふるさとの話をしたり
故郷からの便りを話したり雑誌等を交換したりします
故郷からの報も伝はります、日本とは知らないことでも世界が入って
皆知っています

16 船上での生活



① S.W.レグナード
（South West Regnard）

② ビクトリア・ロック
（Victoria Rock）

③ N.E.レグナード
（North East Regnard）

船上での食事（Meals on board of lugger）

A

日曜日には投網を投げたり引き網をしたり、カンガルーを撃ちに行ったりします。又、アズキ、砂糖等はダイバーが買うのですが、これでぜんざいやあんころもち等をつくって皆集って食べます。

B

真珠貝の場所の山アテ

C

テンダーとクローは、日曜日は三、四回に一度位はロープを振替えたり、いろいろ次の週の準備を終って、後は友達が集って故郷の話をしたり、故郷からの便りを話したり、雑誌などを交換したりします。故郷からの情報も伝わります。日本では知らないことでも情報が入って、皆知ってます。

A

On Sundays, we cast a fishing net, draw a beach seine, and shoot kangaroos. The divers usually buy sugar and red beans. We also get together to cook and eat *zenzai* (rice cakes with sweet red bean soup) and *ankoromochi* (rice cakes with sweet red bean paste) using red beans and sugar which are provided by the divers.

B

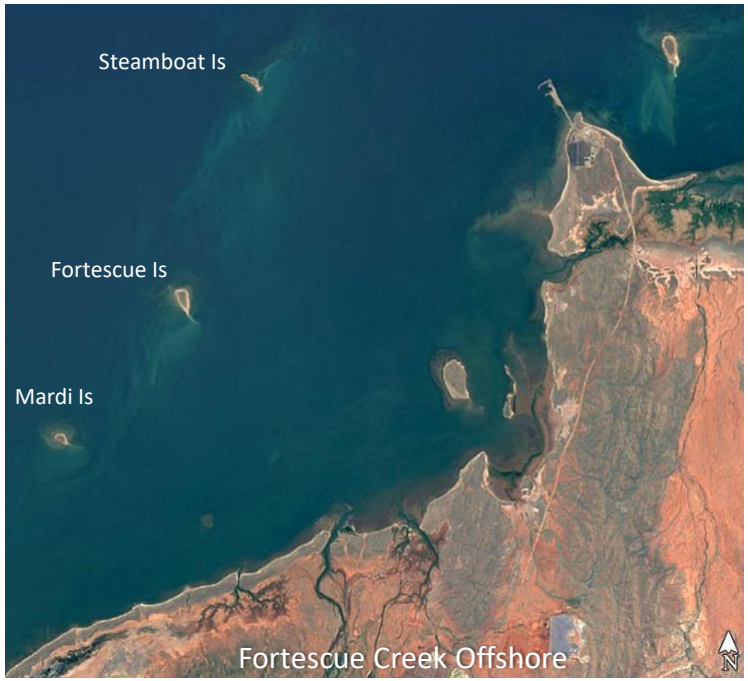
Positioning the places for pearl-shell diving using the landmarks

C

On every third or fourth Sunday, tenders and crews change ropes. After we finish the preparation for the works for the following week, friends gather to talk about their hometown and the news from home, and to exchange magazines. News from home is shared among us. We even get some news which is not reported in Japan, and known by every one of us.

N
E
Sterbort. l
algrady shool
Fortescue l
Mordi l
カラー多い本場所で深さ七尋
一ユキシトーオフはたかぢ

17 カラー場所

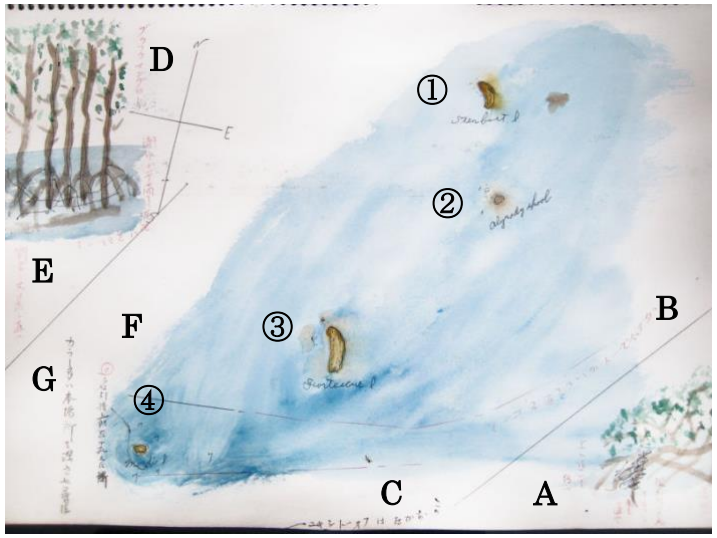


① Stenboat Is
（Steamboat Is）

② Alynally Shool
(Ordinary Shoal ?)

③ Fortescue Is

④ Mardi Is



A White mangroves: the trees are short and submerged in the tide. Many roots come out. It is not possible to pass through the wood.

B The course along which the luggers usually sail.

C Fortescue is on near land.

D Black mangroves grow in the intertidal mudflats.

E They are relatively tall, and grow straight.

F Place where Mr Seigoro NABIKI died.

G Many basket stars grow at the spot, and the depth is around 7 fathoms

A ホワイトマングローブ、木が低く潮に浸かっている。根がたくさん生えている。中を通れない。

B ダイバーボートがいつも通るコース

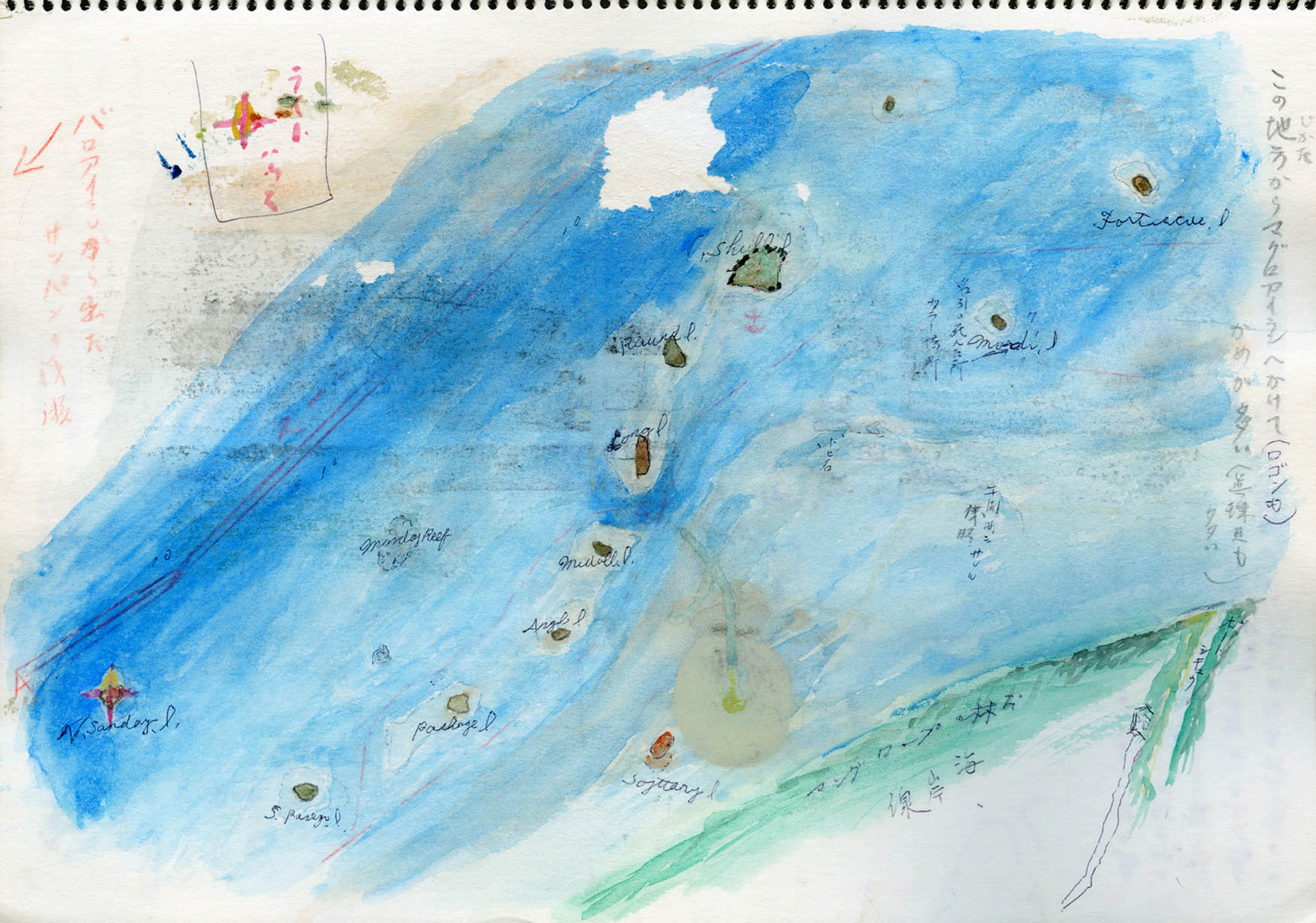
C このぢかた（地方）がフォートシキュウ

D ブラックマングローブ。潮水が干満する泥地に生えている。

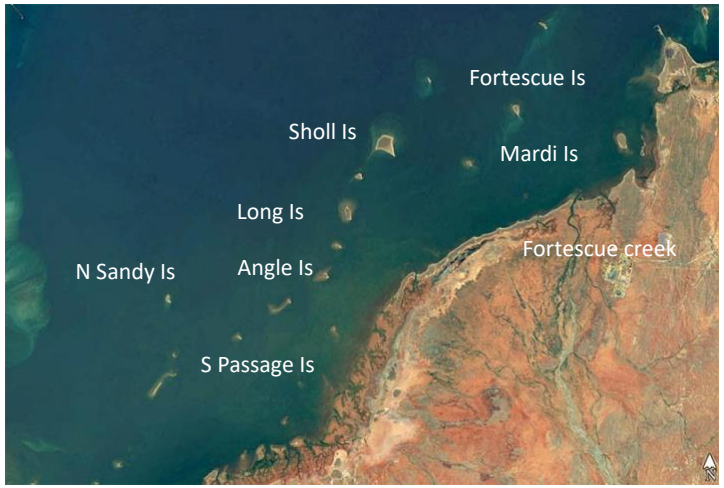
E 割合に丈は高く、真直ぐ。

F 名引清五郎君死亡した所

G カラー多い場所で深さ七尋位


バロアイランドから生長サンバンの方向
この地方からマグロアイランドへかけて(ロゴンボ)
かめが多い(産卵期も多い)
Fortescue I.
V. Shull I.
Rawa I.
Mordi I.
Long I.
Mudy Reef
Mudy I.
Angl I.
N. Sandy I.
Passage I.
Solitary I.
S. Passage I.
ラングロープの林
海岸線

18 ショール島からマングローブ諸島



From Sholl Island to South Passage Island

① Fortescue Is

② Mardi Is

③ ポートシキュウ（Fotescue Creek）

④ 海岸線（Coast line）

⑤ マングローブ林（Mangrove bush）

⑥ Sholl Is

⑦ Round Is

⑧ Long Is

⑨ Middle Is

⑩ Angle Is

⑪ Monday Reef

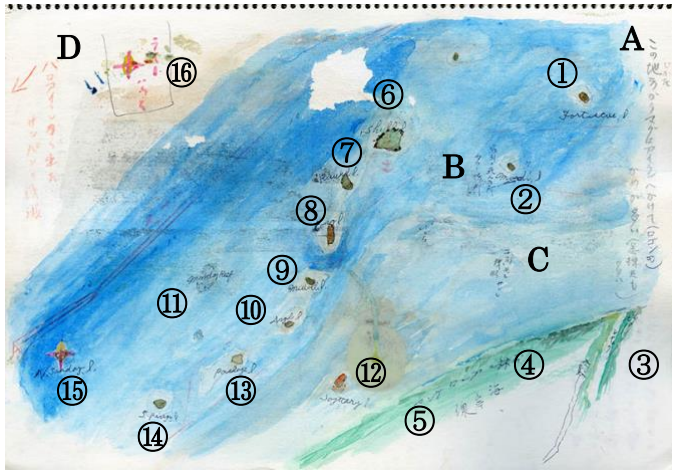
⑫ Solitary Is

⑬ Passage Is

⑭ South Passage Is

⑮ North Sandy Is

⑯ ライトハウス（Lighthouse）



A この地方からマグロアイランへかけてロゴン、かめが多い（真珠貝も多い）。

B 名引の死んだカラー場所

C 干潮時に干される浅瀬

D バローアイランから出たサンパンの浅瀬

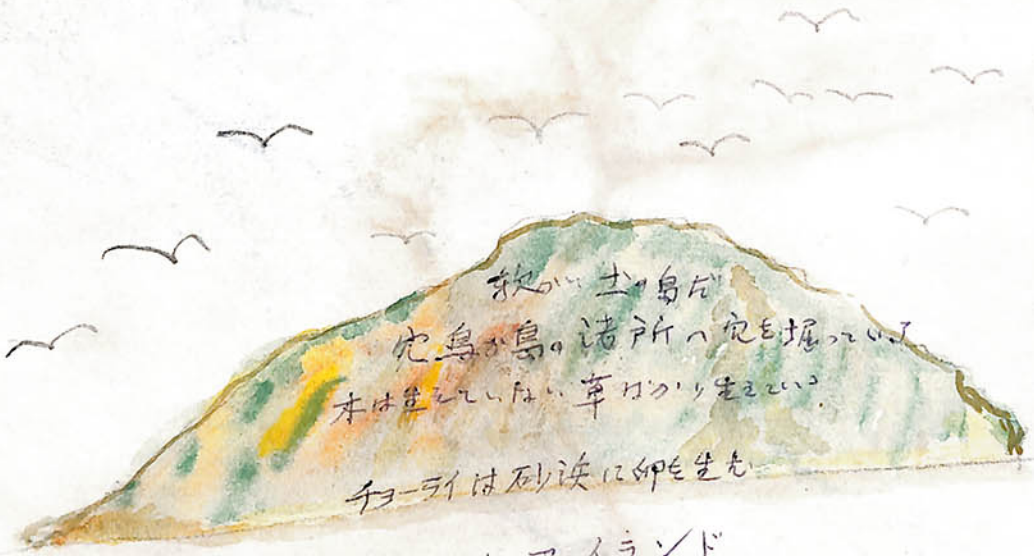
A There are many sea turtles and dugongs from this area to the Mangrove Islands. (There are also many pearl shells.)

B Mr Nabiki died in this spot where basket stars grow.

C Sandbank which comes out at low tide.

D Sandbank segment which grew from sand coming from Barrow Island.

この島にはあなどりがたくさん棲んでいて横穴に掘った穴に卵を産んでいる
鳥は小さいが卵はニハトリの卵位の大きさでゆで、食べるとおいしい 晝は目が
見え難いので穴の中にいて夜になると魚をとりに出るとちばしはするどく手で穴の中
の卵を取ろうとするとつくかれるので針金で造ったもので其をかき出して卵を取る
身も焼いて食べるとどうにか食べられる（外の島にも多分あるのだろうが）



ショール アイランド

スーコトーボバイダの島

また チョウライ（日本人がそう呼んでいる）といふカモメに似た鳥が繁殖期には何千羽も
集ってきて砂浜へ一せいに卵をうみます その産み方が其四角にキチヨーメンに並んで
産み揃えた様です 自然と孵化します
どこの島も同じだと思ふが十月中頃から種々の亀が卵を生むため島へ這ひ上ります
十五センチ位の深さの穴を掘って卵を産み砂をかぶせて わからない様にして海へかえります
こんなに鳥や亀の卵が孵化しても又鳥や魚に食べられて何割も生き残らないでしょう
亀のみは十四五日で孵化して自分で（自力）出て来ます

19 ショールアイランド

A

There are many shearwaters on this island and they lay eggs in burrows they dig out.　They are small birds, but their eggs are about the size of chicken eggs. Boiled ones are tasty to eat. The birds cannot see well during the day, so they stay inside the burrows, but they come out at night to catch fish. Their beaks are sharp and they would peck us if we put our hands in the burrow to collect eggs.　So, we use a tool made out of wire to roll the eggs out. The birds are just edible when they are grilled. Such birds probably live on other islands.

B

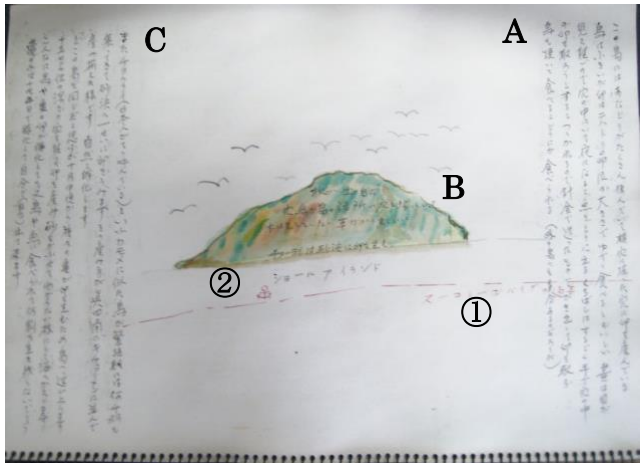
The soil on the island is soft. Shearwaters dig burrows in various places on the island. No trees grow on the island, but only grass does. Gannets lay their eggs on the beach.

C

Gannets, seagull-like birds (the Japanese call them *chōrai*), gather in thousands during the breeding season and lay their eggs simultaneously on the beach.　The eggs are laid in a pattern of neat squares as if they measure them.　The eggs hatch naturally. I guess　this is the same on other islands, but from the mid-October various types of turtles crawl up to the beach. They dig holes about 15cm deep, lay eggs there and cover them with sand to hide the eggs before returning to the sea. Most of the many chicks and baby turtles that are hatched would not survive as they are eaten by birds and fish.　Turtle eggs are hatched after 14 to 15 days and babies come out of the eggs by themselves.

① ステーマコース
（Steamship course）

② ショールアイランド
（Sholl Island）



A

この島にはあなどりがたくさん棲んでいて、横穴に掘った穴に卵を産んでいる。鳥は小さいが、卵はニワトリの卵位の大きさで、ゆで、食べるとおいしい。昼は見え難いので、穴の中にいて、夜になると、魚をとりに出る。くちばしはするどく、手で穴の中の卵を取ろうとすると、つつかれるので、針金で造ったものでかき出して卵を取る。鳥も焼いて食べると、どうにか食べられる。鳥（他の島にも多分あるだろうが）

B

軟らかい土の島だ。穴鳥が島の諸所へ穴を掘っている。木は生えていない。草ばかり生えている。チョウライは砂浜に卵を生む。

C

またチョウライ（日本人がそのように呼んでいる）というカモメに似た鳥が繁殖期には何千羽も集ってきて、砂浜へ一せいに卵をうみます。その産み方が真四角にキチョウメンに並んで、産み揃えたようです。自然と孵化します。どこの島も同じだと思うが、十月中頃から種々の亀が卵を産むため島へ這い上ります。十五センチ位の深さの穴を掘って卵を産み、砂をかぶせてわからないようにして、海へ帰ります。こんなに鳥や亀の卵が孵化しても、又鳥や魚に食べられて何割も生き残らないでしょう。亀の子は十四、五日で孵化して、自分（自力）で出てきます。

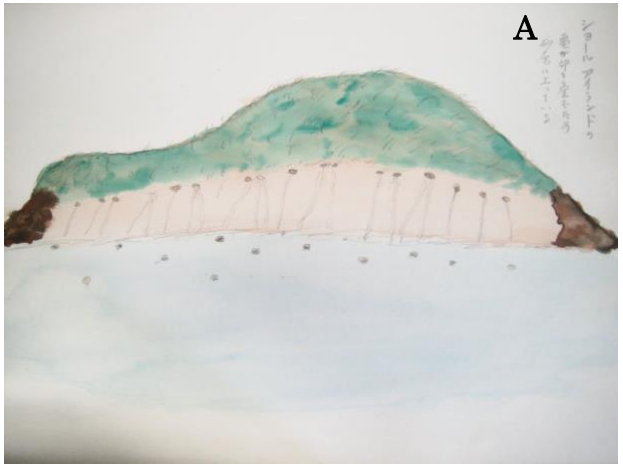
ショール アイランドの
亀が卵を産むため
砂浜に上っている

夜、
亀は小潮になる卵を産むため砂浜に来て上の栃子をうかがひ一波くと
上って来ます 波の届かない変まではいあがって卵を産む穴を堀り
（十センチ乃ち十五センチ位）卵を産んでから又海へかえります

卵を産んだあと充分動らしてかえります
母がめや弟がめは里亘の明るい内からあがります

20 ショール島のウミガメの産卵

ショール島 (Sholl Island)



A

ショールアイランドの亀が卵を産むため砂浜に上っている。

B

夜、亀は小潮になり、卵を産むため砂浜に来て、上の様子をうかがい、一波一波と上ってきます。波の届かない処まではいあがって、卵を産む穴を掘り（十センチから十五センチ位）、卵を産んでから又海へかえります。

C

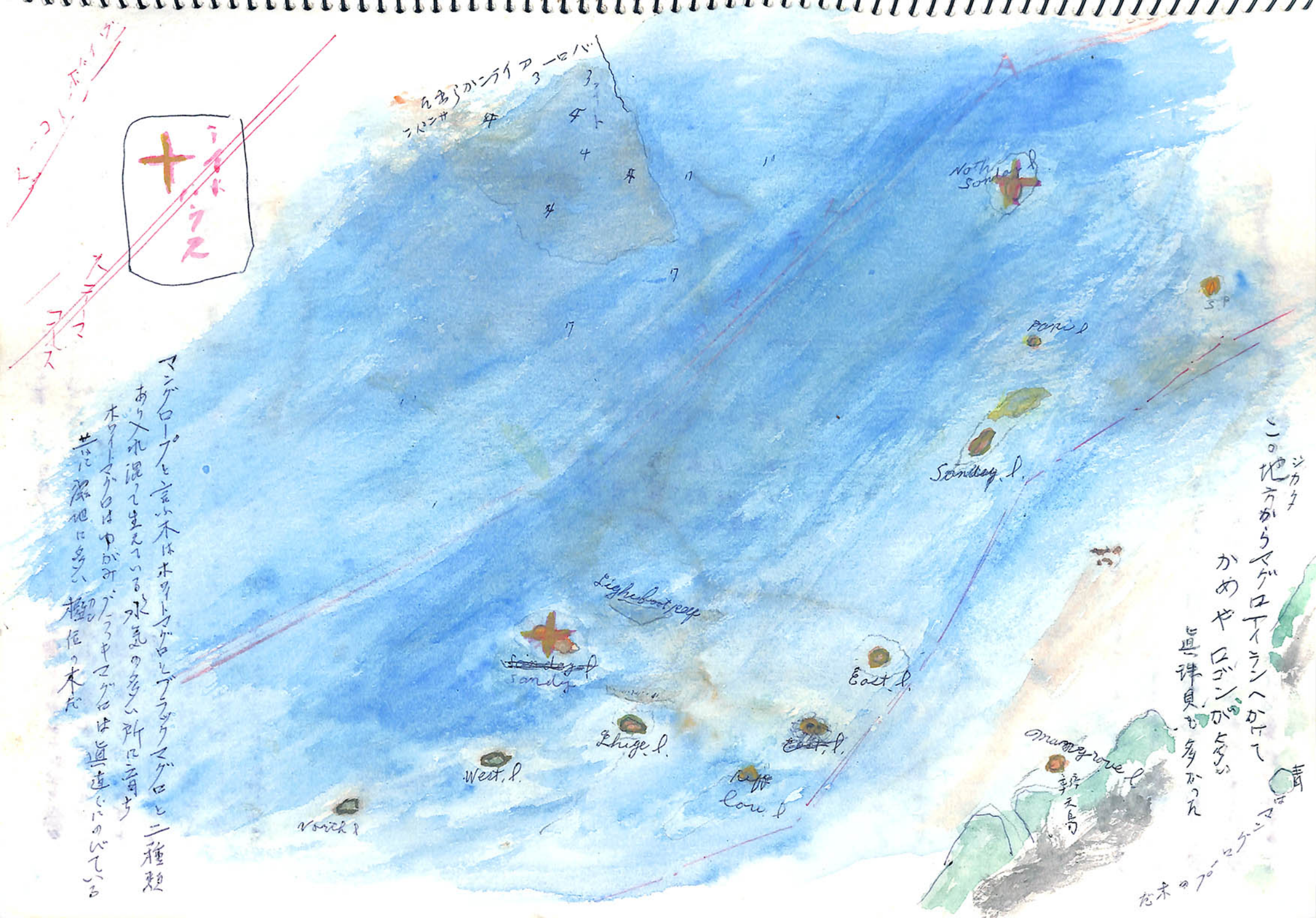
卵を産んだあと、充分均らしてかえります。青がめや赤がめは昼の明るい内からあがります。

ウミガメの産卵

A A turtle comes ashore on the beach at Sholl Island.

B At night when the tide is at the neap tide, turtles come to the beach to lay eggs. They check the beach and approach there gradually on one wave after another. They crawl to the dry section where waves cannot reach, dig holes to lay their eggs (10cm to 15cm deep), lay eggs, and then return to the sea.

C After laying eggs, they smooth the surface thoroughly and return to the sea. Green turtles and Loggerhead turtles come ashore before it gets dark.



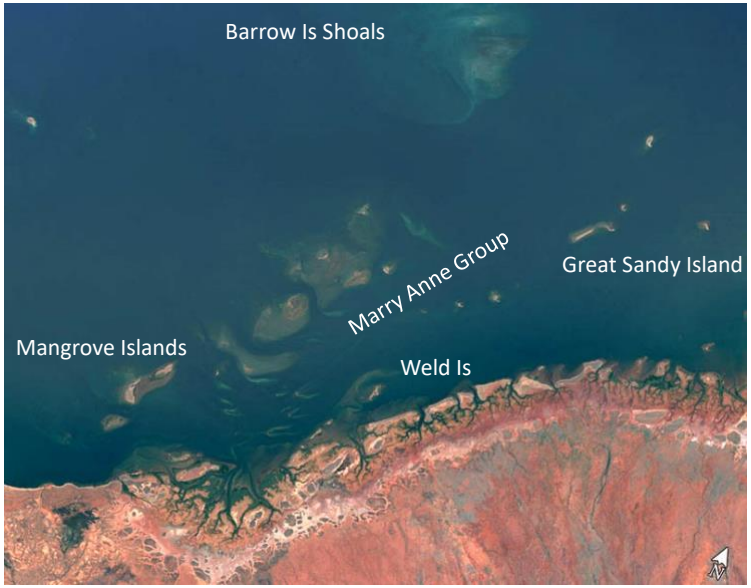
マングローブと言う木はホワイトマングロとブラックマングロと二種類あり入れ混って生えている水流の多い所に育つホワイトマングロはゆがみ、ブラックマングロは真直ぐにのびている
特に深地に多い 樹脂 化の木だ

この地方からマングローブイランへかけてかめや ロゴンが多い
真珠貝も多かった

ジカタ

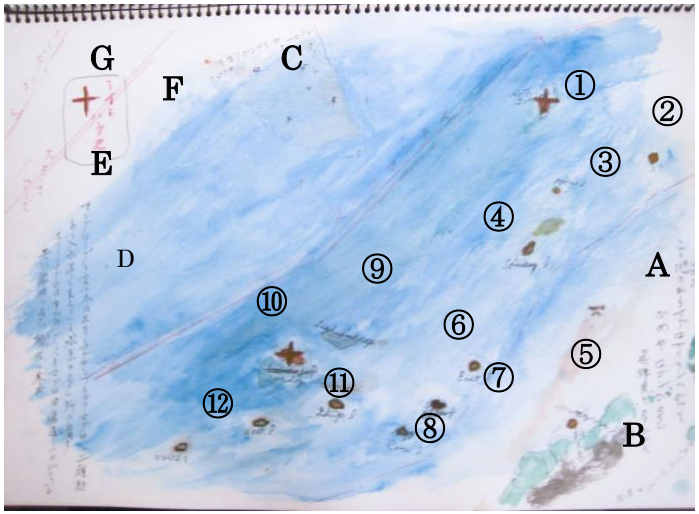
マングローブの木のプロペラ

21 マングローブ島手前



Marry Anne Group

① North Sandy Is
② South Passage Is
③ Popu Is(Pup Is)
④ Sandy Is
⑤ 弁天島,Mangrove Is (Thringa Is)
⑥ East Is
⑦ 不明（unknown）
⑧ Low Is(Weld Is)
⑨ Lightfoot Reef
⑩ Sandy Is (Marry Anne Reef)
⑪ Thige Is (False Is)
⑫ West Is
⑬ North Is



A From this area to the Mangrove Islands, there are many sea turtles and dugongs. There were also many pearl shells.

B The green parts are the area where mangroves grow.

C Sandbank segment of Barrow Island

D There are two kinds of mangroves: white mangroves and black mangroves. They grow intermingled. They grow in wet places: white mangroves are warped, and black mangroves grow straight. Both are like evergreen oak and are found a lot in wetlands.

E Steamships' course

F Lighthouse

G Luggers' course

A この地方からマグロアイランへかけて かめやロゴンが多い。真珠貝も多かった。

B 青がマングローブの木だ

C バローアイランから出たサンパン

D マングローブと言う木はホワイトマングローブとブラックマングローブと二種類あり。入れ混じって生えている。水気の多い所に育ち、ホワイトマングローブはゆがみ、ブラックマングローブは真直ぐ伸びている。共に湿地に多い樫位の木だ。

E ステーマコース

F ライトハウス

G ダイバーボートコース

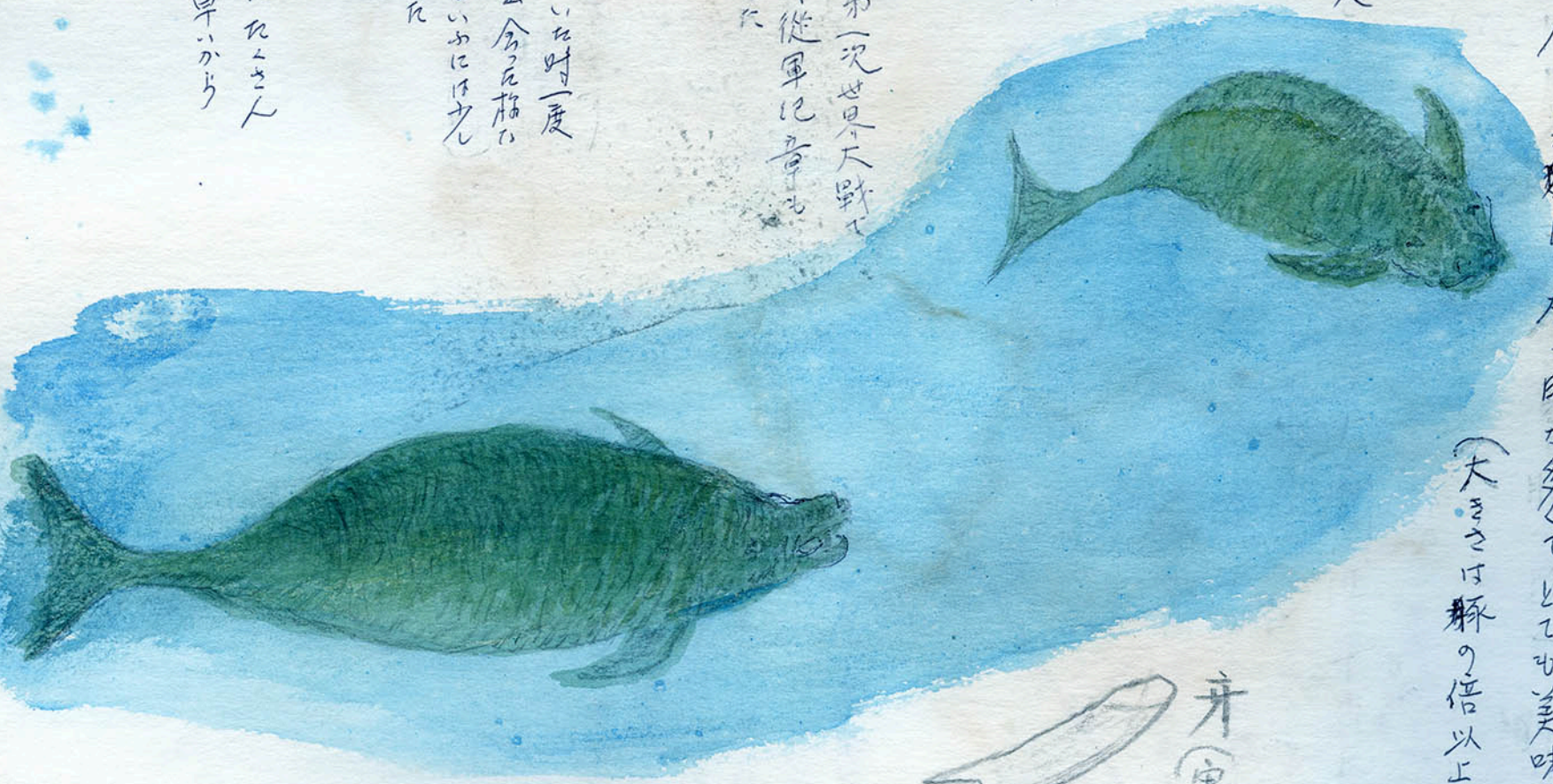
ロゴン（ジュゴン）

西濠州にはマングローブのある所にて藻類を主とも食べているが躯が大きいので
西濠州では丸のまま砂浜へ引きつけて焼いて焼けただけ切って食べているのを
見たことがある。西濠州で昭和の始め頃同社の船で捕ったのを貰って
肉を味噌煮きにして食べたが豚肉の様で脂が多くてとても美味だった
（大きさは豚の倍以上ある）

ポートダーウヰンの
白人の足の不自由な老人
がいさ、店を持って
いたが、よくその店へ
行っていろ〳〵の物を
買ったがトカゲや亀の
子、やワニの子の鮫（ハクマイ）
其の他あったがロゴンの
牙も賣っていた
この店の主人の老人は第一次世界大戦で
負傷したので勲章や従軍記章も
持っていて見せてくれました

私はダイバーとして働いていた時一度
海底で二匹のロゴンに出会った様な
気がする。其の時人魚というにはかし
ふさわしくない姿だと思った

西濠州でさがせばまだたくさん
居るらしいが泳ぐのが早いから
捕えられないのだろう



牙（実物大）

22 ロゴン（ジュゴン）

A

In Western Australia, dugongs live among mangroves and eat mainly algae plants. They are large in size, and in northern Australia, a caught dugong was taken to the beach as a whole to be cooked. People cut out pieces of meat as they were cooked. In the early years of Showa period [around the late 1920s], we were given a dugong which was caught by a company boat in Western Australia. When we cooked it with *miso* paste, it was delicious as it had similar taste as pork and rich in flavour. (Its size is twice as large as a pig.)

B

In Port Darwin, an old white man with a lame leg used to run a small shop where I bought various things. He was selling lizards, baby turtles and baby crocodiles which were all stuffed, as well as dugong tusks. This old shop owner was injured in the First World War and received military and service medals, which he showed me.

C

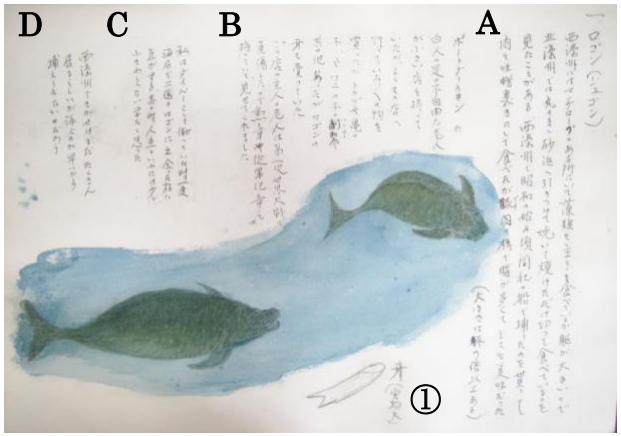
When I was working as a diver, I thought I met two dugongs on the sea bed. I thought their shapes were looked far from mermaids, as some people have described them.

D

I hear that there are still many dugongs in Western Australia, but it might be difficult to catch them as they swim fast.

① 牙（Tusk of dugong）

先住民によるジュゴン猟（トレス海峡）



A

一ロゴン（ジュゴン）
西濠州にはマングローブのある所にいて、藻類を主として食べているが、躯が大きいので、北濠州では丸のまま砂浜に引きつけて焼いて、焼けただけ切って食べているのを見たことがある。西濠州で昭和の初め頃同社の船で捕ったのを貰って、肉を味噌炊きにして食べたが、豚肉のようで、脂が多くて、とても美味だった。
（大きさは豚の倍以上ある）

B

ポートダーウィンの白人の足の不自由な老人が小さい店を持っていたが、その店へ行っていろいろの物を買ったが、トカゲや亀の子やワニの子の剥製その他あったが、ロゴンの牙も売っていた。この店の主人の老人は弟一次世界大戦で負傷したので、勲章や従軍記章も持っていて、見せてくれました。

C

私はダイバーとして働いていた時、一度海底で二匹のロゴンに出会ったような気がする。その時、人魚というには、少しふさわしくない姿だと思った。

D

西濠州でさがせば、まだたくさんいるらしいが、泳ぐのが速いから捕えられないのだろう。

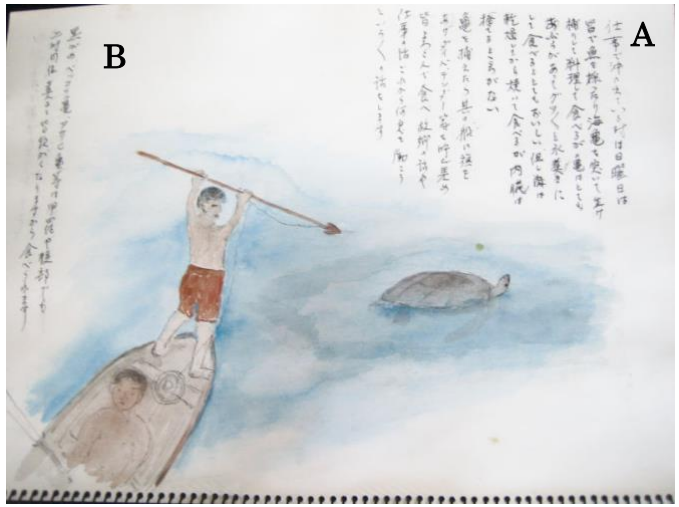
仕事で沖に出ている時は日曜日は
皆で魚を採ったり海亀を突いて生け
捕りして料理して食べるが亀はとても
あぶらがあってグツグツと水蒸きに
して食べるとともおいしい但し肉は
乾燥してから焼いて食べるが内臓は
捨てるところがない
亀を捕えたら其の船に旗を
あげダイバ、テンダー等を呼び集め
皆よってたかって食べ故郷の話や
仕事の話これから何を働こう
といろいろの話をします

黒がめ、ベッコウ亀、アカヒ亀等は甲羅や腹部でも
二時間位煮ると皆軟かくなりますから食べられます

23 ウミガメ猟

ウミガメの解体（先住民による　木曜島付近）

ウミガメの卵取り（茹でても、卵の白身は固まらない　木曜島付近）



A

When we are at the sea for work, we spend our Sundays to fish and catch sea turtle alive by spearing them. We cook them for food and turtle meat which is boiled slowly is really tasty as it has a lot of fat. As a matter of fact, the meat is firstly dried and then eaten, but all the intestine is also eaten and nothing is thrown away.
When we catch a turtle, we hoist a flag to let other boats know. Divers and tenders come to the boat and enjoy the feast. We talk about home and work, and discuss where to sail next.

B

When Pacific black turtles, Hawksbill turtles and young Green turtles are boiled for about two hours, the shells and plastron become tender and can be eaten.　When Pacific black turtles, Hawksbill turtles and young Green turtles are boiled for about two hours, the shells and plastron become tender and can be eaten.

A

仕事で沖に出ている時は、日曜日は皆で魚を取ったり、海亀を突いて生け捕りにして料理して食べるが、亀はとてもあぶらがあって、グツグツと水煮きにして食べると、とてもおいしい。但し、肉は乾燥してから焼いて食べるが、内臓は捨てるところがない。
亀を捕えたら、その船に旗をあげ、ダイバー、テンダー等を呼び集め、皆よろこんで食べ、故郷の話や仕事の話、これから何処を働こうといろいろの話をします。

B

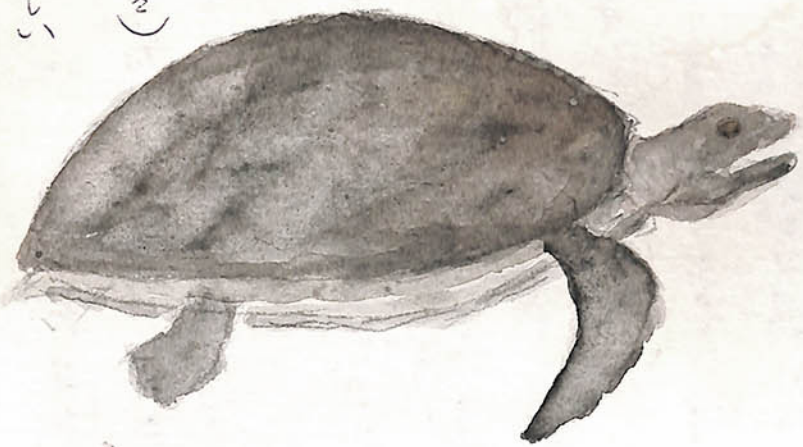
黒がめ、ベッコウ亀、アサヒ亀等は甲羅や腹部でも二時間位煮ると、皆軟らかくなりますから、食べられます。

濠州の亀

日本では濠州の様なうまい亀は食べられない

黒がめ

一番美味なかめで甲羅も肉脂も二吋肉あまり煮て(死だき)切って食べる日本にはいないらしい肉は干して食べる



青がめ

圖体は大きいがおとなしい魚はくさいので食べないが卵は大きい

か書でもこの卵も産みに上ってくる人間が乗って歩ける位大きい

卵はどの亀でも食べるがやはりべっこうの卵や黒の卵が美味で食べるとともおいしい

あきひがめ

あっさりしておいしい甲羅や腹甲や皆食べる

べっこうがめ(タイマイ)

黒がめと同じくとてもおいしい甲羅はべっこうとして珍重する

赤がめ

日本でもよく潮にのってくるらしい卵も産みに来る口はとがってするどく咬みつくのでこわい胃袋や腸が厚くてうまい

日本でもあまり食べる

24 ウミガメの種類

A We cannot find tasty turtles in Japan as we do in Australia.

B This is the tastiest turtle, and the shell and intestine are boiled in water for about two hours and cut into pieces to be eaten. I hear that this type of turtle cannot be caught in Japan. Its meat is dried and eaten.

C This turtle is large, but quiet. It has bad breath, so we don't eat it, but their eggs are large. They come ashore even during the day to lay eggs. They are big enough for a person to ride on.

D The meat is plane but tasty. We eat all its shell and plastron.

E Just as Pacific Black turtles, the meat is very tasty. The shells are treasured as tortoiseshell.

F I heard this type of turtles reach Japan on the sea current. They come to lay eggs. We are scare of them as they have pointed beaks and can bite. The walls of their stomachs and bowels are thick and tasty.

G We eat all types of turtle eggs, but the eggs of Hawksbill and Pacific Black turtles are delicious to eat as raw eggs.

H We also eat them in Japan.

① 濠州の亀
(Australian sea turtles)

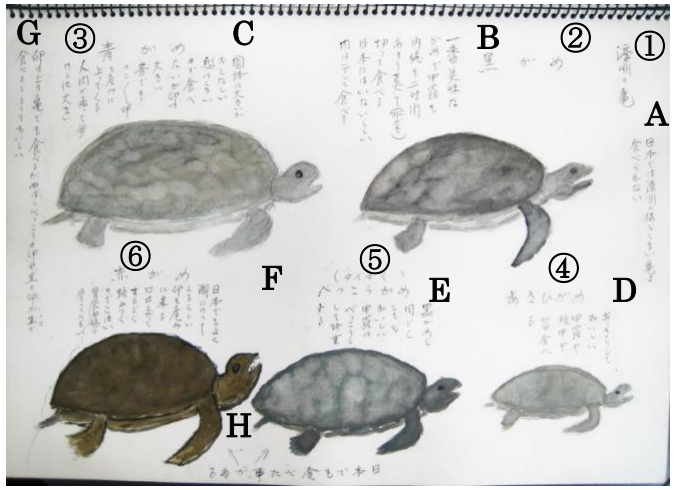
② 黒がめ
(Pacific Black turtle)

③ 青がめ（Green turtle）

④ あさひがめ
(Young Green turtle)

⑤（タイマイ）べっこうがめ
(Hawksbill turtle)

⑥ 赤がめ（Loggerhead turtle）



A 日本では濠州のようなうまい亀は食べられない。

B 一番美味なかめで、甲羅も内臓も二時間あまり煮て（水だき）切って食べる。日本にはいないらしい。肉は干して食べる。

C 図体は大きいがおとなしい。息はくさいので食べないが、卵が大きい。昼でものこのこ卵を産みに上って来る。人間が乗って歩ける位大きい。

D あっさりしておいしい。甲羅や腹甲皆食べる。

E 黒がめと同じく、とてもおいしい。甲羅はべっこうとして珍重する。

F 日本でも潮に乗ってくるらしい。卵も産みに来る。口はとがってするどく咬みつくのでこわい。胃袋や腸が厚くうまい。

G 卵はどの亀でも食べるが、やはりベッコウの卵や黒の卵が生で食べると、おいしい。

H 日本でも食べる事がある。

海亀捕り

うみがめは西濃州にはたくさんおりますが食物は主に藻類ですが私達は休みの日曜日には船に積んでいるレンゲ(小舟)を下して亀さがしに二三人で出掛けます見付けるとスベヤといふイルカ等もつくものでつかいて長い時間かかって、やっと小舟にあげ船に帰り大きく切って二時間位水煮きして細かく切り醤油をつけて食べますが肉よりも脂身や内臓がとてもおいしくて、皆で喜んで食べます肉はレゲンに干して後日夜走りする時食べます。食べなれると次の日曜日を待ち遠しい程に「ります。私が渡航した当時はコーセキ市に白人の亀会社があり缶詰にしてどこかえ送っていましたが儲れぬのか企業として成立しなかったのか止めてしまひましたが家は立派な石造り家でした

私の

居る頃は村松さんのものになっていましたが多分低迷になっていたのでしょう

こんな田舎(イナカ)では何体ない位の家で広くて涼しいので私達はよく涼みに行きました戦争で今は没収されて白人の使かい住んでいるでしょう

うみへび

海へびはたくさんおり命綱(イノチヅナ)に巻きつたり又三ツあるグラスめがけてやってきます、真珠貝のある場所には蛇はたくさんいて多いときは一日も何十匹もみかけます　みんな毒を持っているらしいが特に小さいのは猛毒をもっていると聞きましたが悪いことはしません

25 海亀捕りとうみへび

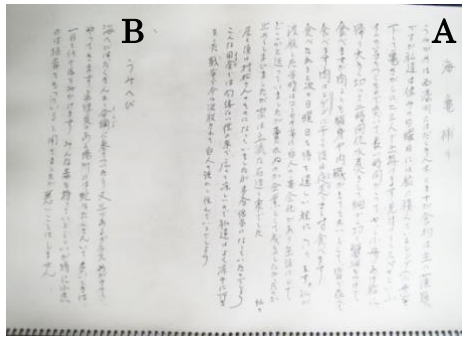
A

Turtle Hunting: There are many sea turtles in Western Australia and they mainly eat sea plants. On our off-duty Sundays, we unload a dinghy from the boat and some of us go turtle hunting. When we find one, we use spears which are for dolphin hunting to catch it. After a long struggle, we finally lift it onto the dinghy and return to the boat. We cut it into big chunks and boil it for about two hours before slicing them into small pieces and serving them with soy sauce. Turtle fat and intestine are much tastier than meat itself and everybody enjoys them. The meat is dried on mast ropes and eaten later when we sail through the night. Once we become familiar with the flavour, we look forward to the next Sunday. When I arrived in Cossack, a white man was running a turtle meat canning company and the produce was sent somewhere. But the business was discontinued probably because they could not sell the produce or the business was not viable. The building was impressive and built out of stone. When I was there, the building was owned by Mr Muramatsu, probably because it was mortgaged. The building was unusually impressive for such a remote town. We used to visit there as it was large and inside was cool. It was confiscated due to the war and some white Australians are probably living there now.

B

Sea Snake: Many sea snakes live in the sea and they coil on the lifeline or come to the three glass plates on the helmet. In the area where pearl shells are found, sea snakes are abundant and I see so many in one day. I hear they are poisonous, particularly small ones are extremely poisonous, but they do not cause any harm to us.

海亀捕り



A

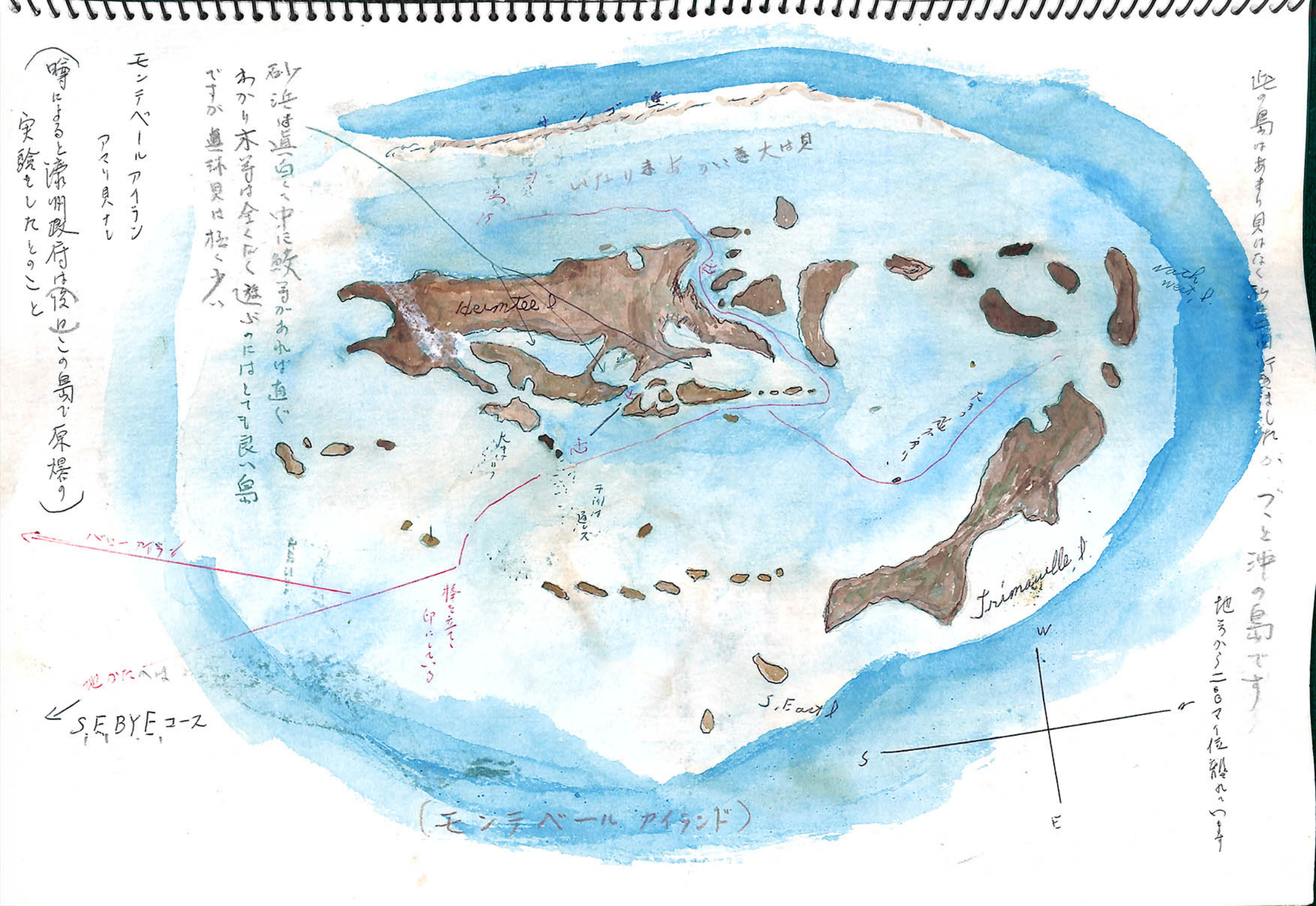
海亀捕り

うみがめは西濠州にはたくさんおりますが、食物は主に藻類ですが、私達は休みの日曜日には船に積んでいるレンゲ（小舟）を下して亀さがしに、二、三人で出掛けます。見付けると、スペヤといふイルカ等をつくもので突いて長い時間かかってやっと小舟にあげ、船に帰り、大きく切って、二時間ぐらい水炊きして、細かく切り醤油をつけて食べますが、肉よりも脂身や内臓がとてもおいしくて、皆で喜んで食べます。肉はレゲンに干して、後日夜走りする時食べます。食べなれると、次の日曜日を待ち遠しい程になります。私が渡航した当時はコーセキ市に白人の亀会社があり、缶詰にしてどこかへ送っていましたが、売れぬのか企業として成立しなかったのか、止めてしまいましたが、家は立派な石造りの家でした。私の居た頃、村松さんのものになっていましたが、多分抵当になっていたのでしょう。こんな田舎では勿体ない位の家で、広くて涼しいので、私達はよく涼みに行きました。戦争で、今は没収されて、白人の誰かが住んでいるでしょう。

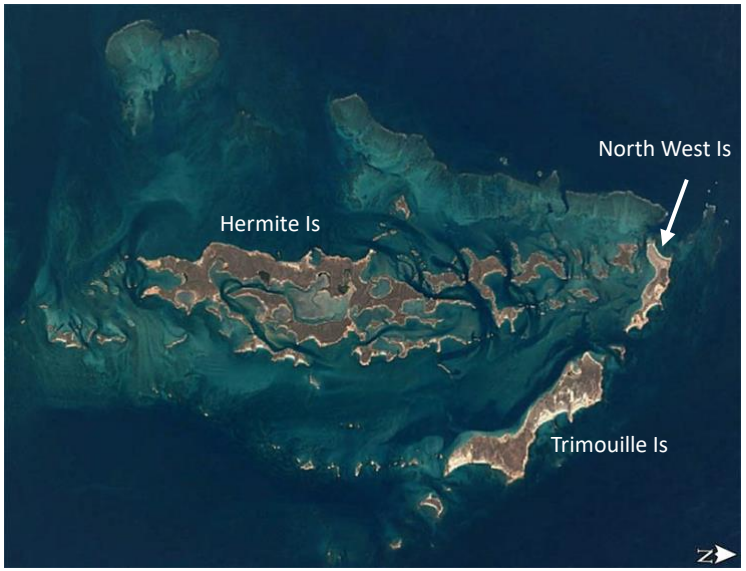
B

うみへび

海へびはたくさんあり、命綱に巻きついたり、又三ツあるグラスめがけてやってきます。真珠貝のある場所には、蛇はたくさんいて、多いときには一日何十匹もみかけます。みんな毒を持っているらしいが、特に小さいのは猛毒をもっていると聞きましたが、悪いことはしません。


此の島はあまり見ないなく行きましたが、づと沖の島です
地方から二〇〇マイル位離れています
North West I.
Trimouille I.
S. East I.
W
E
S
N
いたりまおがいき大は貝
Dermtee I.
砂浜は真白く中に鉄分があれば直ぐ
あかり木等は全くなく遊ぶのにはとても良い島
ですが真珠貝は極く少い
モンテベールアイラン
アマリ見ナレ
時によると清州政府は後日この島で原爆の
実験をしたとのこと
バリーアイラン
地方たべは
S.E.BY.E.コース
(モンテベール アイランド)

26 モンテベール諸島



Montebello Islands

①モンテベール・アイランド
(Montebello Islands)

② South East Is

③ Trimouille Is

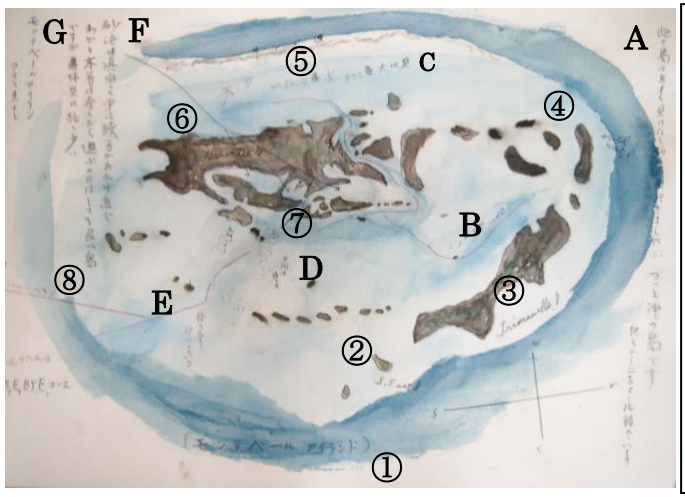
④ North West Is

⑤サンゴ礁（Coral reef）

⑥ Hermitee Is（Hermite Is）

⑦大きなリーフ（Big reef）

⑧バローアイランへ
(to Barrow Is)



A
この島はあまり貝はなく、私は二回行きましたが、ずーと沖の島です。地方から二〇マイル位離れています。

B
大きな飛び石あり

C
貝は大きいが、あまりない。

D
干潮は通れず。

E
棒を立てて印にしている。

F
砂浜は真白くて、中に鮫等があれば、直ぐわかり、木等は全くなし。遊ぶのにはとても良い島ですが、真珠貝は極く少ない。

G
モンテベール・アイラン、あまり貝なし。
（噂によると、濠州政府は後にこの島で原爆の実験をしたとのこと）

A We could not find many pear shells in the islands. I went there twice. It is far off the coast, 20 miles offshore.

B Big stepping stone

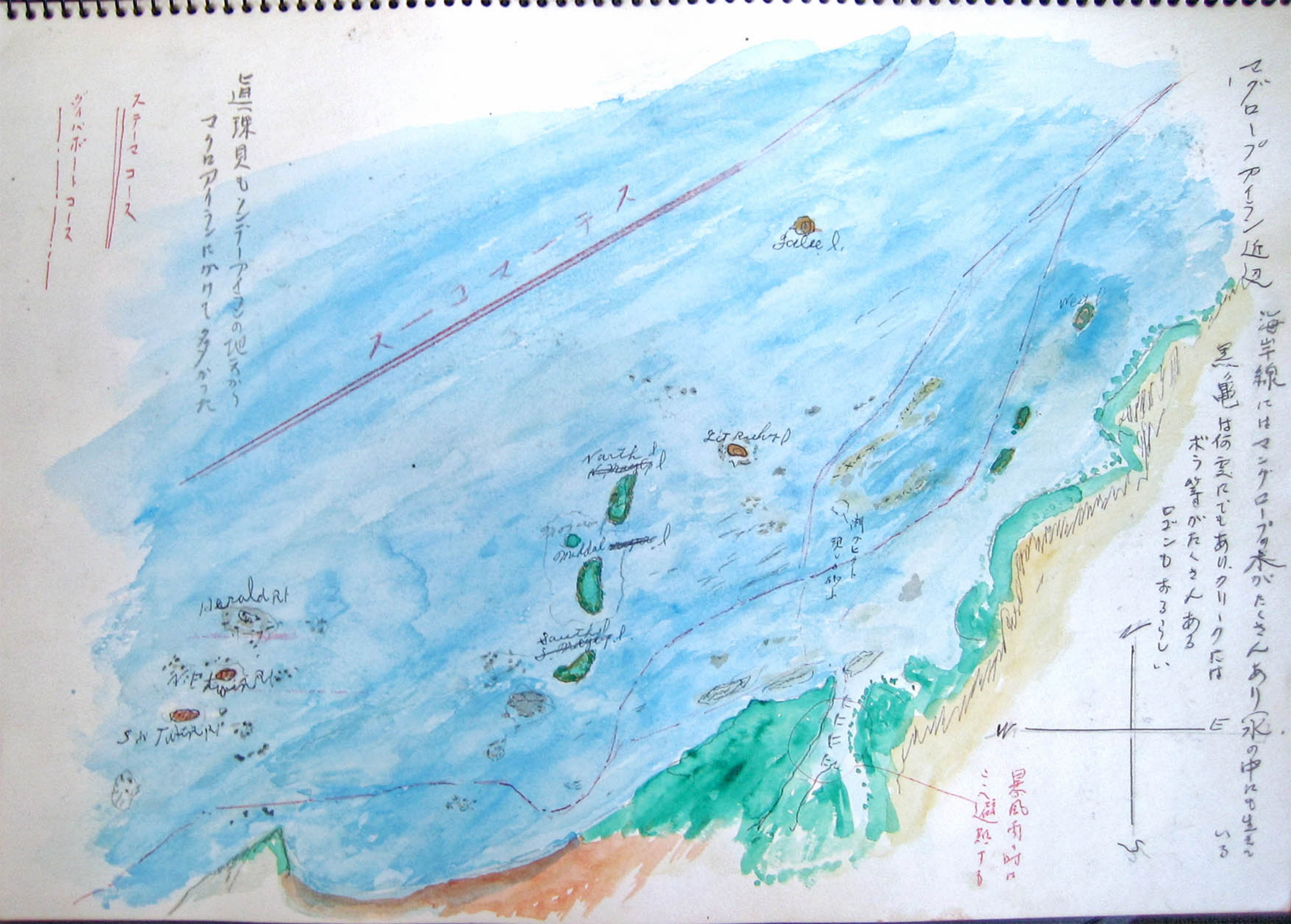
C The shells are big, but not many can be found.

D We cannot pass through at low tide.

E A pole is put up to mark the spot.

F The beach is pure white, and if there are sharks, we can see them immediately. There are no trees. It is a very good island to enjoy ourselves, but there are very few pearl shells.

G Montebello Islands: there are not many pearl shells. I heard that the Australian government carried out atomic bomb testing later on in the islands.


セグロープアイランド近辺
海岸線にはマングローブの木がたくさんあり(水の中にも生えている
黒い亀は何処にでもありクリークにはボラ等がたくさんあるワニもあるらしい
スーコマーテス
False I.
West I.
Lit Ruhat I.
North I.
Middel I.
South I.
Harald Rt
Lowe Rt
S.W. Tuberini
洲のヒト現い砂上
たたたた
暴風雨時ここ避難する
這珠貝もシンデーアイランドの地方からマクロアイランドにかけて多かった
ステーマコース
ヴィバボートコース
E
W
S

Mangrove Islands

① Weld Is

② Joelee(False) Is

③ Little Rocky Is
Mangrove Islands

④ North Is

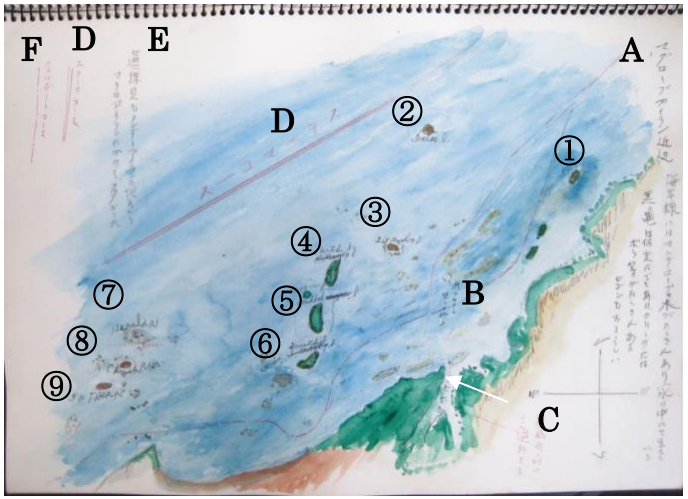
⑤ Middle Is

⑥ South Is

⑦ Herald Is

⑧ NE Twin Is

⑨ SW Twin Is



27 マングローブアイラン近辺

A マングローブアイラン近辺。海岸線にはマングローブの木がたくさんあり、水の中にも生えている。黒亀は何処にでもあり、クリークにはボラ等がたくさんある。ロゴンもあるらしい。

B 潮が引くと現れる砂山

C 暴風雨の時はここへ避難する。

D ステーマコース

E 真珠貝もサンディーアイランの地方からマグロアイランにかけて多かった。

F ダイバーボートコース

A Near the Mangrove Islands. Many mangroves grow on the coast, and they also grow in the water. Black turtles are found everywhere, and many mullets and other fish can be found in the creek. Dugongs may be found.

B A sandbank which comes out at low tide

C We refuge here during a storm.

D Steamships' course

E There were many pearl shells in the area from Sandy Island to the Mangrove Islands.

F Luggers' course

A
ビーゼンにはお金さんと言ふ日本人のおばあさんが住んでいた
夫は事業人で子供(多分四人)男三達オ女三三達オ位で四人度位
遊びに行って行方不明になった

羊毛を出す時期には何日も船が泊っていた
桟橋には四角い型の羊毛がたくさん
積まれていた

羊毛をたくさん積出す

ビーゼンのクリークには
別の白人会社で
五隻あり
船員も大地町の
人です

私達は此の人達と
働く時は大変
一緒に働きますが
此度の港へは入らず
コーセキ(コサック)へ
帰ります

コーセキから
カヌボートが来た
時や買い物をする
ときは此度へ寄船
することもある

水取り場は砂地を
掘ると真水が出る
のでバイキ(桶)を使う五地
で造った袋で一斗位入る
に詰めて船まで運ぶ

ビーゼンの会社は大地町の
西地七蔵さんがヘッドダイベーです

28 ビーゼン（オンスロー）の港

Beadon & Onslow

① オンスロー古い桟橋
（Onslow old jetty）

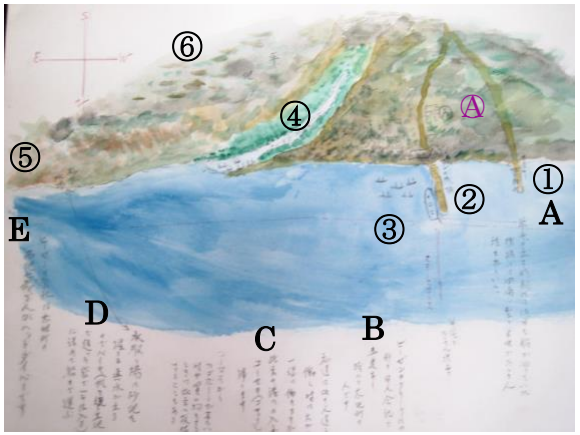
② ビーゼンの桟橋（Beadon jetty）

③ ステーマコース（Steamships' course）

④ ビーゼンのクリーク（Beadon Creek）

⑤ 砂地の水場
（Fresh water site on beach）

⑥ 平地（Flatland）



A

Ⓐ ビーゼンにはお金さんと言う日本人のおばさんが住んでいた。夫は馬来人で子供（多分四人）男二十五才、女二十三才位で二度ほど遊びに行って御馳走になった。羊毛の出す時期には何日も船が止まっていた。桟橋には四角い型の羊毛がたくさん積まれていた。

B

羊毛をたくさん積みだす。

C

ビーゼンのクリークには別の白人会社で五隻あり。ほとんど太地町の人です。私達はこの人達と働く時は大がかりに一緒に働きますが、ここの港へは入らず、コーセキ（コサック）へ帰ります。コーセキからカーゴボートが来ない時や買い物をするときはここへ投錨することもある。

D

水取り場は砂地を掘ると、真水が出るので、バイキ（帆を造る生地で造った袋で一斗位入る）に詰めて船まで運ぶ。

E

ビーゼンの会社は太地町の西池七蔵さんがヘッドダイバーです。

A

A Japanese woman called *okin-san* lived at Beadon Bay. Her husband was Malay with children (perhaps four children), a 25 year-old boy and a 23 year-old girl. I visited twice and was treated to meals. Ships were moored for several days during the season when wool is loaded. A lot of bales of wool were piled at the jetty.

B

A lot of wool is shipped.

C

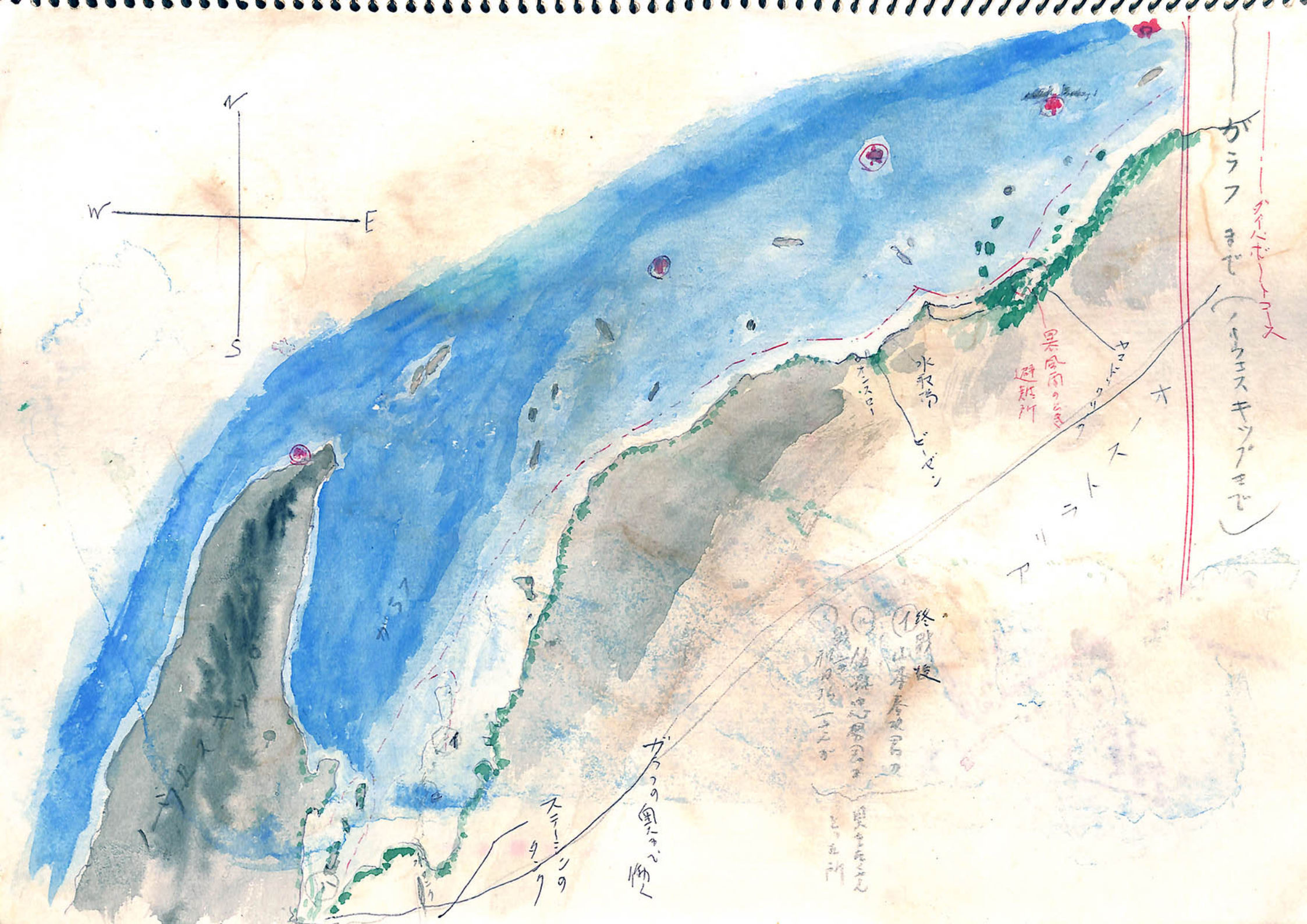
At the creek of Beadon, there are five luggers owned by a white man's company. Most crews are from Taiji [town]. We work with the crews in a large-scale operation, but we go back to Cossack without calling at the port. We occasionally anchor here when the cargo boat does not come from Cossack or when we do shopping.

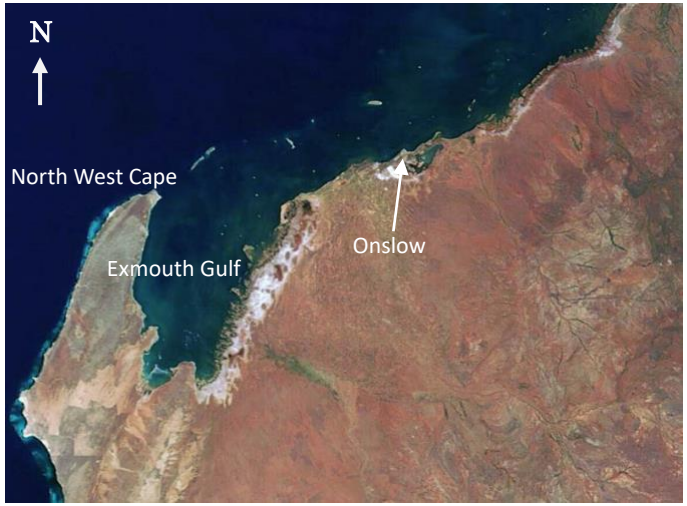
D

When we need water, we dig sand, and get fresh water. We fill fresh water buckets (18 litre bags made of canvas) and carry them to the lugger.

E

At the company of Beadon Bay, Mr Shichizo NISHIIKE from Taiji is the head diver.


N
W
E
S
ガイドボートコース
ガラフ
まで
ノーウエスキップまで
ヤマトクック
異風雨の為
避難所
水取場
ビーゼン
オ
ス
ト
ラ
リ
ア
終戦後
ガラフの角まで
ステーションの
タク



Exmouth Gulf

① ダイバーボート・コース
（Luggers' course）

② ヤマドリクリーク
（Yammadery creek）

③ 水取場
（Site getting fresh water）

④ オーストラリア（Australia）

⑤ ビーゼン（Beadon）

⑥ オンスロー（Onslow）

⑦ ステーション・タンク
（Fresh Water Tank Station）

⑧ ガラフ（Exmouth Gulf）

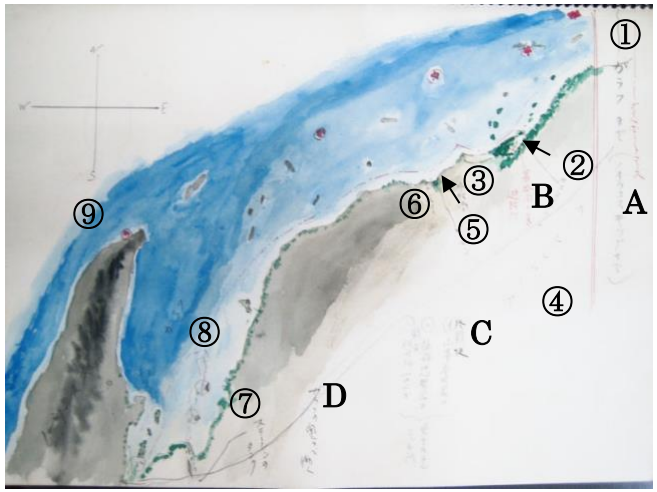
⑨ ノーウェスキップ
（North West Cape）

A Gulf, North West Cape

B Refuge site for a heavy storm

C
After the World War II
Mr Haruji YAMAMOTO, Mr Tadao IIMORI,
Before the WW II
Mr Koichi WADA.
: Places where they collected a lot of pearl shells.

D We work in the inner part of the Gulf



29

コサック基地からの最西端漁場エクスマウス湾

A
ガラフ（ノーウェスキップ）まで

B
暴風雨のときの避難所

C
終戦後
山本春治君
飯森忠男君
戦前
和田弘一さん
貝をたくさん取ったところ

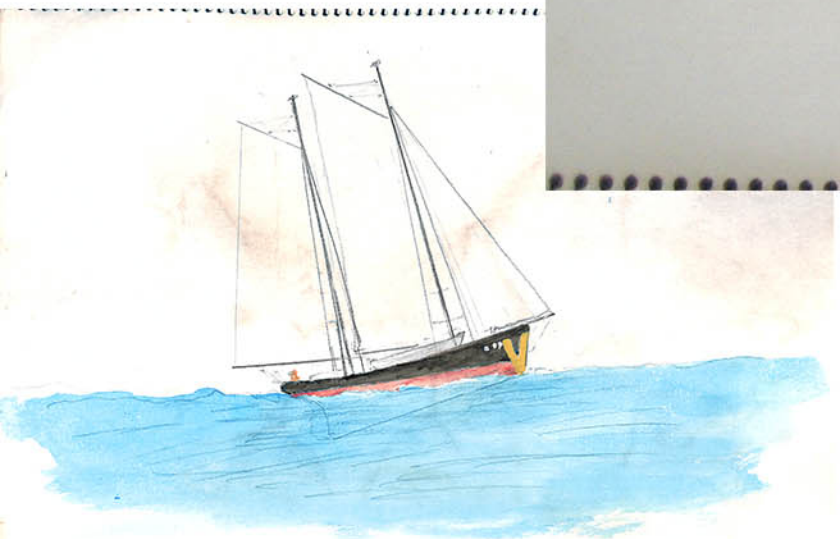
D
ガラフの奥で働く

ポールセールフィシングボート 村松商店ノ元船
(ダイバーボート)
船には アエンバラスといふ重いおもしを積んでいるので
少々傾いても中々転覆しない
C.19

井デタ号（十九号）

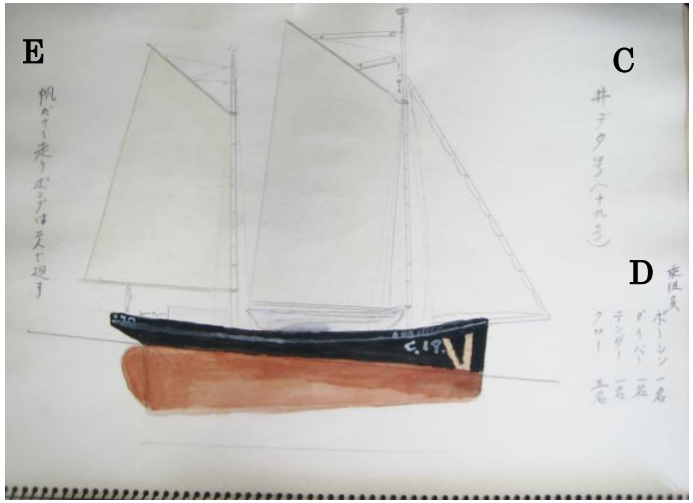
乗組員
ボーシン　一名
ダイバー　一名
テンダー　一名
クロー　五名

帆だけで走り ポンプは二人で廻す



30 村松商店の元船

漁場へ向かうラガー



A ポールセールフィッシングボート村松商店の元船（ダイバーボート）

B 船にはアエンバラスという重いおもしを積んでいるので、少々傾いても転覆しない。

C イデタ号（一九号）

D 乗組員
ボーシン　一名
ダイバー　一名
テンダー　一名
クロー　五名

E 帆だけで走り、ポンプは手で廻す。

A Pole sail fishing boat owned by Mr Muramatsu (Lugger)

B The lugger does not capsized even if it is tilted, owing to the ballast called ‘*aen barasu* [zinc ballast]’ it carries.

C *Editha*（No.19）

D Crew members: 1 boatswain, 1 diver, 1 tender, and 5 crews

E The lugger runs only with sails, and the pump is operated manually.

船は水深六尺以上ある、又船の底にはアエンバラス(四角い重い石)を積んでいるので少々傾いても仲々転覆しない

大正拾四年頃は船にスクリューの付いたのは一隻もありませんでしたので皆帆走しておりました

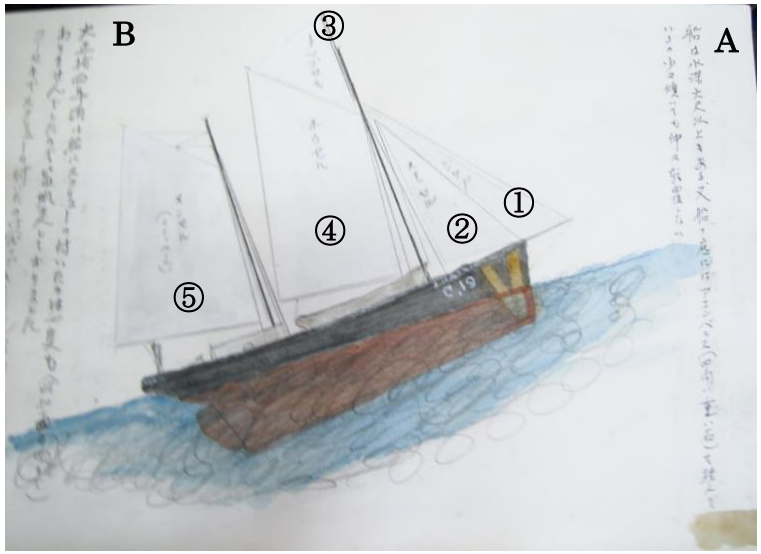
コーセキでスクリューの付いたのは(ポンプもインジン)昭和十四年頃からです

(昭和十四年頃まで)

31 村松商店の船（1）

船尾で滑車を使う舵の操作

① ジップ（Jib sail）
② スモル・セル（Small sail）
③ トップセル（Fore topsail）
④ ホウセル（Foresail）
⑤ メンセル（Mainsail）



A

船は水深六尺以上もある。又、船の底にはアエンバラス（四角い重い石）を積んでいるので、少々傾いても中々転覆しない。

B

大正十四年頃は船にスクリューの付いたのは一隻も（昭和四年頃まで）ありませんでしたので、皆帆走しておりました。コーセキでスクリューの付いたのは（ポンプもインジン）昭和四年頃からです。

A

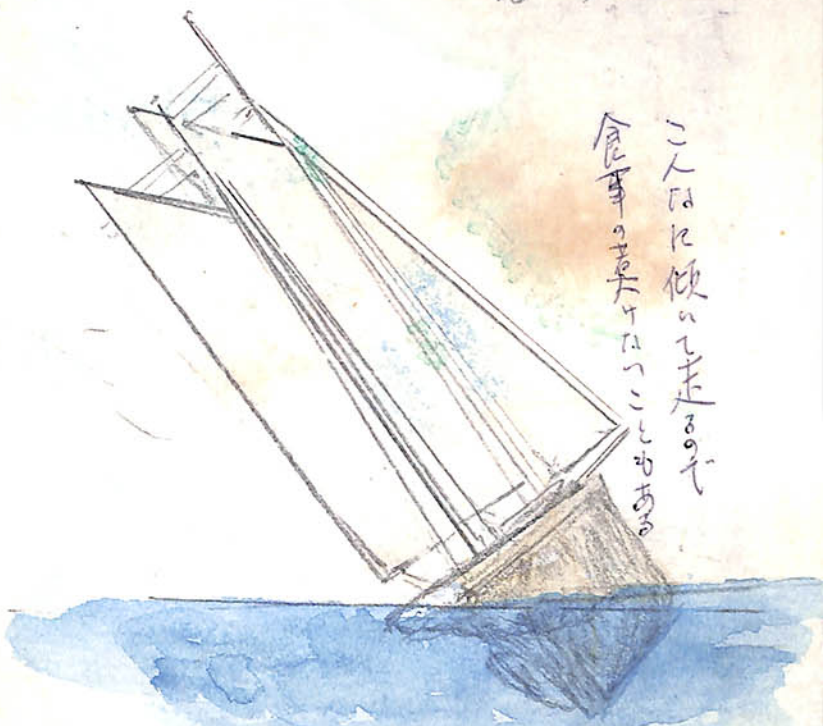
The draft of the lugger is more than 6 *shaku* [about 2 metres]. The lugger carries the ballast called '*aen barasu*' (rectangular stone), so it does not capsized even if the ship is slightly tilted.

B

All luggers until 1925 were sailboats, because there were no luggers with engines and machinery pumps until around 1929.

北濠州と西濠州は潮の干満の
烈しい変で大潮になると大きな
汽船(何万トン)も干上ります

帆だけで走る面白さは何とも
たとえやうがない



こんなに傾いて走るので
食事の喫ケないこともある

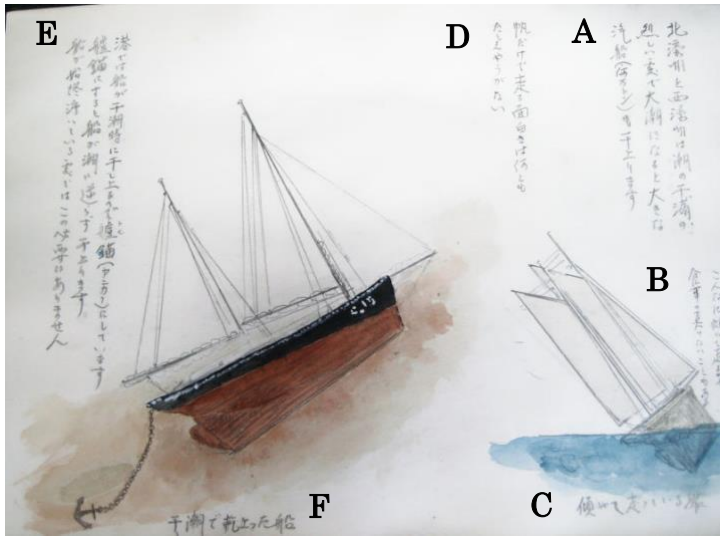
傾いて走っている船

港では船が干潮時に干上るので艦錨(トモアンカー)にしています
艦錨にすると船が潮に逆らず干上ります
船が船尾浮いている変ではこの必要はありません

干潮で乾上った船

32 村松商店の船（2）

大潮時の干上がった砂浜でのダイバーボートのカバ磨り（干潮時に舷側及び船底に貼られた真鍮板（銅板）を掃除する）



A 北濠州と西濠州は潮の干満が烈しい所で、大潮になると、大きな汽船（何万トン）も干上がります。

B こんなに傾いて走るので、食事の炊けないこともある。

C 傾いて走っている船。

D 帆だけで走る面白さは何ともたとえようがない。

E 艫錨にすると、船が潮に逆らわず、干上がります。船が始終浮いている所では、この必要はありません。

F 干潮で干上がった船

A The tidal variation is very large in northern Australia and Western Australia. Even a big steamship (tens of thousands of tons) can be beached during the spring tide.

B Sometimes the boat sails so tilted, we cannot cook on the boat.

C A boat sailing tilted

D The fun of sailing is quite indescribable.

E The boat drops the stern anchor in the harbour because it beaches at low tide. The stern anchoring allows the boat to go with the tide when it beaches. It is not necessary to do so where the boat always floats.

F A boat beached at low tide

ダイバー
ヘルメット
空気を送ぐ
クリップ
カスレット
ライフライン
鉛
潜水ドレス
鉛の十字
ハンゴ
この梯子でダイバは上り下りする
ブイ ポンヤエ

33 潜水服

潜水に向かうダイバー

① ダイバー（Diver）-

② ヘルメット（Helmet）

③ 空気を抜くクリップ
（Clip to discharge air）

④ カスレット　（Corselet）

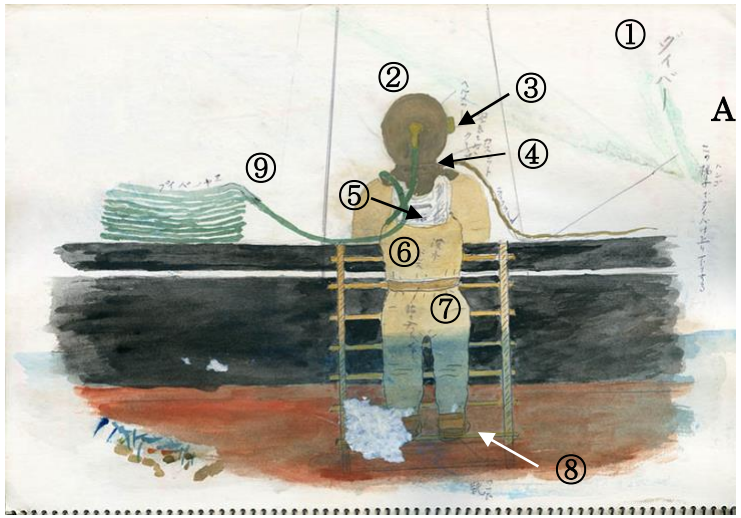
⑤ 鉛　（Lead weight）

⑥ 潜水ドレス（Diving dress）

⑦ 鉛の入った帯　（Belt with lead weight）

⑧ 鉛のついた靴（Shoes with lead weight）

⑨ エヤーパイプ　（Air pipe）



A

潜水用ヘルメット
下部がカスレット（Corselet）、
首周りに命綱（Lifeline）

Lugger 内の炊事場

縄梯子を使って船を上り下りする

A

この梯子（はしご）でダイバーは上り下りする。

A

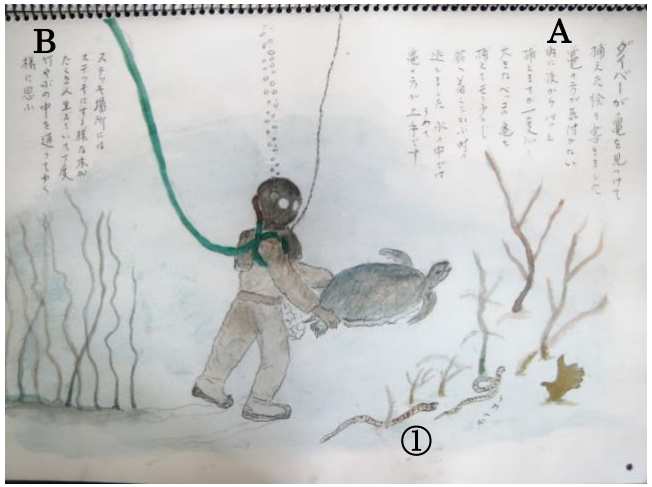
Divers get up and down this ladder.

ダイバーが亀を見つけて
捕えた絵を書きました
亀の方が気付かない
内に後からパッと
捕えますが一度私も
大きなベッコウ亀を
捕えてモー少しで
船へ着くといふ時に
逃しました 水の中では
亀の方が上手です
ステッキ場所には
ステッキにする様な木が
たくさん生えていて丁度
竹やぶの中を通ってゆく
様に思ふ
うみへび

34 潜水中のウミガメ猟

習作図（étude drawing）

① うみへび
（Sea Snake）



A

ダイバーが亀を見つけて捕えた絵をかきました。亀の方が気付かない内に後ろからパッと捕まえますが、一度大きなベッコウ亀を捕まえて、もう少しで船へ着くといふ時に、逃しました。水の中では亀の方が上手です。

B

ステッキ場所には、ステッキにするような木がたくさん生えていて、丁度竹やぶの中を通ってゆくように思う。

A

I draw a picture of a diver finding a turtle and catching it.
In order to catch a turtle, you need to grab it from behind before it notices you. Once I caught a large Hawksbill turtle, but it escaped just before I reached the boat. In the water, turtles have upper hand than us.

B

So-called Stick Point is covered by vegetation which looks like little stick-like plants and I feel as if I am walking through a bamboo shrub.

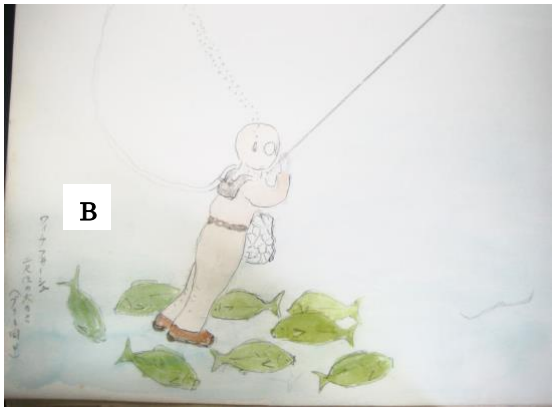
ウミガメの卵取り

ダイバーの周りにたくさん魚が集って来て濁って困ることが
度々あります（カンパチ等）ワイナフキシ（大きさは三尺位）
刺身にすると おいしい

ワイナフキーシ
二尺位の大きさ
（ブリと同じ）

35 ダイバーと魚

豪州北部海域のフエフキダイ（Snapper）
とカンパチ（Amberjack）



A

ダイバーのまわりにたくさんの魚が集って来て、濁って困ることが度々あります。（カンパチ等）、ワイチフィッシュ（大きさは三尺位）刺身にするとおいしい。

B

ワイチフィッシュ
二尺位の大きさ（ブリと同じ）

ケンケン釣りによるオニカマス（Barracuda）

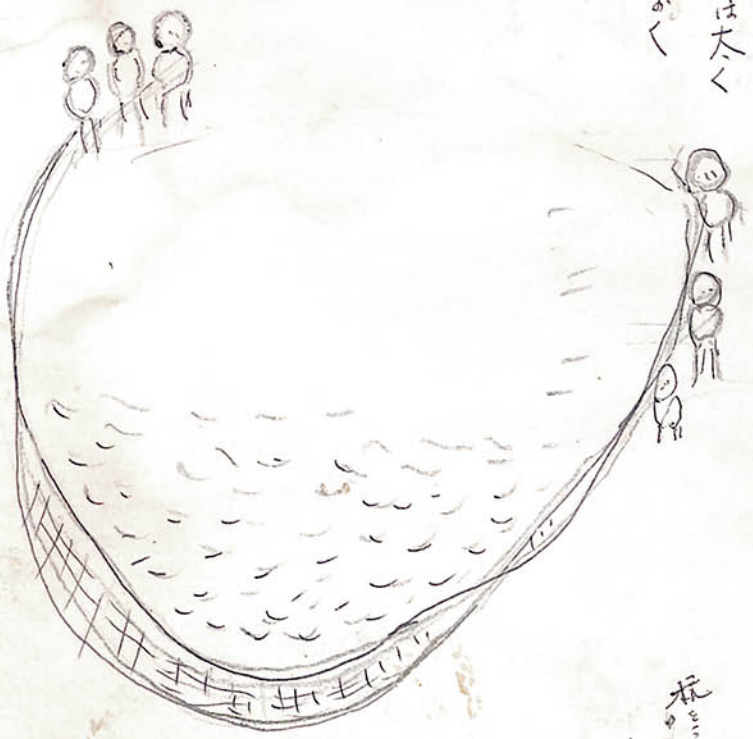
サワラ（Spanish mackerel）

A Divers occasionally have some problems as too many fish, such as almost one metre-long amberjacks, swim around him and make the water cloudy. They taste nice when we eat them as *sashimi*.

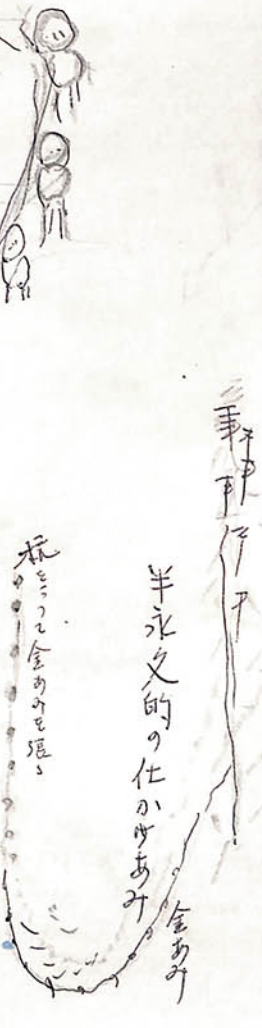
B About 70 cm long (about the size of a yellowtail)

潮時を見計ってボラ（イナの大きな）の引き網にゆき大きな群（ナムラ）が来ると網でかこんで捕え
だんだんよせて行って（魚を）ふ舟に引き揚げます。うまく行くと ボラの大群が入り一度網で
ふ舟に半分程もとります

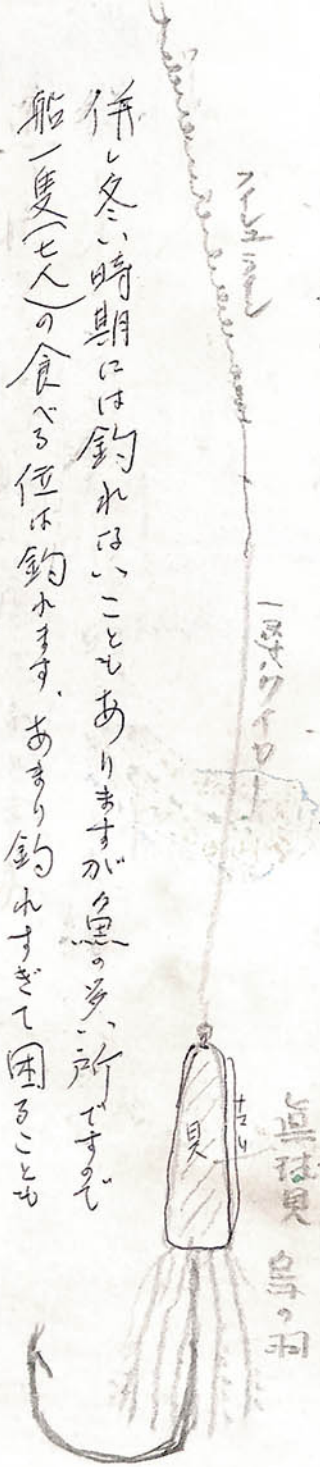
白人等はこうして捕っている



網は六番位で引き紐は太く
常によく補習しておく



ダイバーボートが帆走するときはケン〳〵言ふ 擬似針の釣を投げて船で引張って走りますが
シビ、カツヲ、サワラ、カンパチ（ワイナフイシュ）等を釣って直ぐ刺身にしたり煮付けに
したり又一夜塩にしたり干物にしたりします



併し冬の時期には釣れないこともありますが魚の多い所ですので
船一度（七人）の食べる位は釣れます、あまり釣れすぎて困ることも
ありません

餌は釣を投げずに走ります

えさづりはクリーク（上げ潮）に釣りに行きますと、スジキ、ボラ等がよく釣れます
船でのえさづりは何時でも チヌ、クエ、アビ、チャイナフィシ グイ〳〵 など夕食等に間に合
せてわけなく釣れます（前の時代はテグス等はまだ出て居ませんので ワイヤーの細いのをつけて
釣りましたが良く釣れました（人造テグスだったら面白く釣れるだろうと思います）

36 フィッシング

A We go to catch mullet with a seine net when the tide is right. When a large school of fish come, we catch them with a net and gradually pull the net to the dinghy to haul them in. When we are lucky, a large school of mullet is caught and one catch can fill half a dinghy.

B We use the No 6 net and the pulling ropes are thick and always well maintained.

C Semi-permanent fish net setting. White people catch fish in this way.

D When a lugger sails, we throw in lures, which are called "*ken-ken*". When we catch tuna, bonito, Spanish mackerel, and amberjack, we slice them into *sashimi*, cook them with soy sauce, and salt them to dry overnight. Sometimes, we cannot fish much during the winter. As there are plenty of fish in the area, enough fish for the boat crew (seven men) can be caught. There are times that we catch too many. Then we sail without throwing lures in.

E We go to a creek for bait fishing. When the tide is coming in, we can catch plenty of barramundi and mullet. It is easy to catch various fish for dinner with baits from the boat, such as black sea bream, rock cod, trevally, chinafish and fourstriped grunter that the Japanese call *gui-gui*. We did not have fishing gut then, so we used thin wire instead. It was easy to catch many fish. (It must be fun to use artificial fishing gut.)

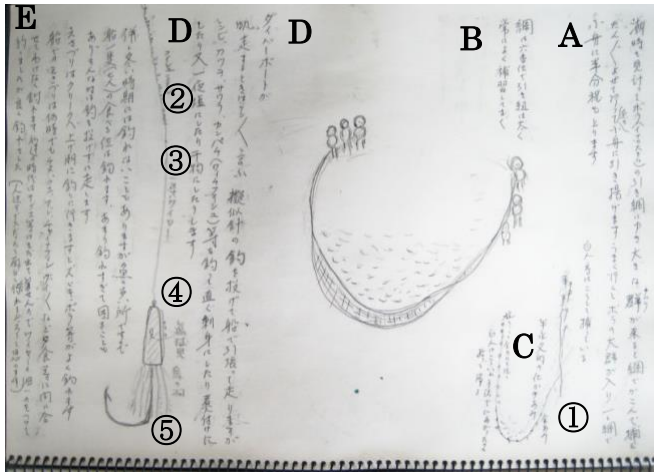
① 金あみ（Metal net）

② フィッシュライン（Fishing line）

③ 一尋はワイヤー（A fathom of wire）

④ 真珠貝（Pearl shell）

⑤ 鳥の羽（Bird feather）



A

潮時を見計ってボラ（イナの大きな）の引き網にゆき、大きな群（ナムラ）が来ると、網でかこんで捕え、だんだんよせて行って魚を小舟に引き揚げます。うまく行くと、ボラの大群が入り、ひと網で小舟に半分程もとります。

B

網は六番位で、引き紐は太く、常によく補修しておく。

C

半永久的な仕かけあみ。白人はこういふ方法で干上がったものを拾って帰る。白人等はこうして捕っている。

D

ダイバーボートが帆走するときはケンケンと言う疑似針の釣を投げて船で引張って走りますが、シビ、カツヲ、サワラ、カンバチ（ワイチフィッシュ）等を釣って、直ぐ刺身にしたり、煮付けにしたり、又一夜塩にしたり、干物にしたりします。併し、冬の時期には釣れないこともありますが、魚の多い所ですので、船一隻（七人）の食べる位は釣れます。あまり釣れすぎて困ることもあり、そんな時は針を投げずに走ります。

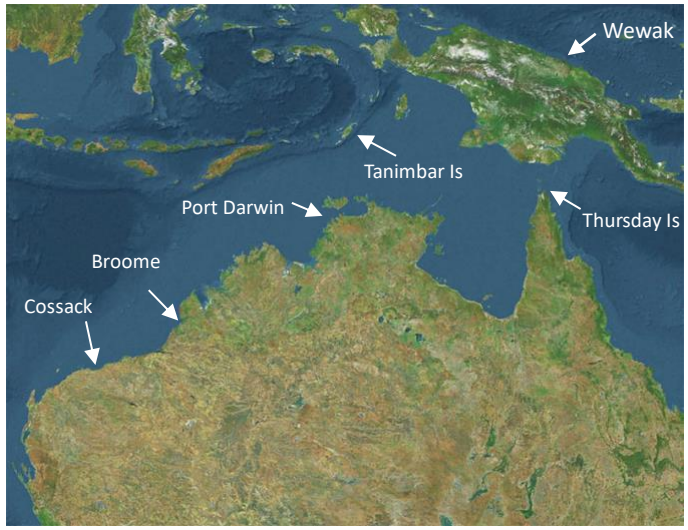
E

餌づりはクリークへ、上げ潮に釣りに行きますと、スズキ、ボラ等がよく釣れます。船での餌づりは何時でもチヌ、クエ、アジ、チャイナフィッシュ、グイグイなど、夕食等に間に合わせて、わけなく釣れます。私達の時代は、テグス等はまだでていませんので、ワイヤーの細いのをつけて釣りましたが、良く釣れました。（人造テグスだったら、面白く釣れるだろうと思います。）

昔のハンドバッグ

メビー号（船を大きくして日本製のインジンを据えた強んど移送船）で（名護屋）を発ち、（船長）丸山（インドネシア）と
（船長）三人で日本人（使乗者）二名南洋人十名位を乗せて海図もないのに見当（ケントウ）で南洋へ
渡り（タネンバル）の〇島に到着 乗せていた日本人とインドネシヤ（タネンバル）人を揚げて又、タネンバル人を
十四五名使って四五日して オーストラリアに渡り天候が悪いので島で四五日あって
ポートダーウィンに帰りました 世の時、親子（村松さん）は賞与として月給二ヶ月分を（10ポンド）
私にくれました 遅れて帰ったタネンバル人は汽船でコーサックへ送りました（吉田の意です）

37 タニンバル諸島



Arafura Sea, Timor Sea & Indian Ocean

① ウェワク（Wewak）

② ニューギニア（New Guinea）

③ 木曜島（Thursday Is）

④ 800 マイル(800 nautical miles)

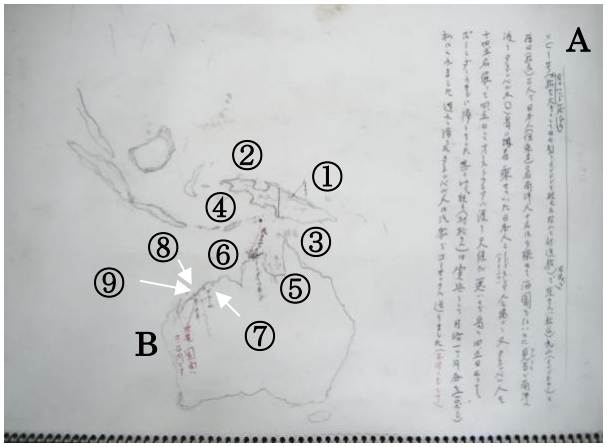
⑤ カーペンタリア湾（Gulf of Carpentaria）

⑥ ポートダーウィン（Port Darwin）

⑦ ブルーム（Broome）

⑧ ポートヘッドランド（Port Headland）

⑨ コーセキ（Cossack）



A

A boat called *Mavie* was a newly built boat larger than an old handle pump boat, with a Japanese type of engine, and operated by three Japanese: Mr Higashi (ship's doctor), Mr Maruyama (engineer) and myself (captain). Three of us with two Japanese passengers and about ten people from the South Sea headed to the South Sea without any charts. We reached Tanimbar Island where two Japanese and Indonesians from the island got off the boat. We hired about 14 to 15 islanders and reached Australia in four to five days. Since the weather was not good, we stayed on the island for four to five days and returned to Port Darwin. Our boss (Mr Muramatsu) gave me one month wage (ten pounds) as a bonus. The Tanimbar Islanders who travelled with us were sent to Cossack (written in red line) by a steam ship.

B

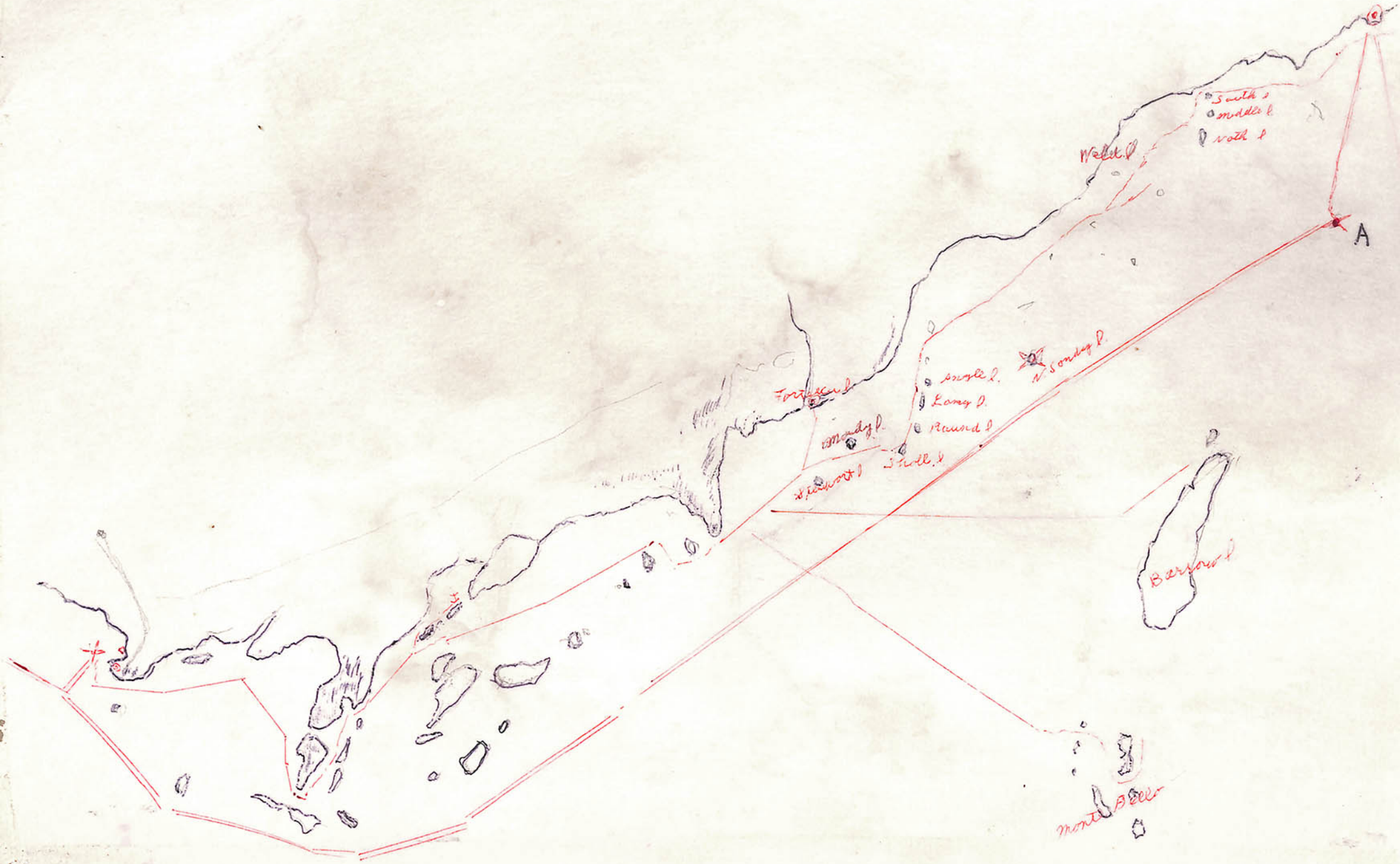
The end map indicates this part.

A

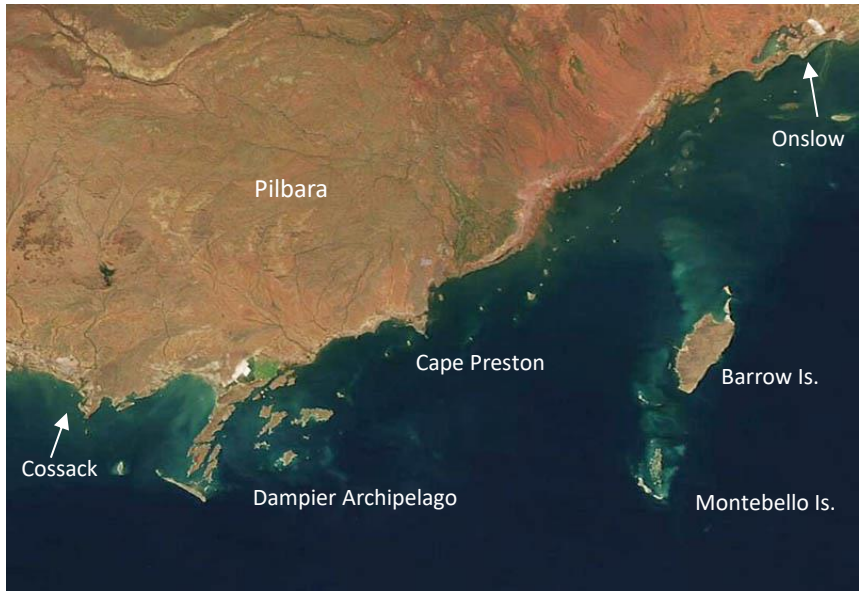
メビー号（昔のハンドルポンプの船を大きくして、日本製のインジンを据えた新造船）で、名義は東（船医）、丸山（インジネアー）、と藤田（船長）三人で、日本人（便乗者）二人、南洋人十名位を乗せて、海図もないのに見当で南洋へ渡り、タネンバル（タニンバル）の島に到着。乗せていた日本人とインドネシア（タネンバル）人を揚げて、又タネンバル人を十四、五名僱って、四・五日して、オーストラリアに渡り、天候が悪いので、島へ四・五日おって、ポートダーウィンに帰りました。その時、親方（村松さん）は賞与として月給一ケ月分（一〇ポンド）を私にくれました。連れて帰ったタネンバル人は汽船でコーサックへ送りました（赤線の處です）。

B

末尾の図面はこの区間です。


A
Well I.
South I.
middle I.
north I.
Fortescue I.
Monday I.
Hermit I.
Shell I.
Round I.
Lamy I.
Bagle I.
N. Sunday I.
Barrow I.
North Beach

38 コサックからエクスマウス湾までの操業航路



Pearl Shell Fishing Ground from Cossack to Onslow

① South Is
Middle Is
North Is

② Weld Is

③ Barrow Is

④ Montebello Is

⑤ North Sandy Is

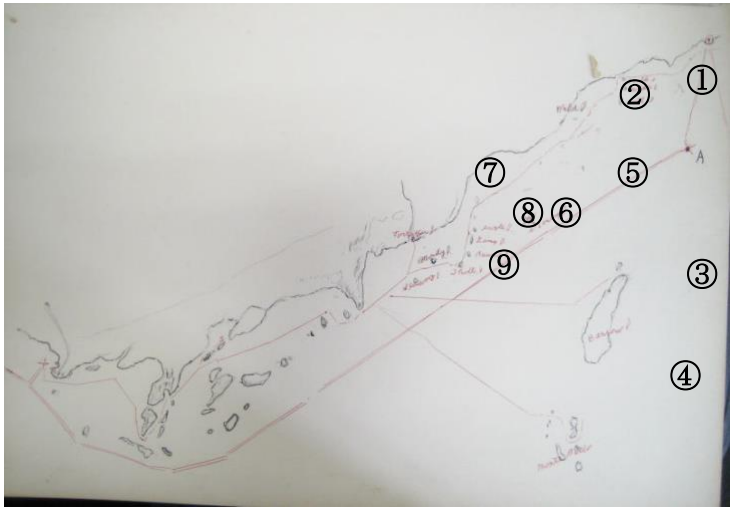
⑥ Angle Is
Long Is
Round Is
Sholl Is

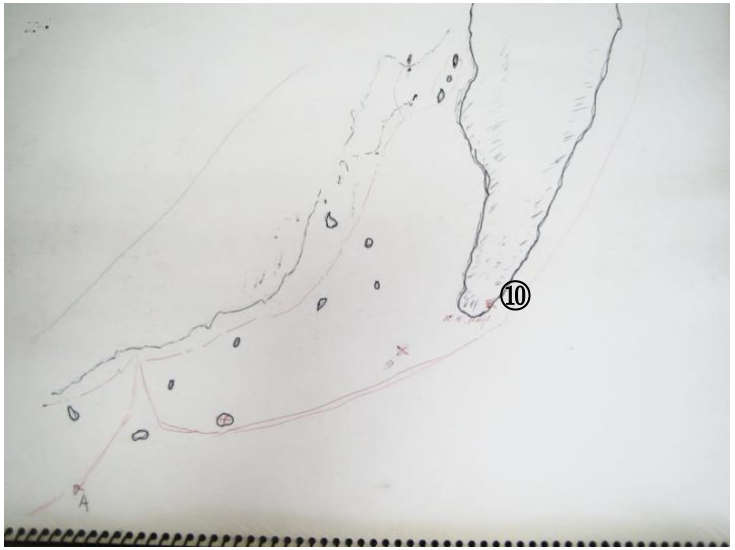
⑦ Fortescue creek

⑧ Mardi Is

⑨ Steamboat Is

⑩ North West Cape





村松次郎商店（コサック市）（藤田健児在留当地の想い出）

エデタ　ノーザムスワロー
ダルシー
ケルビー
メビー
グレシー
ルビー
コトロップ
リデア　5　23、21、28、7　8　22、19

（自由渡航）
岡本、
浜兵蔵

（自由渡航）
船大工
東　菊一
角太一郎
●は死亡した人（昭和五九年ごろ）

●谷　七蔵　芝之音松

ミステマカイの預り船

昔は鋪をやって働きダイバが歩いて見を拾ったかが行った。あの頃は引っぱりが始まった

村松の預り船（白人が預けた）

マース　20　ジョロン型　小さい船

ブロームから来た船でテダ、ダイバー二人共四十才位、貝はあまりとれない。

私が日本に来てから

●東孫太郎
●木本宗五郎
●奥　実蔵
●高田宗花
●辻　増太郎
●西萩三之助
●和田亀作
●飯森忠男
●渡瀬宗五郎
●山本春治
●和田和夫
●五味音松
●塩見

●和田弘一
●次辰二郎
●神竹　正次
●和田　勇
●丸山秋之助
●飯森　逸
●岩本宗治
●藤田正一
●丸山清代
●藤田正治
●宮本力松
●須加夫佐一郎
●漁野幹夫

●瀬上貫一
●藤田健児
●西萩房夫
●根木重治
●萩中宗吉
●上根士郎
●佐藤安太郎
●名引清五郎
●滝口常
●洞地安次郎
●田中作一
●南吾一
●加藤文男
●庄司源門
●庄司富平
●寺本春治
●大和一郎
●和田文
●前田慧
●滝口円治
●小山房夫

私の持った頃は十トン取れた一流ダイバ平均七トン帰る頃は十トン以下は話はなかった昔はあまり働かなかった

同じ船で五十トン位、村松から食糧を積んで来て、貝を持って帰る

カゴポート

●チャーリー（日本人だがこう呼んでいた）
●漁野太郎太夫
●東彦五郎
●和智永治
●セールメーカー　一人（自由渡航）

和田弘一さん五十トンあって特別賞状があった位だ

ミステタ改造後インジンボートとなる（テダ新平、ブローム式で長く続けため）

スポーツスダイバー　セリングダイバー

（忘れ貝いぶせない）藤田健児は翌年ハンポンス（コトロップ）に来る

井テダ翌年からは飯森中心男が来る

不明（ケルビーのダイバ）

●丸山（リデアのダイバ九州）
●本田（メビーのダイバ九州）

在ブローム市

（左）自由渡船（池の山の人）

ブロームの大暴風雨の時ブロームで七十人位死んだ　そうたがコーロキは暴ってい制合と静かだった　私は西原州の暴風雨の時は北に居り北原州の暴風雨の時は西原州に居て助かった

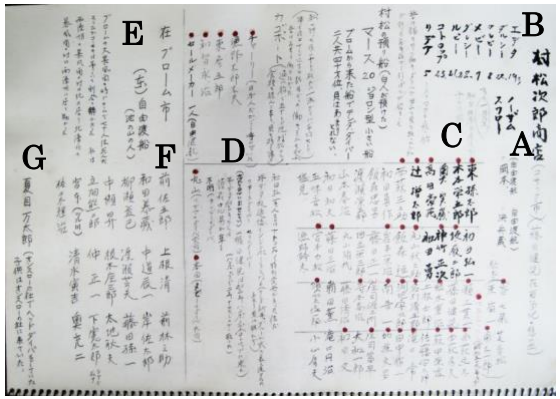
前佐五郎
和田泰蔵
柳瀬益己
中瀬昇
立畑能三郎
宮本（ツル川）
佐々木輝治

上根清
中道辰一
渡瀬芳夫
根木庄三郎
仲　正一
清水寅吉

前林之助
岸佐太郎
藤田孫一
太地秋夫
下宮太郎（シケで死ナ）
奥充二

夏目万太郎（オンスローの社でヘッドダイバをしていた子供はオンスローの社に来ていた。）

39 村松次郎商店



A

村松次郎商店（コサック市　藤田健児在留当地の想い出）

B

イデタ19号、ダルシー22号、クレビー8号、メビー7号、グレシー28号、ルビー号21号、コトロップ23号、リデア5号（ミステ、マカイの預り船）、ノーザム、スワロー。

昔は錨をやって働き、ダイバーが歩いて貝を拾ったが、私が行ったこの頃から引っ張りが始まった。

村松の預り船（白人が預けた）

マース20　ジョロン型　小さい船

ブロームから来た船で、テンダ、ダイバー二人共四十才位。貝はあまり取れない。

（私の言った頃は十トン取れば、一流ダイバー、平均七トン。帰る頃は、十トン以下は駄目だった。働き方がちがう。

カゴボート（通い船で五十トン位。村松から食糧を積んで来て、貝を持って帰る。）

●チャーリー（日本人だが。こう呼んでいた）、●漁野太郎太夫、●東彦五郎、●和智永治、●セールメーカー

一人（自由渡航）

岡本（自由渡航）、浜兵蔵（自由渡航）

船大工（●谷七蔵、芝音松、東菊一、●角太一郎）

●印は死亡した人（昭和五十九年マデ）

C

●東孫太郎	和田弘一	●瀬上貫一	●西萩文太	
●木本栄五郎	●坂辰二郎	藤田健児	●西萩房夫	
奥　実蔵	●神竹正次	●根木重治	●萩中栄吉	
●髙田亮蔵	和田　勇	上根士郎	佐藤安太郎	
●辻増太郎	●丸山秋之助	●名引清五郎	●滝口　常	
西萩三之助	●飯森　進	●洞地安次郎	●田中作一	
和田勇作	●岩本栄治	●南　吾一	●加藤文男	
飯森忠男	藤田正一	庄司源衛門	●庄司富平	
渡瀬栄五郎	田並栄三郎	●寺本春治	大和一郎	
山本春治	丸山彌代	藤田清治	和田　文	
和田和夫	●藤田正治	前田　薫	滝口円治	
五味音松	●宮本力松	●須賀喜一郎	小山房夫	
塩見	漁野幹太			

D

和田弘一さんの時は十トン取って、特別賞与があった位だ。イデタ改造後インジンボートとなる（テンダ新平。ブローム式で長く流すため、あまり貝採れず。ファースダイバー（忘れて思い出せない）、セケンダイバー（藤田健児）は翌年ハンポンプ（コトロップ）に乗る。ハンポンプで二年十二、三トンずつ取った。イデタ翌年からは飯森忠男が乗る。クレビーのダイバー（不明）。丸山（リデアのダイバー、九州）、本田（メビーのダイバー、九州）

E

在ブローム市　（東）自由渡船（池の山の人）

ブロームの大暴風雨の時ブロームで七十人位死んだそうだが、コーセキは曇っていて、割合に静かだった。私は西濠州の暴風雨の時は北に居り、北濠州の暴風雨の時は西濠州に居り、助かった。

F

前佐五郎	上根　清	前林之助	
和田泰蔵	中道辰一	岸佐太郎	
柳瀬益己	渡瀬芳夫	藤田孫一	
立畑熊二郎	根木庄三郎	太地秋夫	
宮本（ツル川）	仲　正一	下憲太郎（シケで死す）	
佐々木輝治	清水寅吉	奥　充二	

G

夏目万太郎（オンスローの社）でヘッドダイバーをしていた。子供はオンスローの社に来ていた。

南洋の海でよく出会ふことだが遠くからみると波が立つているので浅瀬かリフと思つて近づくとマグロやカツオの群で（日本の漁師はナムラと云ふ）あることが多い

こういふ所に出会つたら魚はいくらでも釣れる、又ダイバーについた魚でもケン〳〵といふ擬似針でシビけば いくらでも釣れますが、あまり釣つても仕様がない時は釣では切つてはなせば皆何度かえゆきます

十月中頃からは海も濁り、あまり貝もとれないので、あちらの島、こちらの島かげと風をよけて投錨し亀かえし（産卵としてベッコウ亀を捕える）してベッコウでいろ〳〵のものをつくつて日本へ帰るときの土産にします

十二月十日頃（早い事もありおそい事もある兎に角大潮の時）皆の船がそろつて久し振りにコーセキの港に入ります、そして貝を揚げダイバーの荷物をダイバーの宿に揚げて、それからテンダー、クローの荷物も揚げてキャンプ生活にうつります

それから各々のテンダーの指図で潜水用具（ポンプ、パイプ、ヘルメットガスレット、ドレス、靴）船の道具一切を陸に揚げて、船の中の害虫を殺すため船を沈めます

流れるものはすべて釘付けにしておきます 二潮位水漬けにしてから船を浮き上らせてマングローブの辺りの船の引付け場所に乗り入れて土俵で船が傾かない様にして四方に錨をやり動かない様にして来年の仕事に差支えのない様にして正月を迎えます

乗組が決つたらテンダーの指図で船を修理したり帆、ロープ其他の修理を毎日〳〵行ひます（日曜日は休み）

十月振りの陸上生活ですから皆うれしくて楽しく作業をします

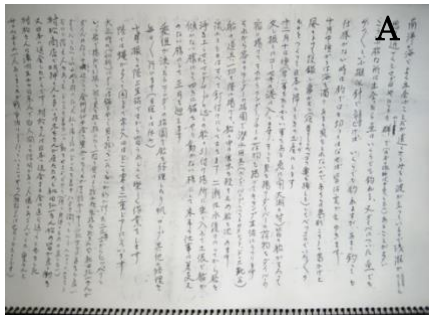
陸では蝿が多くて困るので家の入口はどこの家も二重ドアーにしています

大正時代（初期）はダイバーは錨をやつて貝を採つていたらしいが彩が行つた二三年からヒツペリといつて船で場所を引張り廻し貝を採る様になり一段と貝はよく採れた弟子たち人や和田弘一さん外ダイバーに負け十噸近くとり金例は社や金を貰ひにもらつたがその頃から十トン以下ではあまり良い外ダイバーでないといはれる様になつた私の居る頃はドレスを着ず八ダカ潜りといえヘルメットガスレットなけで潜る人もあつたドレスを着ないと動きやすかつたから、（保し身体こためは良くない）

村松商店で明神の人の多いのは木本さんが居たためと和田弘一さん始め皆が良く働き又日本へ送金したからです、村松さんは日本へ送金する金は直ぐ送つてくれました

村松さんは瀬戸生れの日系人で白人間でも信用があり人徳のある人でした、奥さんとせの四子さん一人ありましたが戦争後はどうなつていることやら（村松さんは亡なられたそうです）

40　真珠貝採取の回想



A

南洋の海でよく出会うことだが、遠くから見ると波が立っているので浅瀬かリーフかと思って近づくと、マグロやカツオの群れで（日本の漁師はナムラと言う）あることが多い。こういう所に出会ったら、魚はいくらでも釣れる。又、ダイバーについた魚でも、ケンケンという疑似針でシャビけば、いくらでも釣れますが、あまり釣っても仕様がない時は針で口を切ってはなせば、皆何処かへゆきます。

十月中頃からは海も濁り、あまり貝もとれないので、あちらの島陰こちらの島陰と風をよけて投錨し、亀かえし（夜番をして、ベッコウ亀を捕まえる）して、ベッコウでいろいろのものを造って、日本に帰るときの土産にします。

十二月十日頃（早い事もあり、遅い事もある、とにかく大潮の時）皆の船がそろって久し振りにコーセキの港に入ります。そして貝を揚げ、ダイバーの荷物をダイバーの宿に揚げて、それからテンダー、クローの荷物も揚げて、キャンプ生活に移ります。それから各々のテンダーの指図で、潜水用具（ポンプ、パイプ、ヘルメット、カスレット、ドレス、靴等）船の道具一切を陸に揚げて、船の中の害虫を殺すため船を沈めます。流れるものはすべて釘付けにしておきます。二潮位水漬けにしてから、船を浮き上がらせて、マングローブの辺りの船の引き付け場所に乗り入れて、土俵で船が傾かないようにして、錨をやり、動かないようにして、来年の仕事に差し支えないようにして、正月を迎えます。乗組みが決まったら、テンダーの指図で船を修理したり、帆、ロープその他の修理を毎日毎日行います（日曜日は休み）。

十ケ月ぶりの陸上生活ですから、皆うれしくて楽しく作業をします。

陸では蠅が多くて困るので、家の入口はどこの家も二重ドアーにしています。大正時代（初期）は、ダイバーは錨をやって貝を採っていたらしいが、私が行った二、三年前からヒッパリといって、船で場所を引張り廻し貝を採るようになり、一段と貝はよく採れた。東孫太郎さんや和田弘一さんがダイバーになり、十頓近くとり、金縁時計や金を賞与にもらったが、その頃から十トン以下ではあまり良いダイバーでないといわれるようになった。私の帰る頃はドレスを着ず、ハダカ潜りといって、ヘルメット、カスレットだけで潜る人もあった。ドレスを着ないと動きやすかったから（併し、身体のために良くない）。村松商店で明神の人が多いのは木本さんが居たためと、和田弘一さんはじめ、皆が良く働き、又日本へ送金したからです。村松さんは日本へ送金する金は直ぐ送ってくれました。村松さんは濠州生まれの日系人で白人間でも信用があり、人徳のある人でした。奥さんと女の御子さん一人ありましたが、戦争後はどうなっていることやら（村松さんは亡くなられたそうです）。

When we see waves breaking from a distance, which are often seen in the sea of the South Seas, we wonder if there is a shallow or a reef there, however, as we get close to it, we often find out that it is a large school of tuna or bonito (Japanese fishermen call it "*Namura*"), which is often the case. We can catch the fish as many fish as we like when we come across such a place. In addition, we can catch a plenty of fish around the divers by floating lures; this fishing method is called "*Ken Ken*" When we catch too many fish, we release them by cutting their mouth with a lure, and then they go somewhere.

Because the sea becomes muddy from the middle of October and not many pearl shells are caught, we anchor our ship in the lee of an island to avoid winds and do "*kame-kaeshi*" (to catch Hawksbill turtles during the night watch) and we make various things with tortoiseshells and bring them as souvenirs when we return to Japan.

A On around 10 December (the date may be earlier or later, anyway, at the time of the spring tide) all the ships return to the port of Cossack together after a long absence. And we unload the pearl shells and the baggage of the divers to their accommodation, then the baggage of the tenders and crews were unloaded, then tenders and crews started camping. Under the direction of each tender, we remove all the diving gear (pumps, pipes, helmets, corselets, dresses, shoes and so on) and the equipment of the ships to the land, and sink the ships to kill the pest in them. All the things that might wash away are nailed down. We let the ships soak in the water for the duration of the two tides, then let the sunken ships float off and move them to the mangroves' shore, anchoring them with sand-bags in order that they do not lean nor move. By doing so, we are able to welcome the New Year without being concerned about the next pearl shell fishing season. As soon as crew members are chosen, we start repairing our ships including sails, ropes and so on under the direction of our tender every day (we take a rest on Sundays). Because it is for the first time in ten months to live ashore, everybody works happily.

As there are many flies on the land, which irritate us so much, every house has a double-door-entrance. It is said that the divers used to cast anchor and collect pearl shells in the early days of the Taisho period, then, two or three years earlier than my arrival, they adopted a new way in which they would collect pearl shells by being pulled along by ship, which was called "*Hippari*", and this produced the better results for the pearl shell fishing. Mr Magotaro HIGASHI and Mr Koichi WADA became divers and were given gold-rimmed watches and money as bonuses when they collected nearly 10 tons of pearl shells, but, around that time, it came to be said that divers who collected less than 10 tons of pearl shells were not good enough. The time when I returned to Japan, divers came to be said that dives without wearing a diving dress, which was called "a naked diving", only wearing a helmet and a corselet. They did this because it was easier to move without wearing the dress (it was not good for their health though). Many people from Myojin[1] were working at Muramatsu Store because Mr Kimoto was there and Mr Koichi WADA and others worked so hard that they could send money to Japan. Mr Muramatsu made remittances to Japan immediately when we asked him to do so. Mr Muramatsu was an Australia-born Japanese who also had credit with the white people and was a person with virtue. He had a wife and a daughter; I wonder what happened to them after the war (I heard Mr Muramatsu had died).

[1] 「明神」, a village in Wakayama Prefecture

三　藤田健児のコサック回想記

藤田健児のコサック回想記(1)

序

この記録は四十五年前の話で、今は鉄の輸出で新しい町が出来ている(高校の地図もかわっていた)。この記録は大ざっぱな記録だが、家の者はこんな事には何も興味はないらしいので見せてはいないが、私達外国で永い間働いたものに取っては貴重な憶い出がある。一緒に渡航した五人のうち、私だけが残っているが、今にして思えば、誰かいて、話をたしかめたいものだ。

(コサック市を日本人はコーセキといっている)

潮風と共に

青年時代　久し振りに串本に出て、桟橋で潮風に吹かれて海を眺めていると、懐かしい濠州の生活が瞼(まぶた)に浮んで来る。十七歳の頃病気(2)で三、四回那智丸に乗って京都の大学病院へ治療を受けに行ったことはあったが、船に乗ったのはこれが初めてだった。当時に若い者は尋常高等小学校を卒業すると、総体に山林業の仕事に就き、丸太切りや下草刈り等の仕事をしていたが、私は病身の為仕事もあまり出来ず、徴兵検査も免除となり、その後は幾分健康を取り戻していたが、各部落ごとに青年会があり、各部落が集って村青年会となり、郡青年会もあったが、私達は郡青年会第二部で、年に一回あるいは二回郡青年大会があり、出席しないと過怠金を取られた。明神青年会には山口義太郎さん、浜静さん等徒走競争で優秀な人があり、応援は大騒ぎで夜の明けぬ内に家を出るような騒ぎで、郡大会に行くのが楽しみだった。各字(あざ)の青年会は十七才から三十才まで、入会した時は末座に座って、いろいろと用事聞きをしていた。

当時二十歳前後の男の賃銀は力量のあるものは日当三十八銭、普通の者で三十銭前後だった。若い者が十五名も二十名も一緒に働きにゆき、半年で私は二百五十円もらって帰ると、父母は大そう喜んで、まず神様に供えよと申されたのを覚えている。三年近く病気で遊んでいたので、父母も私が健康になったのを非常に喜んで、神様に御礼を申すようにとの事であったと思う。

当時まんじゅうは一個二銭で大きかった。五厘の菓子もあったように思う(米は一升二十五銭)。こんな時、村の収入役の木本吉太郎さんが来て、「どうだ、外国へ働きに行ってみる気はないか」といはれ、折よく根木、飯森、瀬上、滝口の四人が行かれるというので、私も決心して渡航する事に決めた。雇主は日本人で村松次郎という人で、現地で真珠貝採取業を営み、商店も経営し、白人の社会でも信用のある人であるとの事だった。なお、木本吉太郎さんの弟栄五郎(後の明神収入役)さんもテンダーとして、同会社におられ、和田弘一さんがテンダーとして働いておられるので、新しく渡航する私達も安心してゆく事ができたわけで、全然未知の土地へ行くという気がしなかった。

串本・神戸・シンガポール　串本より紀州航路の那智丸(約一〇〇〇トン)に乗り、大阪に向って出発したのだが、日時、時間ははっきり覚えていない。この航路はどういうわけか、丁度波の荒い潮岬を通る時に客に昼食を出すので、皆船酔いしているので、昼食は食べられないので、私達五人が相談して今日はうんと食べて船員を困らせてやろうという事になり、他のお客さんの分まで平らげてしまった。そして、おかわりだ、おかわりだと言ったので、船員に「ええかげんにしなさい」といって、叱られた。

夜大阪の天保山に到着、瀬上君が都会の生活になれて、よく何もかも知っておるので、瀬上君の指図通りにして神戸についたが、神戸館(3)に迎えに来てくれるよう電話をかけたのに、かけ方がわからず、電話機をなぐったりどやしたりして困っていると、順番をまっていた人が、「そんな事をしたら、電話をこわしてしまいますよ、何処へ電話するんですか」というて、結局その人に頼んで神戸館へ電話してもらい、神戸館から迎えに来てくれたが、その時は電話する時金を入れなかったので通じなかったのでした。瀬上君もそのことまでは知らなかったそうで、あとで皆大笑いしました。

それから神戸で服装を詰エリの服(4)に着かえて、当時は学校の先生様でも詰エリの服をきている時代だから、私達は悠々と街を歩いた。いよいよ出発で、多分ブラジル丸(九五〇〇トン)に乗り、途中上海に寄り、揚子江の広さにびっくりしたが、上海の支那人が船へ栗を売りに来たので栗を買ったが、一番先に買うと山盛りで、だんだん少しになってゆくのが面白かった。また、サンパツ屋も来て耳もきれいに掃除してくれたが、大きい刀のような刃ものを上手に使っていた。

上海から一人の支那人と一緒になったが、無論言葉は通じないので一つ一つ漢字で紙に書きましたが、和製漢語でも意味は通じました。彼の筆談に依ると、彼は外務省の役人でシンガポールに行くんだとのこと、見た目では非常におとなしい真面目そうな人だった。私達は彼を信頼していたが、香港についた時、彼は上陸するのだが一緒にゆかないかというので、皆彼について上陸し、店舗などで売っている品物をみて、これは何程だとか、これはいくらだとか教えてくれたが、彼は「用事で一寸出掛けてくるから、何時には必ずここへ帰るから、このベンチでまっていてくれ」と言うので、私達はそのベンチで待っていた。すると、大きな印度人風の巡査がきて、このベンチは婦人用だから、こちらのベンチへかわりなさいとしぐさで、私達はすぐかわったが、香港は漢字が通用するので有難かった(何処にでも漢字で書いている)。

心配していた支那人も丁度時間にやってきてホッとしたが、ハシケで船へかえった。かの支那人とはシンガポールで別れたが、本当に親切であった。シンガポールのさつまや旅館に落付いたが、三階建ての立派な建物で、主人は潮崎の人で、支那人等を多く使っていた。主人も奥さんも良い人で、君達は働きに行くんだから、身体に注意しなくてはといろいろ親切に注意してくれたが、あまり暑いので、三階から細いヒモで氷をつって内緒で食べていて、奥さんに叱られたこともあったが、思い出話となった。神戸では、洞尾(うつお)(5)の渡瀬好夫外一名と同宿となったが、彼等は濠州のブルームへ行くとのことで賑かになったが、好夫は年が若いので何でも珍しいものがあればすぐ買って食べるので、それが心配であった。

シンガポールからコサックへ　シンガポールのさつまや旅館にしばらく居り、いよいよ外国船に

乗り濠州へ出発する。その途中、私達の乗用車が電車と衝突して、その電車がガーデンに突入して難を免れたが、タイヤなので被害はなかったが、運転手は時間がないというのでサインをして放してもらった。

濠州航路の船はジャワ、スマトラと過ぎたが、途中ブルームへ行くという馬来人等も乗り合せ、元ブルームで働いたこともある馬来人等もいて、片言の日本語で「小さいの小さいの」と言って可愛がったが、好夫は調子にのってますます賑かになったが、又おかしなものを買って食べるのではないかと心配した。

南洋では、船が港に入ると、カヌーに乗った土人がやってきて、銀貨を投げると海に潜って拾った。船の客が面白がって銀貨を投げていた。また柿のような果物を買って食べてみたが、しぶくて食べられず捨てたが、あとで聞いた話ではマンゴといふ果物で、二、三日すると熟してくるので、甘くなるということだった。これから南へ走ると、北濠州ウィンダムといふ街だが、港といっても両側にマングローブの一ぱい茂ったクリークで、潮の干満が烈しいので、汽船は上げ潮にゴトンゴトンと船底をこすりながら横になったり、縦になったりしながら、奥の方のウィンダムに着く。ここは牛肉のたくさん取れる所だが、缶詰にして、ダイバーボートでも澤山食べているとの事だ。やがて下げ潮に乗って外海に出る。

やがて長い長い桟橋の先にあるブルームの船着場についたが、ブルームの街は桟橋からずうと奥の方にあり、船は干潮時には全部干上り、マングローブのそこかしこにダイバーボートのマストが見えていた。無論汽船も干潮の時は干上り、日本ではみられない干満の烈しさに驚いたが、満潮時にブルームを出たが、台風がますます烈しくなり、それから汽船は何処の港にもつかず、一路終点のフリマントルに至り、この港で別の船に乗り換えて、又来た途を引き返し、コサックの港に着いたが、途中の船では、デッキの上のハッチの上にテントを敷き、その上に寝ていたが、金のある人達は皆船室に居て、私達日本人がデッキパッセンジャーとしてデッキで寝ているのが珍しく、みんなが眺めているのが実になさけなく、白人達や支那人たちが私達の詰エリ姿でデッキに寝ているのがよい見世物だったのだろう。あとで聞いた話では、今後は日本人はデッキパッセンジャーに乗ってはならないことになったそうだ。

コサックでの船上生活

操業船のメンバー　私達はコサック近くの桟橋(6)に降り、小さい船に乗り、コサック市に到着した。早速村松さんにも会い、いろいろの手続きもすんで、皆決められたキャンプに落付いた。もうほとんどの船(ダイバーボート)は沖に出ており、皆決められた船に乗ることになり、私は十九号に乗ることになったが、十九号はアントリハーバーに行っているので、そこまで和田弘一さんがテンダー(ダイバーは〇〇〇という人)をしているクレビー(C．8)に便乗して行くことになった。

コサック市は、昔は栄えた街だったそうだが、今はさびれた街で(7)、村松商店は相当大きな店で何でも売っており、主人の村松さんは肥った人で、物わかりの良い人で、白人間でも相当信用ある人物であることがあとでわかった。この奥の方にローバンといふ町があり、裁判所や郵便局、それに民家も二、三百戸あるそうだ。私達五人はローバンに行かずに、役人がコサック市に出張してサインを終った。

同行した五人はそれぞれ決められた船に割当てられて、別れ別れになった。私の乗ったクレビーは昼の満潮時に出港して、その晩はフライポン(8)の入口東側に投錨した。その日の午後、雷雲に見舞われ、その天地も裂けるようなカミナリに驚いた。翌日フライポンを通り、他の船の集っているアントリハーバーに到着し、私はダイバー、テンダーに御礼を言って、これから一年間乗る船のイデタ号(9)に乗り替えた。イデタ号は村松の会社の元船で、ボースン和智永治(ワチナガ　オサム)さん、ダイバー辻増太郎さん、テンダー木本栄五郎さん、クローは私のほか、南洋土人四名、計八名の乗組みだった。

ボースン始め皆さんが歓迎してくれたが、翌日から貝拾い、魚取り、亀捕りと毎日のように忙しい。テンダーの木本さんは一雨(10)の人で、何かと私のために種々の事を教えてくれた。土人の四名は片言の日本語で話しかけてくれたが、これからはこの土人達と仲よくやらなければならないので、一時も早く彼等の言葉を覚えなければならない。クローは私を含めて五人だが、コックは一週間交代でパンのこしらえ方、飯の炊き方も習わねばならない。これからの毎日は尻の皮が真赤になる程ライオン(オールのこと)も漕がねばならぬ。併し、毎日の魚取りが楽しみで、引き網を持って魚取りに行くと、良い時はレンゲ(テンマ)(11)に半分位も獲って帰り、他の船にもわけて上げることが度々だった。又砂浜にはハマグリがたくさんあり、島々にはいろいろの魚がたくさんあり、何といふ良い国だろうと思った。

操業法の革新と採貝量　ダイバーボートはこの頃はまだエンジンボートは一隻もなく、コサックすべてハンパンプ(12)式で英国のヘンキー(13)会社製のポンプを使用していた。三個のシリンダーで、外側のフライホイールの大きなのが二個つき、二人が両側で廻す仕組みになって、惰力で割合軽く回るが、十尋以上の深さになると、相当重い。ダイバーが潜る時、綱持ちのテンダーがモヤー(14)と合図し、その間は、クローは一生懸命早くポンプを回し、海底につくと、プランパーといって、その後は平常に廻すが、これが一番えらかった。船は帆船なので、帆で操りながらあちらこちらと走るが、二、三年前までは一々錨をやって、それからダイバーが潜り、あちらこちらと歩き廻って真珠貝を採っていたそうだ(15)が、私達の行った頃は、ダイバーは帆船にぶら下がり、帆で漕いでもらうようになり(16)、ダイバーも広く働くようになり楽になったが、その分テンダーが忙しくなり、テンダーが腰でおらえ、貝を見付けると、信号で綱を緩めてもらい、貝を採ったら、又「引け」の信号を送って、テンダーに引付けてもらって、思う存分にダイバーが働けるようになった。

アコヤ貝(右)とシロチョウガイ(左)
シロチョウガイは高級ボタンや装飾品の素材

ボースンの和智永さんは船では何もしないで、病気その他の用事の時は通訳に行ってくれたり、みんなの船の世話をしてく

れる佐賀県人で士族だそうな。私を大変可愛がって、舵取り等の注意をしてくれた。またダイバーの辻増太郎さんは三重県長浜の人で、休日(日曜日)には一緒に亀をさがしに出掛け、大がいの休日には連れてゆかれた。木本さんは私が病身だったことをよく知っていて、ダイバーは出来ないから、早くテンダーになるようにし、馬来語、英語、それにポンプの掃除や走るコース、その他テンダーとしての種々の必要なことを時には喧しい位きつく仕込まれたお蔭で、私はこの年一年間に同船の三人から教わった事柄を覚え、浅瀬の位置、コース、その他を幾らかでも身につけた。そして、翌年は辻さんがテンダーにしてくれたので、全く良いチャンスを握り、右の三人のお蔭と感謝している。

やがて、仕事も本格的に採貝シーズンに入り、いろいろの失敗も演じながら、ダイバーボートの仕事になじんで行った。一ケ年も経つと、運よく辻増太郎さんがテンダーにしてくれたので、それからはますます忙しくなった。その年は和田弘一さん(テンダー丸山秋之助さん・出雲(17)の人)、神竹正次さん(小川の人)、テンダー(木本栄五郎さん)、坂長次郎(池の山(18)の人)さん(テンダー奥実茂(中崎の人)さん)、和田勇(池の山の人)さん、岸佐一郎(池の山の人)さん等がダイバーになり、乗組員も変った。根木さんも二十二号(ダイバー東孫太郎(上野(19)の人)さん)のテンダーになった。東孫太郎さんは深水ダイバーで、皆と離れて働いていた。

これまでのダイバーの働き方はのんびりしていて、貝も五トンが普通で、八トン採ったら金縁時計の賞与があり、特別だったのが、若い新しいダイバー達は皆八トン以上を採り、年々採貝量が上がって、一〇トンを越すようになり、五トンダイバーは船を貰えない事になった。和田勇作さん及び飯森忠男さんの時代はハンドル・ポンプでも十三トンから十五トン採貝し、村松さんを驚かされた。インジンボートも多くなり、村松さんのボートも五、六隻残して、ポートダーウィンに進出し、後に残ったハンポンプの船は和田・飯森の二人を主軸に働き、別にオンスローに白人の会社が出来て、夏目、西地の両氏が主ダイバーとなって働いていた。オンスローの会社は五隻で、すべて串本・太地の人達で、ブルームから回った。北濠州に回った船はエンジンを取付け、日本の成長丸(20)の働いて居るメーブル(メルヴィル)島の北の深い場所で働き、三十五頓ずつ位揚げていた。私もメビー(*Mavie*)号のセケンテンダー(21)として乗せてもらった。五年居たが、その間に村松社では東孫太郎(上野の人)氏、木本留吉(一雨の人)が潜水病で亡くなられた。ダーウィンに来る前の年、同郷の名引清五郎(一雨の人)君が西濠州のマディアイランのカラー場所でパイプが海底のカラーに掛って亡くなったことがあった(名引清五郎君はダイバーになった年、死亡された(22))。

名引清五郎氏のお墓(コサック)

タニンバル諸島への航海　そんな時、ダーウィンに来て、多くの日本船や馬来人等のダイバーをしている何十隻の船を見て、不夜城のこの光景に驚いたが、日本船は船も大きく、又母船がついているので、一々港に入る必要もなかった(23)。

メビー号も大きく改造され(24)、日本エンジンを積んだが、コサックから南洋の国へ帰る土人を今年はメビー号で送ることになり、村松さんから望まれて、私は南洋へ行くことになり、仮の船長名義となり、支配人の東彦五郎さんが船医、丸山(大島(25)の人)君がインジニヤと三人とも仮名義で、土人十名ばかりに便乗の日本人二名を乗せて、ダーウィンを出港し、沖のネーブル島に一泊して、翌日濠州を発って、南洋のタネンバル(サマラキ)島(26)に向ったが、海図も何もなく、ただ、東さんが前に一度行ったことがあるというので、ただ勘だけで出発したものだ。暗い内に濠州を出発して、もう大体島の見える時間だと思って、マストに登ってみると、遥か西に雲が見えているので、コースを西に変え、一時間走ると、大きな椰子の木のある島が見えて、多くの船が走っているので、その後について行くと、ようやく目的地の島についたが、海図もない船で航海するのは心細いものであった。船は桟橋の近くに投錨すると、大勢の土人達が集って来たが、やれやれという気持だった。翌日からオランダの役人が来て、東さんといろいろと交渉し、送り返す人間を渡し、新しく連れて行く人間を雇い入れて行くのだが、船へは毎日満員の土人が遊びに来るので、その土人達に飯を食べさせてやったが、二、三日してまた濠州に帰ることになり、主人の村松さん宛に出発するという電報を打ってタネンバル諸島のサムラキを出発したが、濠州へ着いてから、沖の島で、暴風雨で三日間位滞在し、元のネーブルアイランの海峡をぬけて、無事ダーウィンに到着したが、主人は大変心配されたそうだ。メビー号はこの航海でペンキははげてしまっていた。主人はこの航海の謝礼(ボーナス)だといって、月給のほかに金一〇磅を下さった。

コサックへの帰還・帰国　私はダーウィンに居たのでは金は残らないからコサックに行こうと思い、村松さんに頼み、またダイバーの辻さんにも頼んで、西濠州へ呼び返してもらって、辻さんのテンダーになり、ダイバーのツライをしながらチャンスを待っていましたが、イデタ(一九号)が大修理をして大きくし、エンジンを据えて、ブルームからファース・ダイバー(27)、テンダー、インジネヤーを呼んだので、私がセケンダイバーとして乗ったが、ブルーム式の大ざっぱな働き方では貝は採れず、一年でハンポンプ(ハンドル・ポンプ)に変った和田勇作さんが帰ったので、コトロップといふ船にのり、それから自分の思い通りに働き、十三トン余り採貝した。イデタは飯森忠男さんが乗り、ダイバーとして思うように走り働き、エンジンポンプは初めてだが、二十三トンか五トン採ったように思う。

私は翌年も十三トン近く採ったが、身体を悪くして日本へ帰ることにしたが、丁度景気が悪くなり、シンガポールに到着して見ると、昔と異なり、支那人の排日が盛んで、危なくて外へも出られなかった。中々日本行きの汽船が来ないので、十八日も船を待たされ、ようやく汽船に乗ったものの、香港・上海には寄港せず、真直ぐに神戸に到着した。丁度四月一日だった。春なので、日本は支那で戦争はしているが、まだ港は賑やかで、日本の女性の服装はあでやかであった。それからは一〇日間で手続きを終り、紀州航路で家についたが、高い山もない広い国から十五年振りの故郷は山が迫ってくるようで、こんなに狭かったのかと疑ったが、息苦しい位だった。またこれから長い人生をこの狭い国で暮さねばならぬが、もっと濠州で居る間に金を貯めて帰ればよかったと今更思っても無駄なことで、まだ会社に預けていた金もそのままになってしまったが、まだ私よりも戦争で抑留されて、何年かを送って帰って来た人達の事を思えば、

まだよい方だ。私は後頭部の負傷でずいぶん頭が悪くなり、機械の事等も忘れるようになりました。これからは何事も忘れ、同級生でもビリであの世行きの切符を買って行きたいと思っています。

同級生の氏名は左記の通り

西　安一　筒竹健一　小泉長市　山根イチノ
神田一臺　仲さりえ　寺岡　丞　北裏みよ
根木伝太　武田ことみ　見瀬はつえ　硲　龍二
寺本栄蔵　名引まつ　矢敷正二　神野歌蔵
引地光治　田中こまつ　小谷コマス　日野千代
水上　龍　藤田健児　小山誉二　小山ヤス
屋戸昌夫　松下しめ　高尾愛子　井戸龍二
小谷コトメ　仲　一枝　後口安一　今見隆男
和田勇作　前田すみえ　水上清太　山口しまの

（次はニューギニアのことを書いている）

注

(1)藤田健児氏については、すでに序文において紹介した。当人の大学ノートへの下書きによると、オーストラリアへの渡航は一九二五(大正一四)年である。この回想記もスケッチブックとならんで、次女の碧さんに宛て、一九八四(昭和五九)年前後に書かれたものと思われる。翻刻にあたっては、原稿用紙への清書原稿をベースに、一部大学ノートの下書きを末尾に補った。原典に支障がないかぎり、読みやすくするために、適宜中見出し、小見出し、句読点を補い、段落をくわえた。また、当用漢字、現代仮名遣いにあらためた。翻刻者が若干の注をほどこした。

(2)ご遺族によると、胃潰瘍が持病だったらしい。

(3)一般に移民者や出稼ぎ者の宿泊する旅館。「神戸館」は当時の神戸市栄町六丁目一番邸にあった。

(4)学生服のこと

(5)和歌山県東牟婁郡古座川町洞尾

(6)コッサク最寄りのサムソン岬の桟橋

(7)コサックについては、序章の「藤田健児スケッチブックと回想記への誘い」を参照のこと。

(8)Flying Foam Passageの東の入口。日本人のあいだでは、そこを「フライング・ポイント」と称していたのかもしれない。スケッチブックを参照のこと。

(9)イディタ(*Editha*)号

(10)和歌山県東牟婁郡古座川町一雨(いちぶり)で、藤田健児氏と同村である。

(11)レンゲはボンウッド製の小艇 dinghy のこと。

(12)潜水服を着た海底のダイバーに船上からパイプラインで空気を送った。数人のクリューが交代で空気を圧縮するポンプを回した。それを「ハンポンプ(ハンドル・ポンプ)」と呼んだ。オーストラリア北東部の木曜島

では、大正初期にエンジンによる機械コンプレッサーが導入されはじめた。コッサクは古い漁場で競合もなく、旧式のままであった。

(13)ヘンケ(Heinke)式

(14)モアー・エヤー(more air)

(15)これを、アンカー採貝方式という。

(16)これを、「打瀬」ないし「引っ張り」方式という。

(17)和歌山県東牟婁郡串本町潮岬出雲(いずも)

(18)和歌山県東牟婁郡古座川町池野山

(19)和歌山県東牟婁郡串本町潮岬上野か

(20)一九三一年以降アラフラ海へ日本から直接出漁し、公海上で操業した丹下福太郎船主の生長丸であろう。

(21)セカンドテンダー、船首側で潜水するセカンド・ダイバー(表ダイバー)の命綱をあずかるテンダーである。

(22)二〇一七年九月初めに鎌田真弓、田村恵子、村上雄一の三人が藤田氏のスケッチブックのアーカブ化の予備調査のためにコッサクを訪れた。その一画に日本人墓地があった。もっと多くの日本人が埋葬されたのであろうが(たとえば、一九二二年に撮られた日本人墓地の一角を示す写真には、一四基の木製の墓標が整然とならんでいる)、七基の墓碑が確認された。そのうち、和歌山県関係者は三基である。そのなかに名引清五郎氏の墓碑があった。ローマ字で記された日本人墓地の案内板には、大正四(一九一五)年九月一〇日死去、享年二四歳と明記されていた。しかし、藤田氏の記述「ダーウィンに移動する前年(一九二九年)」とは違っていた。墓碑自体の元号は不明であった。名引氏以外の墓碑の元号が大正であったから、二〇〇五年の修復時、案内板には一九一五(大正四)年と誤って記載されたと推測される。なお、その後、串本町姫の尾鼻悟先生を通じて和歌山県東牟婁郡古座川町明神直見(めぐみ)にご遺族が見つかり、コサックに墓のあったことに驚き、喜んでおられたらしい。菩提寺で過去帳をお調べ下さり、清五郎さんの兄の名で菩提寺に届けられ、一九二九(昭和四)年が正しいことが確認された。

(23)日本から直接のアラフラ海出漁は一九三一年から始まるが、おそらく藤田氏がダーウィンで従事した最終年と思われる一九三五年にはミクロネシアのパラオを基地として三一隻が出漁しており、しかも二〇〇トンクラスの母船や運搬船三隻が漁場とパラオ基地とを繋いでいた(友信　孝『アラフラ海と私』日宝真珠株式会社、一九七七年)。

(24)メビー(*Mavie*)号は太平洋戦争勃発後海軍に徴用された。一九四二年二月一九日の日本軍によるダーウィン爆撃でダーウィン港に沈められた最初の船であった(Maxine McArthur, Uncommon Lives-Muramats, unpublished manuscript, no date)。

(25)和歌山県東牟婁郡串本町大島

(26)タニンバル諸島

(27)ファースト・ダイバー、責任ダイバーと呼ばれ、採貝の主軸となる。

〈重複する部分も多いが、以下、大学ノート下書きによる補記〉

西濠州へ働きに行ったのは、その当時家の方では皆山林の仕事に使われていた。山林業務（主に草刈り仕事）では、賃金は安く（一日三十銭位だったように思う）、明神から働きに濠州へ行っていた人は皆成績がよく、金も家に送り、真面目に働く人ばかりだったので、先輩の木本栄五郎氏、和田弘一氏、それと奥実蔵、神竹正次（治）氏、又、ブルームへは前氏兄弟などが居て、皆評判がよかった。丁度、木本さんの兄の木本吉太郎（元収入役）が私達を雇ってくれたので、渡航することにした。約束の多分旅費全部会社持ちで、金五十円、前貸ししてくれた。併し、現地へ到着した時は、旅費は半々との事だった。

大正十四年〇月〇日

木本吉太郎氏の御世話にて、西濠州コサック市の真珠採取業をする村松商店に雇われて行く事になる。根木重治、瀬上貫一、飯森進、滝口常、藤田健児（五名）、串本より紀州航路那智丸（一〇〇〇トン級）に乗り、出発す。

丁度潮岬沖で昼飯を出すので、御客様が船酔いして食べない。五人は酔わないので、腹いっぱい食べて、まだ持って来いと言って、船員からおこられた。

午後〇時、大阪天保山桟橋着。それより電車にて神戸の神戸館に行く（瀬上君が前に電車に乗ったことがあるので）。服装は黒の詰エリ上下。

大正十四年〇月〇日

神戸館出発（多分、ぶらじる丸五千トン位）

途中、上海、香港を経て、シンガポールに着く。船中、上海では支那人から栗を買う。一番先に買ったものは一番多い。だんだん少なくなる。上海から支那人の外務省の官吏という人と一緒になり、筆談で種々話をした。香港も案内してもらい、そこのベンチで何時に来るから待っておれと言われたので待っていると、巡査が来て、こちら側は婦人用だから、男子用のこちら側にかけよと言うので、その通りにして待っていると、丁度時間に、彼の支那人が来て、一緒に船に帰った。

〇月〇日

シンガポールのさつまや旅館に着く。三階建てで、大きい。三階に泊ったが、さつまや主人は潮岬の人で、何かと注意してくれた。神戸館では、濠州のブルームへ行く洞尾の渡瀬好夫外一名と出会い、面白く、それから一緒だった。

大正十四年〇月〇日

シンガポール出発。途中、自動車は電車に衝突したが、電車はゴムタイヤだったので、ガーデンに入り、危うく難をのがれた。運転手がサイン。そして、濠州航路の外国船に乗船、シンガポール出港。途中、ブルームへ行く馬来人等が乗っていて、片言の日本語でしゃべったり、スマト

ラやジャワでは、小さい舟で果物を売りに来た。何から何まで珍しいものばかり。柿のようなものを買って食べてみると、シブクて食べられないので捨てたが、後で聞くと、二、三日置けば、甘くなるとのこと。渡瀬は身体も小さく若いので、馬来人から小さいの小さいのと可愛がられた(ジャワ)。今のジャカルタを過ぎ、北方オーストラリアのウィンダム(ここは周囲がマングローブ、ホワイトマングローブ・ブラックマングローブ。満潮(アゲシオ)時でなければ入れない。干潮時は半分あまりも干上がる)。上げ潮を待って、汽船がゴソゴソこすりながら、横になったりしながら入り、下げ潮に乗って外へ出る。それから、ブルームに着く。濠州は潮の干満が激しいので、汽船は大潮に出入りする。ブルームは長い長い桟橋で、汽船が着くと、次の満潮まで待つ。干潮の時は船の下まで行って歩いて見た。何十隻もあるダイバーボートも全部干上がって傾いている。ブルームを出てから大暴風に会い、コーセキ(コサック)には寄らず、そのままフリマントルまで進行した。フリマントルから別の船に乗り換えてコーセキ着。

フリマントルから乗ったお客の人のうち、日本人二名と、他に明神の井戸平吉さんが見送りに来ていた。

デッキパッセンジャーと言うのは便乗者という意味らしく、デッキで寝ている我々をもの珍しいらしく種々の人が見に来て、はずかしかった。帰った二人の日本人は私達に食事をおごってくれたが、時々遊びに来て、いろいろ日本の話をした。名前は西向(にしむかい)[1]の寺田さんと南さんとの事だった。

汽船に乗船している乗客は皆キチンとした服装をしているが、我々は詰エリの服で、余程おかしかったのだろうと思った(それからは、日本人はデッキで乗れない事になったと聞いた)。やっぱり金を持っていないと他人から軽視されることも感じた。支那人等は金持ちで、上等の船室におさまっていた。

ある時(昭和の初め頃)コーセキより車で半時間位の処にあるローバンと言う町に遊びに行った時の事だった。その町の酒屋に入り、一ぱい飲んで休んでいたところ、一人の白人の老人が我々を見て、初めはどこの人間かと尋ねていたが、私達は日本から来たのだと答えると、「何だ、お前はジャップか」と。しまいには侮り、あざけるので腹が立って、この野郎、かかって来たら、突き刺してやろうと思い、ちょうど裁ちバサミを持っていたのを腹のところにみがまえて、ジッと我慢をしていたが、ホテルの白人がその白人をなだめて他所へ連れて行ったので、何事もなく済んだが、その当時は、日本はドイツと仲良くなり、ドイツ人は我々にとても親切だったが、総体に白人は心の中では日本人を侮辱していた事だろう。

併し、我々の主人の村松さんは現地生まれ[2]で大学を出たおとなしい人で、白人の皆から尊敬されていた。これも金があり、財産もあったからだが、村松と言えば、何百マイル離れた港でも信用があり、私達に何でも貸してくれた。村松商店では、白人の青年を二人使っており、又、ジョージと言う白人のイレ〇ネ〇〇も、また、ミスタ・マカイと言う白人も一緒にボートを預けていた。ジョージ・ハッソンと言う白人は時々コーセキに遊びに来たが、ボートを持っていたが、事業に失敗し、村松の所有になっていた。

根木重治　グレシー　C.28
瀬上貫一　ダルシー　C.22
滝口　常　クレビー　C.8
飯森　進　ルビー　C.21
藤田健児　イデタ　C.19

注

(1)和歌山県東牟婁郡串本町西向

(2)D.C.S. Sissons によると、村松次郎は一八七八年日本の神戸で生まれている。父親の作太郎が一八九一年にコサックで、日本人真珠貝採取従事者や出稼ぎ者のために商店を開き、事業をはじめた。その二年後、一八九三年、一五才のころ、次郎はブルームを経て、翌一八九四年コサックに到着。その後、メルボルンの Xavier College に入学し、一八九九年にヴィクトリア植民地で帰化している。

Australian Dictionary of Biography, Volume 10, (MUP), 1986
(http://adb.anu.edu.au/biography/muramats-jiro-7689).

四　藤田健児太平洋戦争軍属としての従軍記

ニューギニア島・ウェワク

藤田健児太平洋戦争軍属としての従軍記（一）

戦争が烈しくなると、潜水夫は必ず召集されるので、私は召集令状の来ない内に自分から進んで入隊すると、南方のあたたかい所へ行けるので、陸軍船舶第〇〇〇〇部隊（確実でない）、広島江田島に入隊し、約一ケ月間訓練をうけたが、広島の生活はいろいろと変わった事もあった。

隊長は陸軍大佐で、多分（〇〇）と言う人（佐賀県人）、その下に見習士官一人、軍曹一人、伍長一人。隊長は威張ってばかりの男で、隊では皆から嫌われていた。広島で居る時は、私は走るのが遅いので、いつも曹長に軍刀の尻でひっぱたかれた。

（＊部隊で一番困ったのは砂浜を走らされると、いつも一番びりで、係の曹長に軍刀の鞘でなぐられた。あまり走ったこともなかったので、いつも一番びりの方で、やっと皆について行くのが精一ぱいだった。）

私は南方行きも決まったので、一度家に帰って来たいと思って、一人で広島の隊長室へ行った。夫人、子供と大きな家に入っていた。ぜいたくな暮しだったが（従卒付きで）、私は帰してくれるよう頼んだが、お前は家に帰ったら、隊へ戻らないだろうと言って、どうしても許可してくれなかった。両足をテーブルにのっけて応対していたが、どうもその状態に感心しなかった。

戦争はいやだが、やりかけたら仕方がない。軍隊へ入ってみて、軍隊の内部（うちわ）がとてもきらいだった。強いものが勝ちで、下士官は威張ってばかりで、大した仕事も出来ぬのに、毎日のほほんと暮している（これは自分の部隊だけかもしれませんが）、負けるのはあたり前だ。戦後、日の丸の旗をかかげるのを云々する者も居たが、私は日本という国がある以上、国旗を大切だと思う。長い年月外国にいて、久し振りに日の丸を見た時の感情は何とも言えない（以前、豪州にいた時、生長丸の旗をポートダーウィンで

（以下、ページ落丁）

（＊それから一週間ばかりして船に乗り、パラオの本島に着き、陸に上がったが、乗った船は新造船で、船の尻の下から砲とか上陸用舟艇機帆船などたくさん積んでいた。パラオの入口で敵の潜水艦の攻撃をうけたが、その時は総員非常呼集で上甲板に出て、救命ブイをつけていたが、高射砲でパンパンと水面を掃射していたが、航路が丁度両側の暗礁なので、幸い何事もなく港に入ったような次第で、とにかくパラオに上陸した。

パラオ本島で、一ケ月ばかりおり、部隊の持っている舟（約二、三トン位のハシケ）の操舵手と機関士の試験をうけ、私は操舵手の試験を一回でパスし、毎日パラオの波止場に行ったりしていた。

舟には、時々下士官がのり、食糧衣類等を持って帰ったりしていた。魚も肉も相当量もらって帰り、下士官等相当悪い事もしていた様子だった。一回私の舟へ同僚の舟からマグロを投げ込んで行ったりした。パラオでおる時に、知人の家を訪ね、その時民間ではあまり入りにくい煙草。自分は喫煙しないので貯めていたものを土産に持って行ったが、帰りには、その農家からバナナを大きな一房

もらって帰った。

いよいよ機帆船(千トン位)でパラオを出て、一路南へ南へと走ったが、途中変わったこともなく、三日位して東部ニューギニアのムシュウ島に到着したが、丁度敵の空襲に会い、一機落ちていたようだったが、その時はもう上陸して空襲をみていたが、人の話で、落ちたのはどうやら日本機のようだった。

それから直ぐ、部隊は山の中に家を建てたが、各自が小さい椰子の屋根葺きで、何ヶ所にも別れて海岸沿いに落ち着いたが、三十名ずつ位の住いだった。船舶修理用の工作機械は川向こうの林の中に建てた家へ揚げたが、舟はパラオで使っていた舟三隻位で荷物を揚げた。

私は船水夫なので、上陸後二、三日してから、ウェワクの停泊場司令官に呼ばれて一人出頭したが、停泊場司令官は五十才位の温厚な人であった。用件は沈没させられた船から食糧医薬品等を揚げる仕事であった。私の部隊から五、六名とそれから停泊場から大尉一名、下士官一名、兵隊十名で、大尉と下士官は時々だが、十名の兵隊はポンプをまわしてもらうため、その都度舟に乗ってきた。)

潜水夫をしていたとき、隊長からホウショー(褒賞)状をもらったが、破り捨てた。

私は部隊でただ一人の潜水夫だ。広島を出発してから上等兵の待遇だ。潜水夫にとっては、自分のツナを持つ人(2)が一番大切だから、部隊でも自分のよい人を選ばせてくれたので、私は九州の人で、私より五才位若い大伴宝蔵と言う人を選んだ。

早速(ママ)のきかん男だが、根っからの正直者で、本当に良い人だ。ポンプを廻す人は四名ずつ八名だが、これは停泊場司令部から回してくれる本当の兵隊だが、主に召集で来た人ばかりで、年令は私位か、少し若い人もいた。私は停泊場司令官から命令があって、私はウェワクの停泊場司令官に一人で面会した。この司令官のお名前は忘れたが、非常に温厚な人で、用件はウェワクの港へ沈んでいる汽船から荷物を引き揚げて欲しいとのことだった。停泊場司令部付の潜水夫一人居り(紀伊宮崎(3))の人で(名前を忘れた)、二人で仕事をするようにとのことだった。船は二隻で、私の船は部隊のもので、軍属ばかり五名ばかり。

ウェワクに着くと、停泊場から兵隊十名ばかり来たが、他に大尉一名、伍長一名と毎日十名ばかりやって来て、別の宮崎(三輪崎)の人の船も二隻で仕事をした。やってきた大尉の申すには、ジャワを出る時(沈んだ漢口(カンコウ)丸、七千トン余り)に荷物と兵隊が乗ってきたが、着いてすぐ兵隊は全部上陸(ウェワクへ)したが、荷物はまだすっかり揚げぬ内に敵に沈められ、しかし、兵隊も乗組員も一人も死んでいないとの事だが、航空兵団の機密書類の入った箱が一個沈んでいるはずなので(巾三尺、長さ五尺位、外側をアンペラで包み、その上を荷造りしている)、是非ともさがして揚げて欲しい。藤田さん是非とも頼みますと申され、見つからなければ、私は切腹ものだといわれ、毎日船にやってきて、仕事が終るまで一緒におられた。

毎日のように、敵の爆撃があり、午前中は大がい防空壕ですごして、午後敵の飛行機が行ってしまってから、桟橋から船を出し、仕事に行く。

防空壕は山の中腹へ奥深く両方から入れ、安全だが、中は暑いので、大がいの兵隊は入口で居るため、爆弾でやられる。揚陸した軍需品はトラックが少ないので、海岸へ積みあげ、テントをかぶせておいていた。手紙等の郵便物も届かないが、一回軍から配達された中に、一通の慰

ニューギニア島ウェワク駐屯地

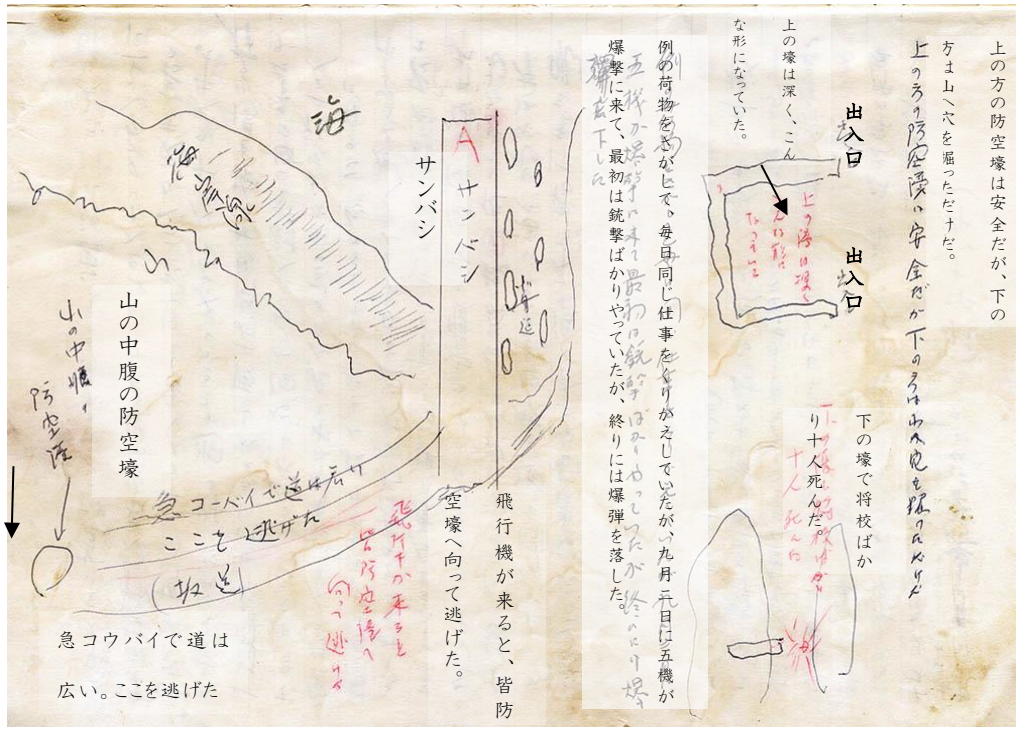
毎日のように敵の攻撃があり、午前中は大がい防空壕ですごして、午後敵の飛行機が行ってしまってから、桟橋から船を出し、仕事に行く。

九月二日の空襲で焼けてしまったが、松林の海岸に一ぱい軍需物資があった。

防空壕は山の中腹へ奥深く両方から入れ、安全だが、中は暑いので、大がいの兵隊は入口で居るため、爆弾でやられる。何百人と入っているので、中は暑いからだ。

揚陸した軍需品はトラックが少ないので、海岸へ積み上げ、テントをかぶせて置いていた。手紙等の郵便物も届かないが、一回軍から配達された中に、慰問状があった。それはおもやの宮本幸子さんからのハガキだった。本当にうれしく、返事は出せぬが、感謝した。

（藤田氏大学ノート下書きによる）



ウェワクの桟橋と防空壕（藤田氏大学ノート下書きによる）

問状があった。それはおもやの宮本幸子さんからのハガキだった。本当にうれしく、返事は出せぬが、感謝した。

例の荷物をさがして、毎日同じ仕事をくりかえしていたが、九月二日に五機が爆撃に来て、最初は銃撃ばかりやっていたが、終わりには爆弾も落した。

九月二日の爆撃はひどかった(昭和十八年)。荷役をしている兵隊や軍属もギリギリまで桟橋で仕事をしていたから、敵の飛行機が来てから皆逃げるので、敵に防空壕の所在地も知られて爆撃された。

九月二日は空襲警報が鳴り、しばらくして警報が解除されて自分たちも昼飯をこしらえたら行こうと思って、錨をあげて綱を解き、一寸離れたとき、突然低く敵機が五機飛んで来たので、味方の飛行機かと思ったが、敵らしいので、兵隊も軍属も皆防空壕へ逃げたが、生憎と、私達は船に火があり、それを消し、錨をやっている内に、私と井戸(月のせ)と岡田(広島)の三人が逃げおくれて、船にのこった。初めは面白半分で低く来る飛行機を眺めていたが、何回も廻って銃撃してくるので、海へ飛び込み、空襲の間だけ海に沈んでいたが、三回位して、どうもシツコイので、とうとう山の中腹の防空壕へ逃げた。そうしていると、今度は爆弾を落して行ったが、行った後で出てみると、どの荷物も大火となり、どんどん燃えているので、皆で消したりしたが、ほとんど燃やしてしまった。この日は宮崎の人(4)の船も焼かれて沈んだので、これからは私一人で潜水したが、一人だと心細かった。

大尉も毎日来たが、一時間だけ荷物をさがし、あと一時間は(＊タバコや薬品等の)荷物を揚げるように言ってくれた。船の周りもさがし、又元のハッチの天井に浮いている荷物を一つ一つ出してみた。ところが、天井裏に浮いた荷物(ベニヤ板で造ったガソリンを入れるタンク)の上にどうやらその荷物らしいのがあるので、(＊その荷物を何十分もかかって)無理に引き出して、その荷物を縛り、合図をして上へあげ、この荷物が航空師団の暗号書の入った荷物だったら、直ぐ私にあがれと信号が来るだろうと思って心待ちに待っていると、上からの合図でアガレとの事。私

も喜んで上がってみると、大尉は「藤田さん、ありがと、この荷物だよ、長い事辛抱して、よくさがしてくれた。これで私は喜んで日本へ行ける。本当にありがとう。私は日本へこれを持って飛ぶから、貴方から日本への言伝てを、私は必ず伝える」と申されるので、私は無事で居ますからと、東京の憲兵隊に居る弟にいってくれるよう頼んだ。それから、大尉は何か欲しいものはないかと申されるので、私は自分の部隊へサトウを一俵(三斗位入った)やって下さいと言ったが、大尉は、サトウは今ないので、他に何かないかといって、ウイスキー二本と缶詰等をくれたので、私は気持ちよく頂き、早速ウイスキー一本を自分の隊長に、一本は自分の部隊に持参した(缶詰も)が、私のその後の考えでは、あの大尉は恐らく途中で敵にやられて日本へ着いて居られないような気持がした。私はそれからしばらくウェワクに行き、(＊専ら医薬品やタバコ等)他の荷物等をあげていたが、もう負け戦で島へ帰り、部隊で食料さがしもしていた。ウェワクの東で沈んだ船から(五百トン位)備砲を取りはずし、傍らに五百トン位の船が来てクレーンで吊ったが、大坪君が上ゲの信号と間違えてドカンと落してきたので、又やり直しで吊り上げたが、私はあるいはこんな事もあるだろうと思って、遠くへ逃げていたから、ケガは無かったが、危ないところだった。

また、沈没船(二百トン位)のプロペラを外して揚げたりしたが、戦が負け戦で、私も上にあがり、それからは、潜水はしなかった。

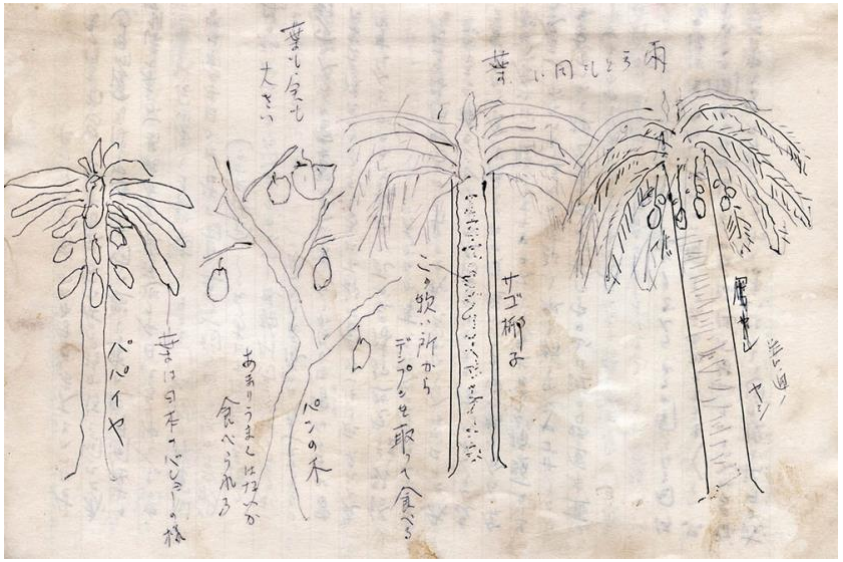
ニューギニア近辺では、(＊日本の海岸線から)ずい分多くの日本船が徴用されていたが、護る船が無いので、多く沈められたが、沈んだ船の砲でもあげて使わないと困ったのだ。

敵軍の攻勢はだんだん烈しくなり、その後私もマラリヤにかかり、島の向こう側の本島の(＊ウェワクの少し西の方の)野戦病院に入院していた。病院には薬はなく、マラリヤ等の病気はただ椰子の水を注射していたようだ。一ケ月位おいて、強制退院(手が回らないのと敵襲が烈しいので)させられ、夕方舟着場に来たところ、突然敵の魚雷艇に攻撃を受け、椰子林に逃げた。(＊太い椰子の木で体をかばい、ようやく暗くなって)しばらくして、敵(＊の魚雷艇)がどこかへ行ったので、舟艇で島に帰った。

(＊私も達者で、仕事をしている間は)隊長殿もチヤホヤして待遇も良かったが、マラリヤでねていると、隊長が見回りに来て、「お前も休憩しているのか、一度性根をたたき直してやるから、不動の姿勢をとれ」と言って、私が立つと、ひょろひょろするので、(＊はいていた)下駄でビンタをはられた。私は(＊クラクラとよろめいて立っていたが、)腹が立って隊長をにらんで居たが、実際たまらなかった。(＊それからはマラリヤも少し良くなり、働いていたが、戦は不利になるばかりで、各班に分かれてそれぞれ食糧を取りにジャングルに入った。)

私等の部隊は、戦闘はしない。ただ修理等をやっている部隊だから、恐らく戦争をした事が無かった。

その後、隊長室の前を通った軍属(多分東京の人)がパパイヤを持っていたので、隊長はそれを見付け、キサマはオレのパパイヤを盗んだのであろうと怒るので言い争いになり、その軍属はいきなり隊長を押さえつけ首を絞めたところ、隊長は「オレが悪かった、ゆるせ、でもお前は罰せないから」と誓ったので、首を絞めていた手をゆるめて、そのまま土人部落に逃げた。あくる日、隊長は他の部隊の兵隊にかの軍属を捕えさせ、死刑に処してしまった。隊長の言葉を真にうけ



駐屯地ムシュウ島の樹木作物（藤田氏大学ノート下書きによる）

て捕えに行った他の部隊の兵隊も呆れてものが言えなかったそうだ。この隊長は時々気狂いじみたことをする人で、自分の部隊では皆に嫌われていた。部隊の食料も始めからサゴヤシという木から採取した。（＊木の中味を細かく切り、水に流して沈んだ粉を取るのだ。）粉（デンプン）でつくった小さなダンゴ三つに汁だけ、それにさつまいも少し、主に葉だけの汁だった。それでも、皆あちらこちらと歩き廻って、食べられるものは蛇、ネズミ等を捕えて食べた。

はじめムシュウ島に行った時、土人部落に行き、一行の土人と仲良しとなり、よくキュウリやナスビをもらった。又、その土人（二十才位）は私の船に遊びに来て、缶詰やタバコ等を与えた。土人には、若い妻（十七才位）と母親（五十才位）があり、紹介された。会話は英語だった。終戦の時には、乗船する海岸に大勢土人が集められ、何処かの島へ連れて行かれる様子だった。

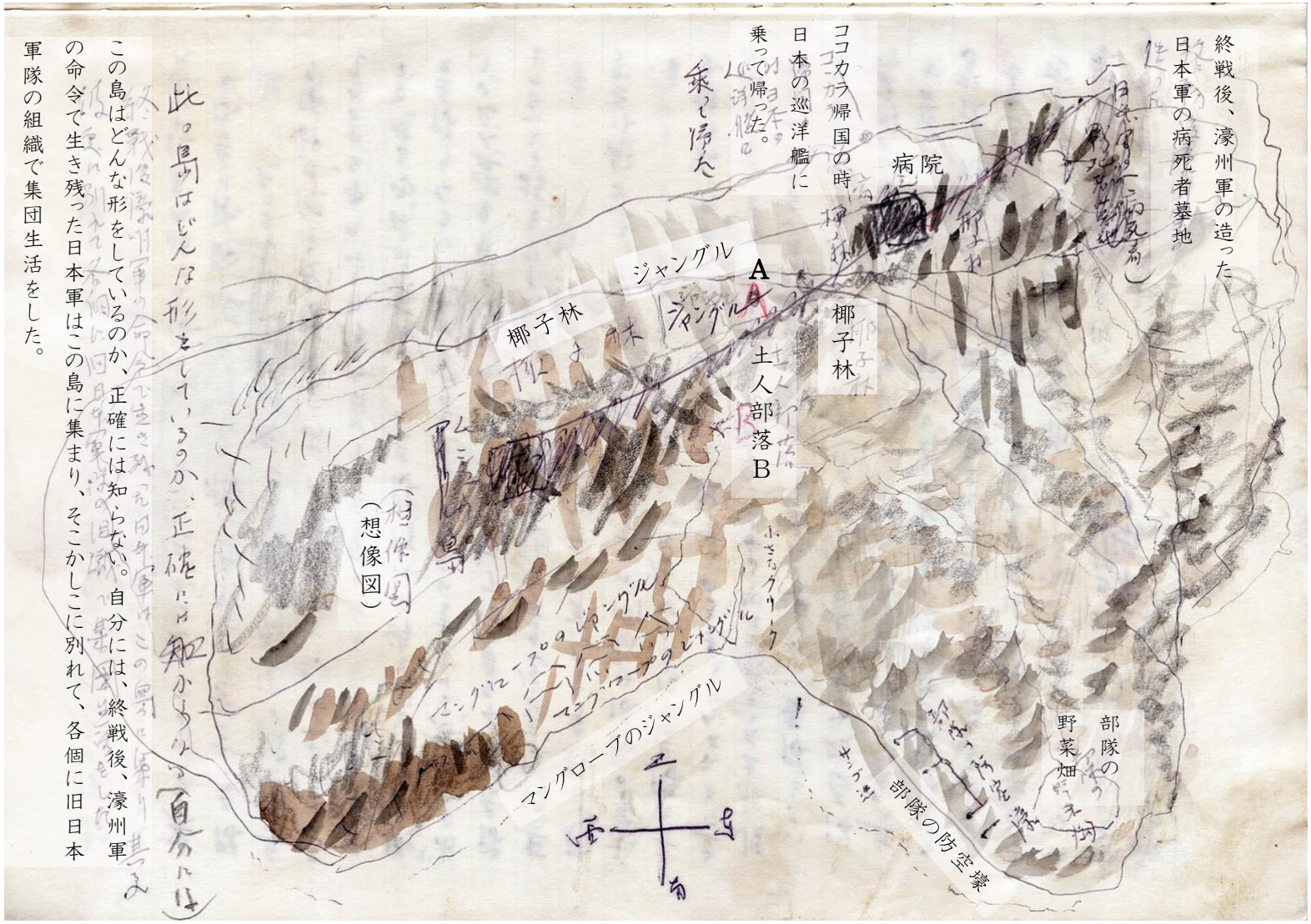
私は大勢の兵隊に混じって歩いて乗船する方へ行ったが、その土人のバアサンと嫁が私を見付けて手招きするので何かと思って行ったところ、バアサンは「ムスコは日本海軍に連れられて何処かへ行って、まだ帰らない」と涙を流していっていたが、私にサツマ芋の焼いたのを二、三個差出して食べよといって切ってくれたが、私は充分だからと断ったが、食べ物の少ないのに私にくれようと思う心が実にうれしかった。

終戦時には食糧がなく、戦争末期には、土人がサゴ椰子の粉を兵隊にとられるので、山の木の中にかくしていたが、それも悪い兵隊に取られたそうだ。私は濠州に居る時から土人を知っていたので、土人は大切にしなければならない、万一の時は土人の世話になるのだからといつも申していた。（＊この島の土人たちもどこかへ皆まとめて送られるので、海岸に集まっていたのだろう。土人の中には、老人、女、子供だけで、若い男はみかけなかった。）ニューギニアのウェワク近くの土人は、男は髪を長くしているが、女はザンギリ頭で、腰に縄をなったようなもの（手製麻製）を腰の回りにまいているだけ。座る時はアグラをかいている。足はハダシだ（男女共）。

戦争は負け戦で、自分の部隊は一ヶ所に集まり、空襲の時は海岸近くの固いサンゴ礁に掘ってある深い抜け通りになった防空壕に入っていた。この壕は奥の方に居れば絶対安全だが、ただ隊長の居る所だと長い時間自慢話を聞かされるので、皆敬遠した。

ある日、私は一人で向こうの川へボラ（魚）を取りに行って、木に登って魚の通るのを待っていると、突然一機の飛行機が飛んできて、いつもだと私の居る方ばかり空襲するのだが、その日は

藤田氏の駐屯地　ムシュウ島



（藤田氏大学ノート下書きによる）

運よく部隊の防空壕のある方ばかり空襲していた。私はマングローブの木に登っているのでよく見え、自分の上へ低く下って来た時は人間の顔が見える位なので、自分は見つけられないようにジーとしていた。私の居た方にはキカイ等がたくさんあり、船の修理等に使っていたが、今日の空襲はここも空襲しなかったので、後で部隊に帰ってみると、皆は私を心配して、多分今日はやられた事と思っていたが、無事で、皆も喜んでくれた。

又、別の日に土人部落へ行った時も、空襲は烈しく、土人部落のヤシ林は皆折られてしまい、大きな爆弾も落したので、生きた心地はしなかった。（前から土人は逃げて、一人もいない）。部隊の人達は多分今日は藤田はやられて死んだだろうと話していたそうだ。私達が生を長らえたのは椰子やパンの木、パパイヤ等があったためと思われる。日本兵が教えたサツマ芋も年三回取れるが、葉は年中食べられる。

戦争末期からは私の部隊は幾ケ所にも別れて、自給生活に入った。私は並木軍曹を長として、二十名位だったと思うが、A地区に居たように思う。並木軍曹はおとなしい人で、皆と仲良くやっていた。

ある日、私は抜け通っていない壕へ知らずに入ってみると、中には隊長が入っていて、一時間位隊長の自慢話を聞かされて、ただハイハイそうですかと言って聞いていた。いつも同じ話を何回となく聞かされ、うんざりした。

私は戦友たちとセオイコを背負って歩くのだが、足が痛くて、いつも遅れ勝ちだった（おくれると、そのままおいてゆかれる）。並木軍曹の班は山の中にヤシの葉で屋根をふいて家をつくり、サゴヤシから粉を取り、部隊へも送っていたが、一度牛を一頭捕えて、皆大喜びでスキヤキをして腹一ぱい食べたが、余った分は私の申し出で塩漬けにして後で食べたが、皆喜んでくれた。隊の方では、台湾人がイノシシを捕えたそうだが、我々の口には入らなかった。我々の島には、高射砲隊もいたらしいが、私達は会った事がなかった。終戦前、突然部隊長の死が発表されたが、

太平洋戦争中駐屯したウェワク近くムシュウ島の住民のスケッチ（藤田氏による）

（上記スケッチの書き込み）

昭和十八年～二十一年
ニューギニア・ムシュウ島の土人たちの家。たくさんの黄や赤の花や草木を植えている家は全部椰子の葉で粗末であるが、清潔である（家の内外も）。
男は髪を伸ばし（足はハダシ）。女は短くザンギリ頭だ。そして腰には麻の葉でつくったコシミノをつけている。
座る時は男女共、アグラをかく。

どんな事で死んだのか知らないが、常々部下に当りちらしていた部隊長だけに、皆がロクな噂はしなかった。当然、見習い士官だった人（少尉になっていた）が我々の隊長になった。（私の隊の外に、高射砲隊というのがあったらしいが、私の隊の隊長の指揮下にあったらしい。大佐だから。）

この島はどんな形をしているのか、正確には知らない自分には、終戦後濠州軍の命令で生き残った日本軍はこの島に集まり、そこかしこに別れて、各個に旧日本軍隊の組織で集団生活をした。

戦争が終ってから約一ケ年島に居ったが、日本軍は皆旧軍隊の階級そのままで、乗船まで続いた。

島の少し沖の方に、日本の巡洋艦（多分鹿島）が来て、濠州軍の上陸用舟艇に乗って艦に向ったが、途中彼等（濠州軍）は我々に向って、何か持っていないか、又日本製の品物を持っていないかと大声で尋ねたが、皆、だまっていた。

無論、英語のわかる者も居ただろうが、皆知らぬ顔をしていたが、少しでも英語のわかるものが居ても、うるさいから黙っていた。彼等は「この野郎何も出しやがらん」とずい分無礼な言葉もつかっていた。こうして、日本の巡洋艦に乗り移ったが、陸ではあまり食べていないので、軍艦でも、「日本へ帰るまでがまんしてくれ」と言って、小さいハンゴの中の小さいのに一ぱいずつ配られた。私は軍艦に乗るのは初めてで、兵隊で一ぱいだった。（こうして、広島の大竹に着き、上陸した）。巡洋艦の中は機械が一ぱいで、そのすき間に兵隊をつめ込んだ。一万トン巡洋艦だから、少々の波もこたえず、真直ぐに進み、気持ちの良い位だったが、兵隊や他の人達は船酔いをしていた。大竹港に着いて、汽車で和歌山に来てみると、戦争後のゴッタ返しで、金で品物を売っていたが、高かった。自分等は（和歌山の人間ばかり）イワシの生を買い、近くの自転車屋さんで煮てもらって、たらふく食べた。

我々が南方で居る時は多分負けた日本は滅茶苦茶だろうと思っていたが、負けた割合にそんな事はなく、駅に着くと、歩いて家に帰ったが、おぢいさんが大変喜んで、私（皆もそうだが）を迎えてくれたが、戦没者も多かった。兄も月ノセまで迎えに来てくれた。

注

（1）以下の翻刻にあたり、次のような方針にした。記録は大学ノートの下書きと原稿用紙への清書の二種類がある。記述内容はほとんど重複するが、大学ノートの下書きの方がいくぶん詳細であり、また鉛筆書きによる挿絵もふくまれているので、大学ノートの下書きをベースに、清書原稿の内容を（＊）を付して当該個所に補った。原典に支障がないかぎり、句読点を挿入し、段落を設け、当用漢字、現代仮名使い、仮名送りにあらためた。

（2）船の甲板上と海底の潜水夫が「命綱（ライフライン）」で連絡を取り合う。通常、テンダーとよばれる。

（3）和歌山県新宮市三輪崎の間違いであろう。新宮市三輪崎も、オーストラリア北部海域での真珠貝採取漁業に多くの出稼ぎ者が従事した。

（4）注（3）参照

五　コサック探訪記

コサック探訪記

鎌田　真弓

二〇一七年九月初旬、共同研究者の田村恵子さん、村上雄一さんとともにコサックを訪れた。一九五〇年代に廃墟となった町の調査とあって、準備段階では厳しい環境を覚悟した。オーストラリアの真珠貝漁の研究に関わるようになってからコサックという名前はしばしば耳にしていたが、そもそもどの辺りなのか、地図上で探す。どうやってコサックまで行くのか。幸い乾季ではあったが、レンタカーは四輪駆動車が必要なのか。旧警察の建物で宿泊できると聞いた時は、留置所を改装した部屋かと想像したほどである。シャワーは水しか出ないのではないか。冷蔵庫はあるので、食料は近くの町で調達してくるようにとのこと。私はこれまでも遠隔地の調査を行ったことはあるが、当地での調査経験のある研究者が同行していた。今回は三人とも未経験の場所である。とはいえ、管理人さんがいるようだし、携帯電話は繋がるし、何といっても一人ではない。

故・藤田健児氏をはじめとして異国の地へと働きに出た人たちは、多くの場合同郷者とともに、同郷者が迎えてくれる先へと渡ったのであるから、長旅であったとはいえ、その不安は私たちより小さかったかもしれない。スケッチに「ぜんざい」や「あんころもち」を食べたとあるように、コサックでも村松商店等を通じて日本の食材を手に入れていた。日本への送金も村松氏を通じて行われ、故郷からの便りも届いていたので、当時でもコサックやブルームと和歌山県南部の村々は、こんにち想像するほど遠く離れていなかったようである。

私たちは意を決して未知の地であるコサックでの調査に臨んだのだが、その滞在は、サンドフライというブユの仲間に悩まされた(咬まれると、とてつもなく痒い)以外は、拍子抜けするほど快適であった。パースとコサック最寄りの空港のあるカラサ間は一日に一〇便ほど飛行機が往復しているし、コサックやサムソン岬までの道は舗装されていた。数は少ないが、建物は修復されて案内板が建ち、観光客も見かける。カフェの看板もあるし、宿舎にはオーブンや電子レンジまで備わっていた。新しい案内板や旧裁判所を利用した博物館の展示からは、史跡として保存しようとする意気込みを感じる。ただし、その歴史研究は、ヨーロッパ人の入植開始からコサックの発展がピークに達した一八九〇年代までで止まっている。藤田氏が滞在した一九二〇～一九三〇年代の記述はほとんどない。日本人の足跡が顕著に見られるのはわずか七基の墓石の残る墓地だけであった。

私たちが持っていた藤田氏のコサックのスケッチ・デジタル画像が、史跡保存・観光開発の責任者やオーストラリア側の研究者の強い関心を引いたのは、コサックの歴史におけるアジア人の足跡の研究が不十分であることを物語っている。一八九〇年代のコサックの地図と藤田氏のスケッチとを照らし合わせると、歴史の新たな断面が見えてくる。それにしても藤田氏のスケッチの描写は詳細で正確である。展望台から臨んだジャーマン島は、潮が引いた浅瀬の向こうにあった。藤田氏が日々を過ごした風景を目の前にして、時を超えた旅を味わった気がする。

コサック写真集

コサック周辺衛星画像

干満の差が大きい地域で、画像は干潮時のもの

① コサック

コサックという町の名前は、1871年ピルバラ地区に植民地総督を運んだ戦艦コサック（Cossack）に由来する。当初は、1863年に最初の入植者を運んだ船の名前をとってティエン・ツィン（Tien Tsin）と呼ばれていた。1890年代前半に最も栄えたこの町は、1898年のサイクロンで大打撃を受け、また大型船の着岸が難しいために1903～1904年にかけて桟橋がサムソン岬（Point Samson）に移転するなど、20世紀に入ってから人口が減少し、1950年代に町は歴史を閉じた。

インド洋に面するこの地域は度々サイクロンや洪水に見舞われ、石造りだった建物以外はその形跡も残っていない。町跡は1977年にナショナル・トラストに指定され、1980年代に史跡の修復が始まった。2006年には西オーストラリア州遺産に指定され、現在は郵便局、警察および留置所、裁判所、税関、ボンド商店（Bond Store）、ノースウェスト商店（North West Mercantile Store）、ガルブリス商店（Galbrith Store）、学校の建物の修復が終わっている。2017年には、コサックの史跡の管理と観光促進は、カラサ（Karratha）市からローバーン（Roebourne）に事務局のあるアボリジニ組織ンガルマ・インジバルンディ基金（Ngarluma Yindjibarndi Foundation Ltd）に移管された。

かつての警察宿舎が宿泊施設（シャワーや台所付き）として提供されており、管理人夫婦が常駐しているが、食料品は近くの町で調達しなければならない。私たちが訪れたのは乾季であったため、キャラバンカーを引いてオーストラリア北部をまわる年配の観光客や、ボートを引いて訪れている釣り人たちを多く見かけたが、旧警察宿舎を利用しているのは私たちだけであった。観光客はサムソン岬やローバーン、カラサにある宿泊施設やキャラバンパークを利用しているようである。

② 波止場

水深が浅く大型船は入れないので、小型蒸気船が沖に停泊する船に乗客や積み荷を運んでいた。干潮時には川底にある朽ちた小型蒸気船のボイラーが見える。

岸壁が建設されて、感潮域にあった河口沿いの道路の浸水を防ぎ、道路沿いに建物が建てられた。かつてはローバーンとの間に軽便鉄道も走っていて、埠頭の近くに駅があった。

④　案内板

歴史遺産に指定されて、観光客用の案内板も整備されつつある。コサックの各所に立てられた案内板では、19世紀のコサック開拓の歴史や、真珠貝漁でのアボリジニの搾取や苦難に関する説明はあるが、日本人の足跡はほとんど触れられていない。

③　裁判所／博物館

裁判所が建設されたのは町が衰退期に入った1895年で、ほとんど使われなかったようである。現在建物は修復されて博物館として公開されている。内部には、復元された法廷や、町の歴史を記したパネルや展示物が置かれている。

展示は19世紀のコサックの発展史が中心で、真珠貝漁やアジア人居住者に関する言及はあるものの、日本人に関する説明はほとんどない。

村松作太郎の墓の写真が使われているパネルには、1875年には989人のマレー人が真珠貝産業で働いており、1901年のコサックの人口166人のうち83人がアジア人（日本人、中国人、マレー人、シンガポール人、マカッサン、フィリピン人、ティモール人）であったとあるが、村松を含む個々人に関する記述はない。

また、コサックが最も繁栄していた時代には、中国人が経営する商店２軒とパン屋１軒、シンハラ人経営の仕立屋1軒、日本人が経営する商店が１軒あったとある。1891年に村松作太郎がコサックで店を開いているので、おそらく村松の店のことであろう。1897年には村上安吉がコサックに渡り、西岡高蔵の下で働き始めたのだが、そうした記述も見当たらない。コサックの歴史における日本人の足跡に関する研究の必要性が感じられた。

⑤　村松商店跡

藤田スケッチ2の村松商店の廃墟でコサックロード（Cossack Road）とパールストリート（Pearl Street）の角にある。

1872年にハウレット商店（Howlett's Store）として建築されたもので、倉庫およびアジア人真珠貝漁師の宿舎として利用されたようである。同年洪水被害にあい、その後マクレー会社（McRae & Co.）が購入、増築された。1887年ファーカー・マクレー（Farquhar McRae）の死後、ノースウェスト商店と改名された。観光案内板にはノースウェスト商店とある。

⑥　村松住宅跡

村松商店の奥のパールストリート沿いに村松住宅があった。案内板はない。

藤田スケッチ2・4によると、コサックには村松商店が1軒、酒屋が1軒と、白人の家が15軒、日本人の家が4～5軒、石造りの家も皆村松の所有だとある。コサックの人口減少とともにこの建物も村松次郎が購入したのであろう。この区画一帯が村松の所有であった。

⑦　旧かめや／税関

藤田スケッチ3で「かめや」と記されている建物で、パールストリートをはさんで、村松商店の向かい側に建つ。1897年、税関（Customs House）およびボンド商店として建てられた。

1904年にサムソン・ポイントに桟橋が新設されたことに伴い、税関の機能は不要となったと考えられる。藤田氏の滞在時の1930年代は海亀の加工・缶詰工場となり、その後村松の所有となった。藤田スケッチ2にも元カメヤ、村松商店と記述されている。

⑧　旧ボンド商店／村松ハツ滞在場所

税関（かめや）の建物と繋がっているL字型の建物である。写真は波止場側から撮ったものと、裏庭から撮ったもので、ボンド商店だった場所は、宿泊施設の管理人夫妻が現在カフェを経営している。裏庭に面した一番左の部屋は、村松次郎の妻ハツが1946年にタツラ強制収容所から解放されてコサックに戻った時に住んだ場所である（次郎氏は1943年に収容所で死亡）。

ハツに誘われて、村上安吉の長女桝子と夫の村上義雄も子どもを連れてコサックに来ているので、ここに住んだのではないだろうか。1957年に日本に戻るまでここで暮らしたハツは、コサックの最後の住人だったと言っても過言ではない。

藤田氏のスケッチには、コサックからエクスマウス湾（Exmouth Gulf）の地域が戦後山本春治氏と飯森忠男氏が貝を多く取ったところと紹介されているので、ブルームと並んでコサックでも真珠貝産業復活の兆しがあったのかもしれない。今後の研究課題である。

⑨　ティエン・ツィン展望台からナニーゴートヒル（Nanny Goat Hill）を望む
藤田スケッチによれば、画面左上の河岸で「カバ磨り」が 行われていた。

⑪　日本人クルーキャンプ跡
　スケッチによれば、河口沿いのローバーンに続くコッサックロードに並行した道沿いに、日本人クルーのキャンプはあったようだ。写真のとおり現在はスピニフィクスの草原が広がるばかりで何もない。建物の土台もみつからない。

⑩　古井戸
　スケッチには岩山（ナニーゴートヒル） の麓に風車を使った水揚げポンンプが描かれている。井戸の跡のような穴を見つけた。

⑫　中国人菜園跡

　コサックの町外れの高台にある中国人が作った菜園の跡で、菜園を囲っていた石垣、鉄杭、タンク、建物跡などが残っている。中国人商店で売る野菜などを栽培していたようである。

⑭　日本人墓地

　コサックの町のはずれに位置する墓地は、ヨーロッパ人の区画とアジア人の区画に分かれているが、現在アジア人の区画にある墓石は日本人のものだけである。石碑は海に向かって建てられている。

　名前が刻まれた墓石は7基あり、ひときわ目立つのは村松作太郎（1898年没）の墓である。墓地の一画の海に一番近い場所には、「無縁法界」と書かれた1928年建立の供養塔がある。今回の旅では藤田スケッチにも記述がある名引清五郎氏のお墓も見つかり、写真をご遺族に渡すことができた。

　1922年6月撮影のその一角だけが写る日本墓地写真によれば、木製の墓標が14基整然と並んでいる。現在の墓地入口近くの名盤によると、2005年三井鉄鉱開発株式会社の援助で、残る墓石だけを中心に整備されたらしい。

⑬　チャイナタウン／ジャパンタウン跡

　中国人の菜園があった一画の道をはさんだ反対側はチャイナタウンと呼ばれた場所があり、藤田スケッチにある日本人ダイバーが住んだジャパンタウンもここにあったと思われる。建物跡のような土台が若干残っており、茶碗やガラス瓶の欠片が地面に散らばっている。

⑮　リーダーヘッド展望台からジャーマン島を望む

藤田スケッチに描かれている灯台のある島で、実は、コサックの町からは見えない。写真はコサックの町のはずれ北東方向にあるリーダーヘッド展望台（Reader Head Lookout）から眺めた、干潮時のものである。スケッチにあるように、灯台近くまで干上がっている。

ジャーマン島（Jarman Island）にある灯台は1888年に建設され、1917年に自動化、1985年にその役目を終えた。併設の宿舎とともに2013年西オーストラリア州の歴史遺産として登録された。

村松次郎が一時期この島を所有し、灯台の宿舎を利用して休暇を楽しんだようである。

⑯　サムソン岬桟橋

サムソン岬の旧桟橋近くに置かれている貨車。説明板などは無いが、桟橋まで引かれていた軽便鉄道で使われた貨車であろう。ローバーンとコサック、それにサムソン岬を繋いだ軽便鉄道は、初期は馬で引かれていたが、その後蒸気機関車が導入された。

コサックの桟橋は大型船に不向きであったため、1904年にサムソン岬に新しい桟橋が開設された。沖に600m延びた木造の桟橋は、客船だけでなく牛や羊毛や銅鉱の積出船が着岸し、ピルバラ地域の開発に重要な役割を果たした。当時は、フリーマントル（Fremantle）とジェラルトン（Geraldton）に次ぐ、西オーストラリアの第三の港であった。1960年代になって、鉄鉱石鉱山会社がダンピア（Dampier）やランバート岬（Cape Lambert）に自社の積出港を建設し、1976年にサムソン桟橋は閉鎖された。

こんにちのサムソン岬の町はリゾート地のような雰囲気で、キャラバンパークがあり、ガレージにボートを置いている住宅を多く見かけた。

あとがき

藤田健児氏のスケッチブックに出会ってから、ずいぶん時間が経ってしまった。

翻刻・編集への目論見が立ったあと、二〇一七年の秋、あらためてご遺族の所へ画像の複写に出かけた。残念なことに、スケッチブックはご自宅とともに水害の災禍に遭っていたが、消失の難を免れ、ご遺族が大切に保存しておいてくださった。

近年は社会的立場のちがいに応じて、複数の社会史の復原がもとめられている。真珠貝採取漁業についても、これまで主要な史資料として公的な文書類、新聞・雑誌の記事に基づいた復原研究が先行してきた。そこでは、外交問題や事件、それに訴訟沙汰の裁判記録があつかわれ、当事者たちが登場するとしても、第三者の手になる間接的な姿でしかない。そうした意味で、数は少なく、労多き作業かもしれないが、民間に残る日々の平凡な生活記録を当事者が書き留めた史資料の発掘は市井の人びとの生活の多面性を知るうえで緊急を要する課題であろう。

ここに公刊できる運びとなった藤田健児氏のスケッチブックと回想記は手前味噌かもしれないが、埋もれさせたり遺失させたりしてしまうにはまことに惜しい作品である。一方で厳しい労働の日々に晒されながら、他方で在地の自然とこれほど豊かに対話し、後年スケッチとして昇華された作品群に人の持つ可能性の深みを強く感じさせてくれる。翻刻・編集者一同がその作業過程で受け止めたスケッチブックの醸し出す味わい深い経験を読者が共有され、それにくわえて研究の一助になれば、編者一同、これに過ぎた喜びはない。

最後になったが、この記録の公刊にあたり、多くの皆さんのご協力を得ることができた。ご遺族の藤田正規ご夫妻をはじめ、現地でいつも便宜を図ってくださる和歌山県東牟婁郡串本町の尾鼻悟先生（串本町木曜島遺族会）、陰ながら支援の手を差し伸べてくださった串本町教育課の松山心太郎氏、英語の校閲については、マクシン・マカサーさんのお世話になった。

共同編集者の鎌田真弓さん、田村恵子さん、村上雄一さんの協力は言うにおよばず、原画のスキャンと修正ならびに解説ページに収めた衛星写真の取得という緻密な作業を進めてくださったゾラン・アレクシッチ氏、それ以外にも、スケッチブックに登場するさまざまな生きものたちの和名や英語名については、串本町の宇井晋介氏・田中真人氏、沖縄県立海洋深層水研究所の畏友鹿熊信一郎氏のお世話になった。ここに、心から感謝の意を表します。

なお　本書は日本学術振興会科学研究費基盤研究（B）「隣接国家の「辺境」から見る海境―豪北部海域の領域化と境域のダイナミズム」（研究代表者鎌田真弓　課題番号 17H02241）平成二九年度の成果の一部である。

Kenji Fujita's Sketchbook: Memories of Cossack, Western Australia (1925～1938) 2nd edition, reprinted and edited by Matsumoto, Hiroyuki *et al*. February 28 2022.

デジタル版第２版の発行にあたって

本書は「あとがき」と右の奥付のとおり、当初は共同研究の成果として冊子体で刊行された。その後、資料として高い価値が認められたため、解説部分の画像のカラー化と誤植等の訂正を加えたデジタル版を公開することにした（令和３年８月31日発行）。

この第２版では、英文読者のために、報告書冒頭の「一藤田健児スケッチブックと回想記への誘い」の章とスケッチ画像のタイトルに英訳を付した。また、デジタル版初版のスケッチブック画像の挿入箇所を一部変更した。

なお、デジタル版は日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）「国境を越えた地縁社会―豪州出稼ぎ労働者を繋いだ日本人商店主の現地適応戦術」（研究代表者鎌田真弓　課題番号 20K12380）令和３年度の成果の一部である。

令和４年２月28日

平成三〇年一月三一日発行

藤田健児スケッチブック

西豪州・コサック追想

（大正一四～昭和一三年）

原本所蔵者　藤田正規・藤田稔子

（和歌山県東牟婁郡古座川町明神一雨）

翻刻・編集者

松本博之（奈良女子大学名誉教授）

鎌田真弓（名古屋商科大学教授）

田村恵子（オーストラリア国立大学客員研究員）

村上雄一（福島大学教授）

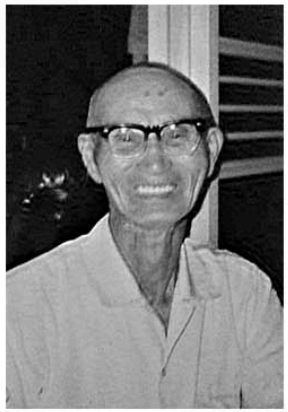
ゾラン・アレクシッチ

編集協力者

尾鼻　悟（串本町木曜島遺族会）

串本町教育委員会

マクシン・マカサー



藤田健児（1903～1996）

和歌山県東牟婁郡古座川町明神に生まれる。21ないし22才の大正14（1925）年に渡豪。西豪州コサックおよび北豪州ポート・ダーウィンで真珠貝採取漁業に昭和13（1938）年まで従事。太平洋戦争中はニューギニア・ウェワクで軍属として沈没船からの荷揚げの潜水作業にたずさわる。捕虜生活を経て帰国後、農業・山仕事を手がけながら、商店経営を行う。帰国後も豪州での船上生活の経験を活かして日常生活を送り、晩年、娘の勧めで、スケッチブックの描画と回想録を作成する。